２０２３年３月ＮＨＫ中央放送番組審議会

３月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２０日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、子どもの学びを応援する新たな取り組みについて説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋取締役会長兼取締役会議長）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	崎村　夏彦	（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	萩原　智子	（日本水泳連盟理事／シドニー五輪競泳日本代表）
	橋本　麻里	（公益財団法人永青文庫副館長）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜子どもの学びを応援する新たな取り組みについて＞

○　ＮＨＫは良質な学びのコンテンツを数多く提供してきたと思うが、インターネットの活用や多様性の理解など、時代に合った新しいテーマに取り組んでいることは、非常によいと感じた。その中で、ジェンダーや性の問題について、どのように取り上げようと考えているのか聞きたい。また、これらの教材を、学校や家庭で活用するためのノウハウを伝える取り組みがあるのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

性については、思春期の子どもに向けた番組に加え、それより小さな子どもを対象とした番組も制作している。再現ドラマのようなものを使い、見たあとで「されると嫌な気持ちになることについて、みんなはどう思うか。」というような形で話し合えるような番組にしている。子どもたちが成長するにつれて、性に対する意識をどのように身につけていくのか、先生たちが子どもたちに向き合ううえで何が必要かということが今後の課題だと考えている。使い方については、ヒントとなるような活用事例をウェブサイトに掲載しているほか、各地で定期的に行っているＮＨＫと学校の先生との意見交換の場でもノウハウを共有するようにしている。

（ＮＨＫ側）

ジェンダーに関しては、男の子はブルー、女の子はピンクといった色使いのような固定的な概念にとらわれないよう意識して番組を制作することに取り組んでいる。また、ＮＨＫは「NHK for School」の効果的な活用方法やノウハウを学ぶ研修会を開催している。

○　子ども、学校に限らず、学びをサポートすることはＮＨＫが公共メディアとして優先的に取り組むべきことだと思う。特に、子どもたちのメディアリテラシーを高めることができる取り組みを期待している。信じられる情報か否かをどう見抜くのか、不確かな情報を流したことがどれだけ多くの人を傷つけるのかなどについて、学ぶ機会を設けてほしい。関連団体が教材を販売するなどの展開もありうると思うが、透明性を持って取り組んでほしい。

○　「NHK for School」のウェブサイトを見た。漢字に振りがなが付いた子ども向けのページと、学校の先生向けのページをボタン一つで切り替えることができ、非常に利用しやすいと感じた。生理などデリケートなテーマについて、子どもたちが正しい知識を得られるように、積極的に取り上げてほしい。現在、「NHK for School」ではｕ＆ｉ「なんでズル休みするの？～生理」という番組を見ることができるが、生理について正しい知識を得ることで男女がお互いに認め合うことができたり、婦人科系の病気に気づく機会になったりすると思うので、さらなる発信を期待している。

（ＮＨＫ側）

ｕ＆ｉ「なんでズル休みするの？～生理」の動画は非常によく見られていて、ニーズがあると受け止めている。

○　ＮＨＫのコンテンツのほかにも文部科学省や経済産業省などが提供する学びのコンテンツがある。これらの提供元の枠を超えて、個々の子どもが何を利用して学んだのかの学習履歴を蓄積できる仕組みが必要だと感じている。不登校の子どもや休校などにより自宅で学習する子どもが、どの単元をどこまで履修したかということが分かるようになるとよい。経済産業省やデジタル庁では教育のデータの利活用の議論が進んでいるが、ＮＨＫもぜひ参画してほしい。また、学習コンテンツの利用状況の検証は、行政や民間と連携して進めてほしい。日本の教育コンテンツの丁寧さ、豊かさは世界の中でも誇るべきものだと感じているので、子どもたちがよりよく、より楽しく学べることができることにつながる取り組みを期待している。

（ＮＨＫ側）

ユーザーの学習履歴を蓄積することは、制約もあり、現在行っていない。

○　この取り組みに非常に期待している。学びには学校教育、生涯教育などさまざまな種類があり、ＮＨＫが提供する学びのコンテンツも「ＮＨＫキッズ」「NHK for School」「ＮＨＫラーニング」などさまざまなものがあるが、ロゴのデザインなどがまちまちで統一感がない。これらが学びに関わるコンテンツだということが一目瞭然に分かるユーザーインターフェースを工夫し、学習者がウェブサイトで求めるコンテンツにスムーズにアクセスできるようになるとよいと思う。

○　自分が子どもの頃に比べ、多彩な学びのコンテンツが増えていることに驚いた。取り上げるべきテーマは多いが、番組の数を増やし続けることは難しく、スクラップ＆ビルドが必要になると思う。どのような基準で取り上げるテーマを選定しているのか。

（ＮＨＫ側）

新しいテーマを取り上げるときに合わせて、既存の内容の見直しをしている。人員や予算に限りがある中、公共メディアとしての役割や視聴者から求められているものを意識しながら選定している。

（ＮＨＫ側）

全国の先生方とＮＨＫの制作者が意見交換をする会議を定

期的に開催していて、そこでの意見などを参考にしながら優先順位を決めている。

○　多文化・多言語への対応などに取り組んでいることを知って感銘を受けた。外国人に向けたやさしい日本語でのコンテンツはすばらしい。ただ、日本語が苦手な外国人にとって、このコンテンツにたどり着くまでが難しいと思うので、簡単に探せるような工夫をしてほしい。また、日本には選挙の投票率が低下しているという課題があるので、主権者教育に関わるテーマも取り上げるとよいと思う。

○　子どもの教育にどう関わったらよいのか悩んでいる親は多いと感じている。そのような親に対して、コンテンツの活用法を伝える取り組みがあると、より多くの家庭で使ってもらえるようになると思う。また、家族の介護やケアを担う子ども、いわゆる“ヤングケアラー”について、当事者たちは自分たちの置かれた状況に気づきにくい側面があると感じている。ＮＨＫのコンテンツが、自分の状況に気づくきっかけとなって、支援につながるようになればよいと感じている。

○　「高校講座」と「NHK for School」の動画を相互に検索できるようにするなど、コンテンツの連携を充実させる取り組みは、すばらしいことだと感じた。子どもたちが動画のリンクをたどって興味関心を広げることができるので、非常によいことだと思う。歴史ドラマが歴史に興味を持つきっかけになることは多いと思うが、史実とフィクションを混同してしまうことが往々にしてあると思うので、その区別に役立つコンテンツを提示するとよいと思う。また、コンテンツを見るのにウェブサイトのログインが必要な場合、障害がある人や外国人などにとってはログイン操作のハードルを高く感じることがあると思う。多様な人たちが使いやすいインターフェースを期待している。

○　家庭の保護者に対して「NHK for School」の活用のしかたや、子どもへの教え方の手引きのようなものがあるとよいと思う。子どもが学校で使っているタブレット端末を家庭に持って帰ることがあるが、子どもが十分に使いこなせていなかったり、親が使い方を理解できていなかったりすることもあるので、活用のしかたが分かるようになると非常に有益だと思う。また、ことばでの説明を理解することが苦手な子どもには、映像で説明すると理解がしやすくなると思う。子どもも使いやすく、親もサポートしやすいウェブサイトになってほしい。

○　すばらしい番組が多くあると感じた。「ｕ＆ｉ」は話題に上がった生理に関するもののほか、電車の席を譲るか譲らないかというテーマも扱っていて、大人でも気付き

のある興味深い内容だと思う。教育現場の長時間労働も課題になっているので、教師の負担軽減に役立つサービスとなることを期待している。

（ＮＨＫ側）

学校での学習でだけでなく、家庭でも日常的に使ってもらい、知ることが楽しい、分かることがおもしろいと感じてもらえるようなコンテンツを提供していきたい。そのような観点で「NHK for School」のウェブサイトの中に家庭での学びを応援する「おうちで学ぼう！」というページを開設している。

○　対話型ＡＩの登場など、ＡＩの進化を実感している。将来はプログラミングに頼ることなく、自然なことばでＡＩに指示が出来るようになるというような予測も聞く。今後に向けて、ＡＩとのつきあい方、距離感のようなものを学ぶことができるコンテンツができるとよいと思う。また、中高生など若い世代では、ＳＮＳを通じて他人と簡単に比較されることで、自信をなくしメンタルが不調になる人が増えていると感じている。自分を見つめてメンタルをケアするのに役立つコンテンツもあるとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

ＡＩとのつきあい方など、変化が著しい分野のテーマについて、学習コンテンツを作ることは難しさがあるが、将来に向けて検討したい。メンタルケアのコンテンツについても検討していきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月４日(土)のＮＨＫスペシャル南海トラフ巨大地震「第１部　ドラマ」（総合後7:30～8:48、後 10:00～10:54）と翌５日(日)の「第２部　“最悪のシナリオ”にどう備えるか」（総合後 9:00～9:54）を見た。最初に西日本で巨大地震が発生し、その後東日本でも巨大地震が連続して起きるという「半割れ」を想定し、ドラマをまじえることで、自分が体験しているような臨場感が生まれ、地震への備えについても、自分のこととして受け止めることができた。ドラマは地震発生前の平穏でありふれた日常風景から始まっていて、日常生活の中で、いつ地震が起きてもおかしくないことが伝わり、効果的だった。ドラマは東の「半割れ」の発生を伝える緊急地震速報で終わり、東日本の被害の実態は描かれなかった。大勢の死傷者だけでなく、東海道の大動脈が

寸断され、日本経済への打撃も深刻なはずだ。ドラマでは描かれなかった、より厳しい現実も直視しなければならないと思った。また、ドラマでは自衛隊の活動なども見たかった。

○　３月４日(土)と５日(日)のＮＨＫスペシャル「南海トラフ巨大地震」を見た。ドラマの舞台が連続テレビ小説「舞いあがれ！」でも舞台になっている東大阪の町工場であるのに加え、その工場の社長役が「舞いあがれ！」に出演している松尾諭さんだったので、連続テレビ小説の続きのような感覚で興味を持って見ることができた。

（ＮＨＫ側）

ドラマは、世の中の課題を自分のこととして考えてもらうために有効な手法だと考えている。今後もテーマに応じて効果的に取り入れていきたい。

○　３月４日(土)と５日(日)のＮＨＫスペシャル「南海トラフ巨大地震」を見た。若い世代をはじめ倍速視聴になれている視聴者にとっては、ドラマは前置きが長いと感じる。そうした視聴者にも見てもらうためには、もう少しテンポをよくするとよいと思う。巨大地震の恐ろしさを伝え、備えを呼びかけることは大切なことなので、より多くの視聴者に見てもらえる工夫を期待している。「南海トラフ」ということばは、被害想定域で地震が発生するたびにＳＮＳで頻繁に使われていて、そのまま番組の情報をＳＮＳで発信すると大量の投稿の中に埋もれてしまう恐れがある。番組の情報をＳＮＳで的確に届けるためには、番組独自のハッシュタグなどを加えて発信するのがよいと思う。

○　３月４日(土)と５日(日)のＮＨＫスペシャル「南海トラフ巨大地震」を見た。社会を取り巻くリスクに関する情報を関係者の間で共有し、相互に意思疎通をはかる“リスクコミュニケーション”の観点からも興味深い内容だった。ただ、首都直下地震など南海トラフ以外の地震のリスクについての言及もあるとなおよかった。ドラマを見ていて、南海トラフ地震の被害想定地域内にある原子力発電所の状況のことが気になった。事故の想定までドラマで描く必要はないが、その懸念についての言及があってもよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

今回は南海トラフ地震に焦点を絞ったので、南海トラフ以外の地震のリスクについては別の機会に取り上げたいと考えている。原子力発電所のリスクについては視聴者からも指摘があっ

たが、３月１８日(土)と１９日(日)のＮＨＫスペシャル「メルトダウン　Ｆｉｌｅ．８（前編・後編)」で東京電力福島第一原発事故の検証を行うことにしていたこともあって、今回の番組では触れなかった。南海トラフ地震の被害想定地域内にある原子力発電所の懸念についても触れるべきだったのではないかという指摘は現場に伝えたい。

○　３月１１日(土)のＮＨＫスペシャル「海辺にあった、町の病院　～震災１２年　石巻市雄勝町～」を見た。東日本大震災で津波にのまれ、患者と職員の９割が犠牲になった病院を取り上げていた。遺族や生き残った職員が、震災の直後では、ショックが大きすぎて語れなかった心の内を、少しずつ語れるようになっていることに、震災から１２年がたったこの時期にこのテーマを取り上げた意義を感じた。感傷的なナレーションや音楽を排した演出からは、真摯（しんし）な姿勢が伝わり、番組に対する信頼感を高めていると感じた。津波で亡くなった人の遺族、生き残った人それぞれの複雑な心情がそのまま描かれていて、ある遺族の「何とも言いようがない」ということばに象徴されるように、極限状況で人はどのように行動するべきかということは結論の出しようがないことだと感じた。そのうえで、病院を作る場所や制度の設計など、このような極限状況を作り出さないためにどのようなことができるのかということを考えるきっかけにもなる、非常に意義のある番組だったと思う。

（ＮＨＫ側）

この番組は仙台局のディレクターが現地に長く通って取材先と関係を築き、少しずつ話を聞いて制作した。淡々と伝えることで、失われたものの大きさ、亡くなった人たちの命の尊さなどを視聴者に感じてもらうことを意識した。

（ＮＨＫ側）

ナレーションを入れないドキュメンタリーの手法は７、８年ぐらい前から、「ノーナレ」などさまざまな番組で取り組んできた。今回の番組では、出演した人たちの声そのものの価値を最大限に生かすように制作した。今後もこの手法を活用した番組に取り組んでいきたい。

○　３月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「震災１２年　復興の地図～“希望の芽”を探して～」を見た。国勢調査などをもとに、東日本大震災の被災地の各自治体の性別や年齢別、職業別の人口増減を詳細に分析していて興味深かった。年長者が若い人に町

の復興、再生を任せることで、若い世代の人口が増加している宮城県女川町や、直営の保育所を開いたことで求職者が増えている水産加工会社などの事例は、被災地だけでなく、若い世代の減少に悩む全国の過疎地にとっても、ヒントになると感じた。ほかの過疎地についても国勢調査のデータ分析を基にした、若い世代を呼び込むためのヒントとなる取り組みを見つけ出すことを期待している。

○　３月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「震災１２年　復興の地図～“希望の芽”を探して～」を見た。国勢調査の結果について、知る機会が今まであまりなかったように感じるが、この番組で詳細に分析し、年代別、性別、家族構成別の人口増減を可視化したことは非常に興味深い。今回の分析だけで人口増減の理由を説明しきることはできないかもしれないが、一つの見方を示すという意味で意義があったと思う。若い人を呼び込む工夫、自前の保育所を設置した中小企業、地元産業とベンチャー企業の協力などの実例は震災からの復興だけでなく、少子高齢化に悩む日本全体にとってのヒントになると感じた。

（ＮＨＫ側）

この番組ではデータを通し、復興の現在地を考えてみようとした。全体的に人口が減っている被災地の中にも人口が増加に転じているところや、新しい産業が起こりつつあるところもある。それらを見ていくことで、少子高齢化が進む日本の問題解決のヒントも見いだせるのではないかと考えている。

○　３月１８日(土)のＮＨＫスペシャル　メルトダウン　Ｆｉｌｅ．８「前編　原発事故・危機の８８時間」（総合 後 10:00～10:54）と３月１９日(日)の「後編　事故１２年目の“新事実”」（総合 後 9:00～9:54）を見た。東京電力福島第一原発事故について、事故当時、アメリカでは原発事故が特にクローズアップされて、西海岸が放射能汚染される可能性があるとして市民にヨウ素剤の購入を呼びかけたり、原発の中で何が起きているのか専門家が分析したりするなど盛んに報道されていて、日本国内との違いに驚いた記憶がある。このように世界でも大きく注目された原発事故について、新たに分かった事実も踏まえて検証した意義深い番組だった。地震や津波に対する備えについてはもちろんのこと、原発事故の検証と事故対策についても伝え続けてほしい。

○　３月１８日(土)と１９日(日)のＮＨＫスペシャル「メルトダウン　Ｆｉｌｅ．８」を見た。東京電力福島第一原発事故の全体像について、最近になって分かった新たな事実を踏まえ、非常に詳しく説明していた。２号機の格納容器が大規模に破壊されず

に済んだことは偶然だったという説明には戦慄（せんりつ）を覚えた。「後編　事故１２年目の“新事実”」の解説はやや難しく感じたが、非常によい番組だった。

○　３月１３日(月)のクローズアップ現代「まだまだ拡大中！推し活パワーが世界を変える」を見た。外部の情報を自分なりに意味づけて世界を捉え直す心の働きを説明する“プロジェクション・サイエンス”という視点を用いて「推し活」を分析していたことが興味深かった。この番組をスマートフォンから「ＮＨＫプラス」で見ていたが、画面に表示されたＱＲコードからリンク先のホームページを参照しようとして、スクリーンショットを撮ろうとしたが撮れずに、参照できなかった。スマートフォンの「ＮＨＫプラス」の再生画面では、番組内で表示したＱＲコードの参照先のホームページのリンク先を別に表示するなどの工夫があるとよいと思った。

（ＮＨＫ側）

スマートフォンで「ＮＨＫプラス」を見ているときに、画面をタップして左上に表示される「ｉ」ボタンを押すと、番組の詳細情報を見ることができる。この詳細情報の中に番組の公式サイトへのリンクもあり、番組の概要やより詳しい情報などを見ることができるようにしている。

○　３月１３日(月)のクローズアップ現代「まだまだ拡大中！推し活パワーが世界を変える」で、出演者の写真を取り違えるミスがあったとの報道があった。「クローズアップ現代」はよい内容の回が多いが、タイムリーな話題を追い求めるあまり、制作に無理が生じている部分があるのではないかと気になった。拙速にならず、きちんと質が保たれた番組を制作するよう心がけてほしい。

（ＮＨＫ側）

この番組で、推し活女子専門ジムに通う女性を紹介した際に、全く違う人物の写真を誤って使用してしまった。この女性が自身のＳＮＳでリツイートした写真を、本人の写真と間違えて選び、最終的な確認をしないまま放送してしまったものだ。誤って紹介した写真の関係者、ならびに取材に協力いただいた関係者の皆様には大変迷惑をおかけした。「クローズアップ現代」は毎回さまざまな部署の人間が参加して制作しているが、編集段階から何度も試写を重ねて内容をチェックする体制をとっている。このような間違いが二度と起こらないよう現場で議論し、改めて取材の手順などを確認していきたい。

○　３月１３日(月)のヒューマニエンスＱ（クエスト）　シーズン２「“快楽”ドーパミンという天使と悪魔」を見た。一般的に「快楽物質」といわれるドーパミンが、学習のきっかけとしても働いていることを紹介していた。番組を見たとき、多忙のため気持ちが沈んでいたが、自分もドーパミンを働かせて活力を得ることができると思い、前向きな気持ちになることができた。

○　３月１５日(水)のクローズアップ現代「密着！賃上げ交渉　私たちの給料は上がるのか？」を見た。従業員の生活の苦しさなど、さまざまな理由から賃上げが求められている現状と、一方で、物価や光熱費の高騰で利益率が落ちている中小企業にとって、賃上げは簡単なことでないことも取り上げられていて考えさせられた。経営者と従業員を対立関係として取り上げるのでなく、労使双方で一緒に考えていかなければいけないテーマとして伝えていたことがよかった。介護、福祉の業界では、介護報酬が決まっている一方、光熱費の高騰などで厳しい経営状況になっている現状があり、ほかの業界で賃上げが進むと介護に携わる人材の確保が厳しくなるのではないかという危機感がある。このような特定の業界の経営の実態などについても踏み込んで取り上げてほしい。

○　３月１５日(水)の歴史探偵「ＶＲ探検！信長の安土城」を見た。現地の測量と当時の記録をもとに、安土城をバーチャル空間に再現したことに感銘を受けた。この映像は視聴者全体の資産として今後も活用できるものだと感じた。再現にあたって膨大な資料を参照したと思う。参照した資料の一覧を番組ホームページなどで公開すれば、その一覧にも資料としての価値があると思う。

○　３月１６日(木)のサラメシ　シーズン１２「仙台せり収穫メシ▽家族のごちそう定期便」を見た。宮城県名取市のせり農家を取り上げていた。農業の現場を紹介するのは、若い世代が農業に興味を持つきっかけになってよいと思っているが、冷たい泥水につかってせりを収穫する姿には、過酷な現場だと感じるかもしれないと思った。

○　３月１９日(日)のＮＨＫのど自慢「大分から生放送▽八代亜紀・阿部真央」を見た。インターネットで見つけた雑誌記事で「ＮＨＫのど自慢」の制作の舞台裏を知って興味を持っていた。番組には、地元愛の強さを打ち出す人、大切な人のために歌う人、歌うことの楽しさを伝える人など、個性豊かな出場者が次々と登場していた。限られた時間の中で１８人もの出場者を次から次に紹介しながらも、決してさばいているようには見せない司会の小田切千アナウンサーの技量にも感心した。来月からは男女２人の新しいアナウンサーに交代するとのことだが、番組に新しい魅力が加わるか楽し

みだ。「ＮＨＫのど自慢」を通して、地味な存在ながら長年にわたり続いている番組の価値を改めて認識した。マンネリにならないよう時代に合わせながら、よりよい番組となるよう期待している。

○　３月２０日(日)のダーウィンが来た！「鉄腕ＤＡＳＨとのコラボで調査！海の大異変」を見た。テレビ放送７０年の日本テレビとのコラボレーション企画で、ふだん日本テレビの番組に出演しているフリーアナウンサーの桝太一さんが出演していて、非常に活気があってよかった。クジラの鼻水を採取するという企画に子どもは夢中で、家族で楽しめるよい番組だった。

○　日本テレビを見ていたら、大喜利の番組にチコちゃんが出演していて驚いた。日本テレビとのコラボレーションのねらいを知りたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫは７０年前の２月１日にテレビ放送を開始し、同じ年の８月１日に日本テレビが放送を開始した。両者ともに７０年の節目ということで、６０年、６５年の節目に続き、コラボレーションした。今回は１週間にわたってお互いの人気番組、特集番組が連携し、３月１９日(日)にはお互いのスタジオで生放送の特集番組を放送した。ＮＨＫと民放は、日頃、しのぎを削り切磋琢磨（せっさたくま）する間柄だが、こうした取り組みを通じ、テレビ業界の仲間として、お互いのよいところを学び合い、視聴者によりよいものを届けることにつなげていきたいと考えている。

○　「列島ニュース」を見ている。全国に５４あるＮＨＫの各放送局が取材した地域のニュースを伝えていて、旬の話題、風物詩、祭りなど、それぞれの地域の文化について知ることができて興味深い。初対面の人と会話するとき、この番組で知った相手の出身地の話題を話すと会話が弾み、役に立つこともある。また、自分が住んでいた地域の放送局にかつて所属していたアナウンサーが、違う地域でニュースを読んでいるのを見つけると、非常に懐かしく、古い知り合いに再会したかのように感じる。このような楽しみ方もＮＨＫならではだと思う。

○　ドラマ１０「大奥」を見ていた。現代社会にも通じるテーマがドラマの中に投影されていて、非常に興味深かった。原作、脚本、演じる俳優ともすばらしいと感じた。続編を放送すると聞いているので、非常に期待している。

（ＮＨＫ側）

ドラマ１０「大奥」の原作には、パンデミック、ジェンダー、少子化問題など、今の日本と重なるテーマが詰まっていて、それを最大限に生かすことを意識した。秋以降に続編の「Ｓｅａｓｏｎ２」の放送を予定している。

○　２月４日(土)から５回にわたって放送された「東京の雪男」（Ｅテレ(土)後 9:00～9:30）を見た。山を降りた雪男が人間社会の中で暮らすという奇想天外なストーリーを通して、共生社会のあり方を考えさせられた。雪男とヒロインの人間の女性との結婚が法律上認められず、婚姻届を受理されない場面や、主人公の友人の雪男が勤務先の工場を解雇され、役所に相談に行っても「雪人は生活保護の対象外です」と突き放される場面からは、同性婚や外国人労働者をめぐる問題を想起させられた。他にも、食品ロスや野生動物との共生など、ユーモアあふれるラブストーリーを基本としながら、社会の様々な課題が織り交ぜられており、単なるコメディーを超えた広がり、深み、味わいがあった。

○　２月２４日(金)の新・にっぽんの芸能「燃え上がる情念の表現」を見た。５０分ほどの舞踊をいったいどうやって３５分の番組で紹介するのか気になったが、中盤を大胆にカットする代わりに、その部分のストーリーをスタジオで分かりやすく補足をしたり、副音声で主人公の関係性などストーリーの背景を詳しく解説したりしていたので、舞踊に詳しくない人でも分かりやすい内容になっていた。「新・にっぽんの芸能」は４月からリニューアルし、今より５分短い３０分の番組になると聞いているが、初めて見る人にも分かりやすく、今までの番組のファンも満足するような内容となることを期待している。時間が短い分、説明が足りなくなることもあると思うので、番組ホームページやＳＮＳで情報を補足するとよいと思う。古典芸能は、衣装など、視覚的に楽しめる要素が多いので、写真や映像を投稿するようなＳＮＳがよいと思う。

（ＮＨＫ側）

「新・にっぽんの芸能」はさまざまな日本の古典芸能の魅力を視聴者に知ってもらうことを第一の目的にしている。この番組で古典芸能に興味を持ったら、長時間の公演を見ることができる「古典芸能への招待」などで、本格的な公演も堪能してもらいたいと考えている。「新・にっぽんの芸能」は４月からリニューアルするが、これからも日本のさまざまな古典芸能の魅力をより豊かに伝えたいと考えている。

○　２月２５日(土)のＥＴＶ特集「ルポ　死亡退院　～精神医療・闇の実態～」を見た。虐待行為が日常的に行われていた精神科病院の実態と問題の背景を、綿密な取材で明らかにした意義のある番組だった。入院患者を支援している弁護士の取り組みに寄り添うように伝えていたこともよかった。患者の家族、他の病院、行政が“必要悪”としてこの病院を頼っていたことに、問題の根深さを感じた。また、２２年前に４０人ほどの患者が不審な死を遂げる事件が起きた埼玉県の病院で院長をしていて保険医の資格を取り消された医師が、資格を再取得してこの病院の院長となっていることも問題だと感じた。非常に複雑な問題だと感じているが、今後も取材を続け、問題を明らかにしてほしい。

（ＮＨＫ側）

「ＥＴＶ特集」では６年前から精神医療の課題に取り組んできた。この番組は、病院の実態を告発する情報が寄せられたことをきっかけに慎重に取材を続け、報道部門とも連携して、この問題がより多くの人に知られるよう心がけた。根の深い問題だが、解決につながるすべはないか、社会と一緒に考えることができるように、これからもこのテーマに取り組んでいきたい。

○　「中国語！ナビ」と「ハングルッ！ナビ」を見ている。語学だけでなく、その国の文化についても取り上げていて、楽しく学ぶことができる。ラジオも含め、ＮＨＫの語学番組は質が高く、多くの人が活用していると思う。今後も、この質を維持し続けてほしい。

○　２月２５日(土)の「ロシア　衝突の源流」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 7:30～8:59)を見た。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻がはじまって１年にあたり、さまざまな番組を見たが、この番組が一番ＮＨＫらしさを感じた。ロシアとスラブ民族の歴史を振り返り、外部からの圧力に対しあらがう彼らの心理状態などを深く掘り下げていた。日頃、近現代史を学ぶ機会は少ないと感じているが、このような番組を通して、今世界で起こっているニュースの背景を知ることができると思う。このように背景を時間をかけてじっくりと伝えることができるのはＮＨＫならではだと感じている。１２月から衛星放送が新しくなるが、このような番組を引き続き放送してほしい。

○　国会で放送法についての議論が続いている。受信料で維持されているＮＨＫだからこそ、政府に忖度（そんたく）することなく、公平・公正な情報を伝えていることを、この機会にしっかりと発信してほしい。

（ＮＨＫ側）

放送法第４条で、放送事業者は番組編集にあたって政治的に公平であるべきことが規定されている。この規定が倫理規定なのか、法規範性を持った条文なのかについては双方の説があると承知しているが、ＮＨＫとしてはあくまでも自主・自律を貫き、公平・公正な情報を伝えていくことは変わらない。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２３年２月ＮＨＫ中央放送番組審議会

２月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２０日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１６人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２０２２年度第３四半期・１０～１２月）について説明があり、続いて「２０２３年度国内放送番組編成計画」についてと、「インターネット活用業務実施計画」について説明があった。その後、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、今後１か月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋代表取締役社長執行役員）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	磯崎　功典	（キリンホールディングス株式会社代表取締役社長）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	﨑村　夏彦	（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本水泳連盟理事／シドニー五輪競泳日本代表）
	橋本　麻里	（公益財団法人永青文庫副館長）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２０２２年度第３四半期・１０～１２月）について＞

○　デジタルサービスの戦略を考えるうえで、ウェブやアプリの利用者がそれぞれどの

ような経路で流入してきているのか把握することはとても重要だ。そのようなデータも指標として示すとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

いわゆる一般の検索エンジンからの流入なのか、ＮＨＫのホームページ経由で流入しているのかなど、流入経路のデータは確認している。

○　資料がブラッシュアップされ、より分かりやすくなったと感じている。人々の“テレビ離れ”が進む中、ＮＨＫは比較的健闘している印象だ。ＮＨＫプラスの利用者は順調に増えていると思うが、放送直後の番組の見逃し配信を検索しやすくするなど、利便性の向上に取り組んでほしい。

○　番組の見られ方について詳しい説明があったが、それぞれの番組のＳＮＳアカウントごとのフォロワー数の伸び率などを分析して可視化することも重要ではないか。また、ＳＮＳがＮＨＫプラスの視聴にどの程度貢献しているかが分かると、今後の展開のヒントになると思う。

○　質的指標について、今後は放送波ごとでなく予算管理に即したジャンルごとの分析への変更を検討しているとのことだが、とてもよいと思う。ＮＨＫが公共メディアとしてどのようなコンテンツをどのように伝えるかを考えるとき、ジャンル別に管理することは理にかなっているし、視聴者に対する透明性も高くなる。ＮＨＫが力を入れるポイントも分かりやすくなるので期待したい。

＜２０２３年度国内放送番組編成計画
およびインターネット活用業務実施計画について＞

○　Ｅテレの新設番組の内容からは、これまでにない番組を生み出そうという気概を感じる。これから公共メディアとして取り組むべき新しいコンテンツはＥテレで放送している番組の中にあるように思う。よい意味で斬新な番組が数多くあるので、Ｅテレに注目が集まるようなＰＲの方法を考えて実践してほしい。

＜放送番組一般について＞

○　１月２２日(日)のＮＨＫスペシャル　半導体　大競争時代　第１回「国家の“命運”をかけた闘い」と、２９日(日)の第２回「日本は生き残れるのか」を見た。半

導体をめぐる国家間の攻防について掘り下げて伝えていた。アメリカと中国の対立を受けた日本や台湾の立ち回りなど、報道で部分的に見聞きする情報がその背景も含めて丁寧にまとめられていて、誰にでも分かりやすい内容だったと思う。半導体ビジネスがどのようなものであるのかがよく理解できた。業績のよい企業は、事業の継続性をしっかりと考えて技術開発をしていることもよく分かった。日本企業が失敗した要因が体系的に分かりやすく解説されていたと思う。ただ、半導体メーカーのＯＢなど興味深い出演者ばかりだったが、専門家が１人いてもよかったのではないか。熊本県への台湾の巨大半導体工場の誘致については、専門家の意見を聞きたかった。

（ＮＨＫ側）

第１回では半導体をめぐる大国の攻防を中心に伝え、第２回ではかつて電子立国といわれた日本の現状について伝えた。現状を正確に把握し、日本が生き残る策がどこにあるのかについて考えることをテーマにした番組だ。長年半導体について取材してきた記者が中心になって、視聴者に分かりやすく伝えることを心がけた。

○　２月１２日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀　第８回「“貿易立国”日本の苦闘～グローバリゼーションはどこへ～」を見た。「混迷の世紀」のシリーズは毎回楽しみに見ている。企業活動や外交、ＡＩを活用した分析や、著名な専門家へのインタビューなどさまざまなアプローチで迫っていた。これまでは経済的合理性だけを追求してきた企業が、政治的なリスクを考慮した国際的サプライチェーンを構築する様子が紹介されていて考えさせられた。ロシアによるウクライナ侵攻後、“新冷戦”ともいわれる分断が生じているが、この分断が続くと西欧諸国にとって経済的にマイナスであるという事実には驚かされた。また、専門家がグローバリゼーションは形を変えて続いていくと語っていて、全体的に深く考えさせられ、すばらしかった。「人権デューデリジェンス」や「グリーントランスフォーメーション（ＧＸ）」の問題など、山積する課題の中でグローバリゼーションは混迷を極めていると思う。引き続きこのような番組を制作し続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

ロシアによるウクライナへの軍事侵攻によりグローバリゼーションが混迷を極める中、日本企業が苦悩する姿を伝えた。ダボス会議も取材したが、名だたる企業の経営者もグローバル化のあり方に危機感を持っていた。日本企業が今後どのように

生き残るのかについて、丁寧に描くことを心がけた。

○　２月１９日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀　第９回「ドキュメント国連安保理～密着・もうひとつの“戦場”～」を見た。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まってから１年が経過した。国際連合安全保障理事会は何をしているのか、そして本当に戦争を止めることができるのかについて、深く切り込んで伝えていた。国連安保理が設立された背景やその役割についてもしっかりと説明されていて、すぐれた番組だった。安保理研究で著名なイェール大学のポール・ケネディ教授へのインタビューは歯切れがよく印象に残った。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻の問題については、ロシアや中国を含む各国が参加する場で議論することが重要であることを改めて感じた。歴史の本質に迫るＮＨＫならではのドキュメンタリーだと評価したい。今後もこのような番組を制作し続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

国連安保理が難しいかじ取りの中で模索を続けている様子を伝えることができたと考えている。

○　１月１５日(日)の日曜討論「揺らぐ国際秩序　２０２３　世界は　日本は」は、国際社会の今後の見通しを専門家とともに考えるという内容だった。今までだと男性の専門家ばかりとなることも多かったように思うが、今回は出演したパネリストの５人中４人が女性だった。「出演者の選定にあたっては多様性を意識する」という考え方、またジェンダーにとらわれず専門性の高い方々の出演が、番組制作にしっかりと反映されていると感じた。

（ＮＨＫ側）

「日曜討論」に限らず、ジェンダーを含めた多様性を意識して出演者を選定するよう努めている。頂いた意見は現場に伝え、引き続きしっかりと取り組んで行きたい。

○　１月１６日(月)の鶴瓶の家族に乾杯「松本潤が愛知県岡崎市へ！家康ゆかりの人を探す旅で偶然連続！」と、１月２３日(月)の「松本潤が家康ゆかりの愛知県岡崎市の旅でまさかの対面実現！？」を見た。動画投稿サイトを中心に活動する人気のクリエーター集団「東海オンエア」の話題をきっかけにして、番組が展開していた。「東海オンエア」は、自身のチャンネルでの動画の延べ再生数が 100 億回を超える、日本を代表するクリエーターで、若い世代から絶大な支持を得ている。家康ゆかりの岡崎市で活動する彼らが関わることで、大河ドラマ「どうする家康」が若い世代

に認知され、盛り上がることを期待したい。

○　１月２３日(月)のクローズアップ現代「“牛乳ショック”値上げの舞台裏で何が」を見た。牛乳や酪農を取り巻く問題を多角的に伝えていた。世界的な飼料の高騰によって存続をあきらめる酪農家も出てきているという、極めて厳しい現状を明らかにしていた。飼料の値上がりを牛乳の価格に転嫁できず、赤字経営が広がっている。苦境に立たされている農家が苦しい胸の内を明かしていたが、視聴者がどのように感じたのか気になった。コロナ禍で牛乳の需要が減少したことで値上げが難しくなり、飼料の高騰も相まって経営難になっているという現状は、日本の酪農の将来を考えるとゆゆしき事態だ。私たち消費者にできることは、牛乳や乳製品を買うことだと番組の最後で伝えていたのはすばらしいと感じた。

（ＮＨＫ側）

この番組は札幌局と帯広局が制作した。北海道の酪農の窮状を全国に伝えたいと考えた。どの程度の視聴者に見てもらえるのか心配していたが、とてもよく見ていただいた。特に若年層の視聴者には、今年度放送した「クローズアップ現代」の中で最もよく見られた。「ＮＨＫスペシャル」も含め、食料をテーマにした番組は以前よりも関心が高まっていると感じる。値上げの問題もあり、情報を求めている視聴者が多いと思うので、今後もしっかりと伝えていきたい。

○　１月２３日(月)のクローズアップ現代「“牛乳ショック”値上げの舞台裏で何が」を見た。「クローズアップ現代」は週３回の放送枠があるためか、放送回によって質にばらつきが出てしまうと感じているが、今回はとてもうまくまとまっていて、ＮＨＫが伝えたいメッセージをしっかりと受け取ることができた。食料の問題、農業や水産業への視聴者の関心の高さは肌で感じている。地域社会の衰退や日々暮らす中での課題意識が、食料に関する問題への関心の高さにつながっていると思う。この問題は「クローズアップ現代」単発で取り上げるだけではなく、「ＮＨＫスペシャル」などの大型番組での展開も含めて、さまざまな番組で掘り下げて伝えるとよいのではないか。

○　２月８日(水)のクローズアップ現代「収入アップ？いつ学ぶ？ リスキリングは職場に浸透するか」を見た。「リスキリング」ということばはイメージだけが先行してしまい、多くの人が正しく理解していないと感じているが、この番組はリスキリングに堅実に取り組む現場について伝えていて評価したい。１人親家庭のリスキリングは、

日本の女性の就業上の地位を高めるために必要不可欠だ。また、日本は中小企業が多い国なので、中小企業でのリスキリングを取り上げたこともよかった。

○　１月２４日(火)のいいいじゅー！！「北海道・別海町」を見た。別海町は生乳の生産量が日本一の町だ。生乳の生産の手伝いなど、地域おこし協力隊として大阪から別海町に移住した２０代の女性に焦点を当てていた。別海町の魅力を世の中に伝えようと努力し、酪農を盛り上げようとする姿が印象的で、心強く感じた。地域情報の発信は、全国に放送局を持つＮＨＫならではのもので、このような番組をもっと増やしてほしいと思う。この番組のほかに、「うまいッ！」も農水産物を通して地域の姿を伝える良質な番組なので、継続してほしいと思う。また、「ＮＨＫニュース　おはよう日本」でも「地域発ニュース」を伝えているが、さらなる充実を期待している。

○　１月３０日(月)の病院ラジオ「長野子ども病院編」(総合　後 10:00～10:45)を見た。「病院ラジオ」のシリーズはこれまでも何度か見て、とてもすてきな番組だと感じている。お笑いコンビのサンドウィッチマンが病院に出張ラジオ局を開設し、患者やその家族の思いをリクエスト曲とともに届けるという内容だ。今回は長野県の子ども病院が舞台だった。子どもたちの闘病生活には胸が痛んだが、強い精神力で病に立ち向かう子どもたちの姿に、学ぶことばかりだった。ラジオ番組をテレビで放送するという発想がすばらしく、出演者の表情や仕草が映像で伝わってくることでより感情移入をすることができる。舞台が病院なのでどうしても重い話題が多くなるが、番組を支えるサンドウィッチマンの聞く力とインタビュー力のおかげで暗くなりすぎず、読後感のよい番組になっている。ただ、テレビはラジオに比べて放送時間が限られているのでやむを得ないと思うが、リクエスト曲がカットされてしまうことが多いのは残念だ。不定期で放送しているが、すばらしい番組なのでもう少し頻度を増やしてほしいと思う。

○　２月２日(木)のあしたが変わるトリセツショー「幸せを呼ぶ正しい爪のケア！肌荒れ＆ストレス＆運動改善ＳＰ」を見た。正しい爪の切り方の紹介に驚かされた。「あしたが変わるトリセツショー」は、毎回私たちの生活に根ざしたテーマを取り上げていて、大人だけではなく子どもたちも関心を持ちやすい番組になっているのがよいと思う。

○　２月１３日(月)のドキュメント２０ｍｉｎ.「Ｉ　ｒｅｐ　ｍｙｓｅｌｆ．～ラップで叫ぶ自分自身～」を見た。全国の放送局の若手ディレクターが発案した斬新な番組を届ける「ドキュメント２０ｍｉｎ.」で放送されたものだが、全く知らないこと

ばかりの内容で驚かされた。新橋駅前では毎晩のように行われている、即興でラップをつないでいく「サイファー」を、ラップに造詣（ぞうけい）が深いディレクターが取材し、さまざまな人に話を聞いていた。サラリーマンの男性たちが、ことばでは言い表せない思いをどうにかして表現しようとする様子は興味深かった。ディレクターがこなれたラップで問いかけをし、それに触発されたサラリーマンからさまざまなことばが発せられる様子は興味深かった。一方で、紹介されたサラリーマンのラップが自分自身の内面を表現するにとどまっていたのには、ある意味で日本らしさを感じた。ラップが生まれた背景を考えると、社会の不条理などについて語ってもよさそうなものだが、そのような人は１人もいなかった。外国の文化が日本に持ち込まれるとき、本来の考え方が漂白されて日本的なものになってしまうという、ほかにも類例のある危うさのようなものが図らずも浮き彫りになっていると感じた。現代の日本の世相を丁寧に描写したドキュメンタリーだと感じた。「ドキュメント２０ｍｉｎ.」は 2022 年にスタートしたとのことだが、若手の制作者が挑戦できる番組枠として注目している。未熟さはありつつも、若々しい感性の力作が多いので、視聴者の認知が広がることを期待したい。

（ＮＨＫ側）

誰にも言えず胸に秘めた思いを持つ若い世代が、ラップであればその思いを表現できるという、ある意味でいまの日本の世相を伝えた番組だと考えている。「ドキュメント２０ｍｉｎ.」は、ディレクターはもちろんのこと、プロデューサーも含めて若い世代が中心になって制作している番組で、若手ならではの視点を大切にしている。引き続き意欲的な番組を制作していきたい。

○　２月１４日(火)のニッポン知らなかった選手権　実況中！「第１２回　オールジャパンケアコンテスト」(総合　後 11:00～11:29)を見た。このコンテストの存在は知っていたが、実際に足を運んだことはなかったので、介護現場の状況をリアルに再現した「看取り」などの課題に対するスキルを競うのに対して、正確な審査ができるのか懐疑的に感じていた。しかし、この番組を見て、介護職のさまざまな技術が伝わってきた。審査のポイントも分かりやすく感心した。専門家の解説を交えることで、介護職の人たちの専門性がよく理解できる内容になっていて興味深かった。

（ＮＨＫ側）

職業上の技能を競い合う大会を通して、出場者たちの仕事に

かける思いや情熱がここまで伝わってくることに私たちも驚いている。今後もさまざまな大会を取り上げ、出場者たちの真剣な取り組みや､その中で生じるドラマを伝えていきたいと思う。

○　２月２０日(月)のあさイチ「ホンネで話す！“男性不妊”」がＳＮＳで話題になっていたのでＮＨＫプラスで見た。男性側の視点で不妊の悩みについて特集する、充実した内容だった。“男性不妊”が話題になることは少ないので、世の中に認知を広める意味でもよかったと思う。いわゆる女性の妊活では、まずは医療機関で検査をすることが当たり前のように語られるが、それに比べて男性側の検査は一般的とまでは言えない状況なので、この番組がきっかけになるとよいと思う。このテーマは、男性がテレビを見ている時間帯も意識して、今後もさまざまな番組で取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

「あさイチ」が想定しているメインの視聴者は、番組を放送している時間帯に在宅率が高いとされている４０台の女性だ。“男性不妊”というテーマをどのように伝えるかは難しかったが、まずは男性側の身勝手とも思える本音を伝えることで、女性側の憤りも含めて話題が広がることで、結果的に世の中の認知が高まれるとよいのではないかと考えている。

○　１月２７日(金)の首都圏情報　ネタドリ！「患者にも影響！？　迫る“医師の働き方改革”」を見た。「医師の働き方改革」に関する法律の施行が来年に迫る中、タイムリーな内容だったと思う。初めに紹介された外科医の６１時間連続の勤務という長時間労働の例は、一昔前によくあった状況だが、現在ではここまでの連続勤務はあまりないと思うのでやや気になってしまった。番組で取り上げていた病院の中にセンサーを設置し、医師全員に発信機を持ってもらうことで正確な勤怠管理を行う方策については、もう少し詳しく紹介してほしかった。医師のタスクシフトの事例として、診療看護師が紹介されていた。多忙な医師の仕事の一部を担う、医師と看護師の中間的な職種で、アメリカなどでは制度が確立されている。日本ではまだ国家資格として認められておらず、医師会などの反対も根強いので、この番組が診療看護師制度を推進している団体などの主張に利用されないか懸念を感じた。また、厚生労働省が進めている「特定行為に係る看護師の研修制度」についても紹介があるとなおよかった。

○　２月１０日(金)の首都圏情報ネタドリ！「“小川さゆり”を生きて…　～宗教２世半年間の真実～」を見た。いわゆる宗教２世の小川さんを半年間にわたり取材していて、彼女の明るさや苦悩、そして生き方がよく伝わり考えさせられた。さまざまな世

代、とりわけ女性に受け入れられる番組だったと思う。

○　２月１７日(金)の首都圏情報ネタドリ！「広がる“無毛社会”！？～私たちと毛のこれから～」を見た。コロナ禍をきっかけに脱毛をする人が増えていることや、介護脱毛が注目されていることが紹介されていた。やや取り上げづらいと思われる話題をしっかりと掘り下げて伝えていたことがとてもよかった。時代を映した番組として、資料価値もある番組だと感じた。介護脱毛については、体毛が白髪になると脱毛ができなくなってしまうことも伝えるとなおよかったのではないか。日常会話の中でこのような話題を気軽に話せるような雰囲気を醸成することは重要で、公共メディアとして意義がある取り組みだと高く評価したい。

○　２月４日(土)のテレビ７０年記念ドラマ「大河ドラマが生まれた日」(総合 後 7:30～8:45)を見た。1963 年に放送された最初の大河ドラマ「花の生涯」ができるまでを伝えるドキュメンタリードラマだった。「映画に負けないテレビドラマを作る」という挑戦が、当時、いかに「革命的」であったかが、よく分かった。映画会社が結ぶ協定で専属俳優のテレビ出演が難しい中、スター俳優に出演してもらうための交渉や工夫に感心した。「桜田門外の変」の場面で、瓦を白く塗り、地面に白い布を敷いて雪景色にみせたことにも驚いた。翌２月５日(日) の「カラーでよみがえる！ 大河ドラマ第１作『花の生涯』」(総合 後 4:30～5:29)も見たが、当該シーンにそのような細工があったようには見えず、当時の技術の高さを感じた。ホームページの「番組エピソード」によると、ドラマの主人公を、プロデューサーにするのか、演出助手にするのか、悩んだそうだが、演出助手にしたことは正解だった。お仕事ドラマに、若者の進路の悩みや下宿先の女性との恋愛模様といった青春ドラマの要素が加わり、ストーリーに広がりがでていた。演出助手とこの女性がこの後結ばれそうだと感じさせる、余韻のある終わり方もよかった。

○　連続テレビ小説「舞いあがれ！」を見ている。中小企業の実情をしっかりと取材して取り上げており、好感を持っている。リストラに伴う退職勧奨を受けた登場人物が、「退職勧奨は断れるのですよね。私は辞めません」と発言していた。影響力のあるドラマで社会問題を取り上げ、正確な知識を伝えていることに敬意を表したい。

○　大河ドラマ「どうする家康」を見ている。ＮＨＫが最新の技術を活用してこのドラマを制作していることは、一般的にはあまり知られておらず、視聴者は全く意識していないと思う。ＮＨＫのさまざまな取り組みについて、もう少し視聴者に伝える工夫をしてほしい。公共メディアの意義を伝える意味でも、重要なことだと考えている。

（ＮＨＫ側）

指摘のように、「どうする家康」ではインカメラＶＦＸをはじめ、さまざまな最新の技術を取り入れている。ドラマ制作の舞台裏についても紹介していきたいと考えている。

○　２月９日(木)のクラシックＴＶ「バーンスタインは問う　君は、音楽が好きか？」を見た。「クラシックＴＶ」は、タレントとしても活躍するピアニストの清塚信也さんが司会で、音楽にまつわる幅広いテーマを取り上げているが、今回は作曲家、指揮者、教育者など多方面で活躍したレナード・バーンスタインに焦点を当てていて興味深い内容だった。バーンスタインのアシスタントをしていた指揮者の広上淳一さんがゲストで、貴重なエピソードを数多く聞くことができとてもよかった。広上さんが音楽に行き詰まり、指揮者を辞めようと悩んでバーンスタインに相談すると、「音楽が好きであれば、とにかく自分の歩幅で歩きなさい。そうしていればいつか音楽のほうからほほ笑んでくれるときが来る。人と比べてはいけない。」という趣旨のアドバイスをされたとのことで、教育者としてのすばらしさも知ることができた。一方で、漫画家の女性もゲストに迎えていたのに、彼女の魅力を生かし切れていなかったのが残念だった。音楽に詳しくない視聴者にも親しみやすいゲストが出演するなど、意欲的な工夫がとてもよい番組だが、たまには専門家の話を清塚さんが分かりやすく伝える回があってもよいのではないか。

○　２月１１日(土)のテレビ放送７０年「おかあさんといっしょ」から見こども番組(Ｅテレ 後 8:00～8:59)を見た。「テレビ放送７０年」のキャンペーンの一環で、「おかあさんといっしょ」の歴史を貴重な証言とともに振り返る番組だった。まだことばも話せない幼児が「おかあさんといっしょ」を夢中になって見ることを不思議に思っていたが、その理由がよく理解できた。「おかあさんといっしょ」は、子どもたちに心が豊かになる上質なものを届けたいという脚本家の飯沢匡さんの強い信念のもと、テレビ放送開始６年後の 1959 年には放送が始まったとのことだ。時代は大きく変わったが、現在もその信念が脈々と受け継がれていると感じている。高度経済成長期に女性の社会進出が進んだことをきっかけに、民放も含めて子ども番組に力を入れるようになったそうだ。母親が働きに出るようになり３歳から保育園に通う子どもが増え、３歳児がメインの視聴対象ではなくなるという大きな変化が起こったことに対し、「２歳児テレビ番組研究会」を専門家とともに立ち上げ、１年以上の検証を経て子ども番組の低迷を脱したという紹介に感銘を受けた。かつて「おかあさんといっしょ」に出演していた黒柳徹子さんなどの貴重な証言や懐かしい映像も興味深かった。「おかあさんといっしょ」はＥテレで放送されているが、国民のほとんどが一度は見たことがある番組だということを踏まえ、ＮＨＫの取り組みを多くの人に知ってもらい、

新たなファンを増やす意味でも、この番組は総合テレビで放送してもよかったと思う。

（ＮＨＫ側）

テレビ放送開始７０年をきっかけに、さまざまな番組や放送の変遷を振り返る取り組みの中で、今回は「おかあさんといっしょ」に注目し、子ども番組の制作に関わるスタッフの思いも含めてお伝えした。視聴者の反響も大きく、関心の高さを実感している。

○　２月１１日(土)のテレビ放送７０年「おかあさんといっしょ」から見るこども番組を見た。小さい頃に見た「三匹のこぶた」の人形劇の映像が紹介されていてとても懐かしかった。司会のお姉さんがこぶたの人形のネジを巻くところから物語がスタートし、着ぐるみの劇、そしてあやつり人形の劇と、シームレスにつながっていく演出に驚かされた記憶がある。当時としては画期的で費用もかかる取り組みだったことを知り、とても興味深かった。「おかあさんといっしょ」が科学的根拠に基づいて制作されていることに敬意を表したい。現在は年間 200 本程度が制作されるとのことだが、頻繁に出演する子役の方が疲弊してしまわないか心配なので、配慮してほしい。

○　２月１７日(金)の新・にっぽんの芸能　女流義太夫の魅力「仮名手本忠臣蔵・七段目」を見た。2022 年度から「にっぽんの芸能」がリニューアルされ、放送時間が短くなったため、大作を伝えることが難しくなったと感じているが、今回はうまくまとめていたと思う。日本芸術文化振興会元理事の織田紘二さんの解説がとても分かりやすく、興味深い内容になっていた。副音声を活用してさまざまな視聴者が楽しめるような工夫がされているが、副音声はＮＨＫプラスの配信でも聞くことはできるのだろうか。この番組のホームページの中に日本舞踊について紹介しているページがある。日本舞踊は歌舞伎舞踊から発展して多様化したもので、現在の主軸は素踊りになっている。素踊りの解説や写真も掲載するとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

副音声を付与している番組は、ＮＨＫプラスでも副音声を聞くことができる。頂いた意見は現場に伝え、今後のコンテンツ制作に生かしていきたい。

○　１月２９日(日)の「誰が島を守るのか ～ 沖縄 若き自衛隊員の葛藤～ 」（ＢＳ１後 11:00～11:49)を見た。沖縄県のある２人の若者が自衛官の活動に憧れ、高校卒業後に入隊、教育隊を経て正式な自衛官になるまでを追ったドキュメンタリーだった。

まず、沖縄で自衛官を志望する人が増えているという事実に驚かされた。歴史的な背景から、本土復帰後しばらくは志願者がおらず、家族の反対も根強かったことを考えると、沖縄の人たちの意識の大きな変化を感じる。２人の若者は、東日本大震災の時の災害派遣や、沖縄県内での不発弾処理の仕事をみて、「人を助ける仕事がしたい」と入隊した。しかし、実弾射撃や実戦を想定した訓練を繰り返すうちに、国防という命を懸けた本来の任務の重さを痛感する。ただ、その胸の内を家族には伝えられず葛藤する様子が描かれていた。この２人の物語を軸にしながら、離島からの急患空輸などを通じて、戦後の沖縄で自衛隊が受け入れられていく過程や、台湾有事をにらんで南西諸島シフトを進める自衛隊が意識的に地元出身隊員を増やそうとしていることなど、多角的な視点が盛り込まれていてよかった。

○　２月４日(土)の世界サブカルチャー史　欲望の系譜　シーズン２「逆説の６０－９０ｓ　第１回」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 11:00～５日(日)前 0:29)を見た。シーズン１はアメリカを中心に取り上げていたのに対し、シーズン２はヨーロッパを中心に取り上げている。ヨーロッパの視点が加わることで、より重層的なドキュメンタリーになっていると思う。東西冷戦下でソ連と向き合うヨーロッパと、消費社会をおう歌するアメリカの雰囲気の違いが、映画などの作品を通してよく伝わってきた。当時のアメリカとヨーロッパの時代認識の差がどこにあったのかを学ぶ意味でも興味深い番組だった。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻で、当時と似た時代状況になりつつあると感じるので、歴史を振り返ることは意義がある。1990 年代までだけではなく、2000 年代や 2010 年代、そしてアジア各国の映画や文化も絡めて描くとよりすばらしい番組になると思う。

○　「信長のスマホ」を見ている。かつて放送した「光秀のスマホ」と関連した演出が入るなど、シリーズで展開している醍醐味(だいごみ)が感じられてとてもよかった。今後も戦国時代のシリーズで「秀吉のスマホ」なども期待したい。ＳＮＳでの発信も工夫していて、信長が光秀のアカウントをフォローしていないことはすばらしい仕掛けだと感じた。一方で信長は義経などをフォローしていることになっているが、あえて誰もフォローしていないことにしても信長らしさが際だっておもしろいと思う。次の「スマホ」シリーズでは、主人公が使っているアプリの種類なども含めて、より一層の工夫を楽しみにしたい。

○　「信長のスマホ」を見ている。このシリーズは「光秀のスマホ」から見ているが、とてもよくできた番組だと感じている。キャラクターがデフォルメされることで、それぞれの個性がクリアに伝わってくるので極めて分かりやすく、印象にも残りやすい。単純におもしろいというだけではなく、人物の特徴がしっかりと掘り下げられていて

感心している。加えて、スマホを通したコミュニケーションが危険な側面を持っていることも示唆していて、よく考えられた内容だ。軽快でテンポのよい５分間の番組ですばらしいシリーズなので、続編も期待したい。

（ＮＨＫ側）

指摘を参考に、それぞれの武将の個性を生かしたＳＮＳでの展開を考えたいと思う。頂いた意見は現場に伝え、今後の番組制作に生かしていきたい。

○　2022 年末に長野市の公園が急に使えなくなり、廃止になるというニュースが報じられた。子どもたちが公園で自由に遊べなくなることに強い問題意識を持っていたが、年末年始の時期に重なったこともあってか、マスコミ各社はこの問題の取材が不十分だと感じていた。その中で、ＮＨＫの長野局の記者がとても丁寧な取材をしていたのに好感を持った。早い段階から問題の背景を明らかにしていたし、周辺住民への取材も丁寧で感心した。このような取材がさまざまな問題の本質を明らかにするのではないか。ＮＨＫがさまざまな改革に取り組んでいることは承知しているが、地域放送局の報道は極めて重要なので、そこがないがしろにならないよう留意してほしい。地域放送局が取材した内容を集めて伝えるような、ＮＨＫならではの番組があるとよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

指摘の通り、全国に地域局のネットワークを持っていることはＮＨＫの強みの一つだ。ここ最近では、老朽化するインフラの課題について、地域局が取材した内容をまとめて伝えた。引き続きこのような取り組みを続けていきたい。

○　ＮＨＫが動画投稿サイトで展開している「ＮＨＫ　ＭＵＳＩＣ」のチャンネルについて、「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」の再生回数がかなり伸び、多数のアクセスがあるにも関わらず、１月以降は番組の予告動画ばかりで新規のコンテンツがあまり掲載されず、もったいないと感じている。権利の問題などがあるとは思うが、番組で伝えたアーティストのパフォーマンスを動画でも視聴できるようになると、より多くの視聴者がＮＨＫのコンテンツに触れることにつながると思う。

（ＮＨＫ側）

インターネットでの展開はあくまでも番組の周知や広報など、限定された範囲で行うことになっている。限られた中では

あるが、頂いた意見を参考に、さまざまな工夫をしていきたい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２３年１月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１６日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、大河ドラマ「どうする家康」のプロモーションの取り組み、最新技術による効率的なドラマ作りについて説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋代表取締役社長執行役員）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	磯崎　功典	（キリンホールディングス株式会社代表取締役社長）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	﨑村　夏彦	（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本水泳連盟理事／シドニー五輪競泳日本代表）
	橋本　麻里	（公益財団法人永青文庫副館長）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）

（主な発言）

＜大河ドラマ「どうする家康」について＞

○　初回放送後、ＳＮＳ上では賛否両論があったと思うが、自分は楽しく視聴した。高齢者向けのイメージがあった今までの「大河ドラマ」とは全く違う印象で、若い世代の視聴者も興味を持ったのではないかと感じた。岡田准一さんが演じる織田信長の「待ってろよ竹千代。俺の白兎（うさぎ）」というせりふも斬新で、ＳＮＳ上で大き

な話題になっていた。ドラマ本編が戦など緊迫する場面が多い一方で、タイトルバックが非常に明るい印象なのには違和感を覚えた。演出担当者のインタビューを見て意図は理解したが、本編のイメージを考えるともう少し荘厳な印象のほうがいいのではと感じた。ＳＮＳの番組アカウントでの「＃切り抜き大河」の試みは非常に興味深かったが、ＳＮＳでの放送の直前の告知がなく、見逃してしまう。予約機能を活用するなどしてＳＮＳでも告知をするとよいと思う。

○　前作の「鎌倉殿の１３人」では、今までの「大河ドラマ」とは異なるコミカルなシーンもあって当初戸惑ったが、回を追うごとに魅力に引き込まれた。今回の「どうする家康」も最初に同じような印象を持ったが、前作で慣れたこともあって、親しみやすかった。第１回で物語が桶狭間の戦いまで進み、展開の速さに驚いたが、このスピード感にも興味がわいた。松本潤さんが演じる徳川家康と有村架純さんが演じる瀬名が子ども時代を演じ、ままごと遊びをするシーンは大胆でおもしろいと感じたが、第２回では子役が登場して、時系列が混乱してやや戸惑いを感じた。ＣＧを駆使した映像が美しく、効果的な照明も相まって、映画を見ているようなスケール感、臨場感にあふれていた。ただ、その中で家康たちが馬に乗り駆けるシーンだけは迫力に欠け、残念に感じた。

○　最新のＣＧ技術を使った映像は映画のようなスケール感があったが、武将たちが馬に乗って駆けるシーンは不自然に感じるところもあった。ドラマ１０「大奥」の冨永愛さんが演じる徳川吉宗が馬に乗って浜辺を駆ける実写シーンには、圧倒されるような迫力があった。大河ドラマ「どうする家康」でも、迫力のある乗馬シーンを期待したい。ＣＧ技術を活用することで、制作経費の削減にもつながるという説明があったが、どれほどの効果があるのか気になった。今川義元が「武をもって治めるは覇道。徳をもって治めるのが王道」と言う印象的な場面で、せりふをテロップで表示して補っていたのは、分かりやすくてよいと思った。さらにこのせりふをＳＮＳの「＃切り抜き大河」でも取り上げていて、うまく連動していると感じた。今後の展開に期待している。

（ＮＨＫ側）

馬のＣＧについて、視聴者にさまざまな意見があることは承知している。今後さらに映像表現のブラッシュアップを進めていきたい。日本のＶＦＸ（画面の視覚効果）技術は、他国と比べて遅れている面もあり、ＮＨＫが先陣を切って挑戦している。いただいた意見を真摯（しんし）に受け止め、努力したい。

（ＮＨＫ側）

初めてハイビジョンで撮影した大河ドラマ「葵　徳川三代」では関ヶ原の戦いのシーンを、費用をかけて大がかりに撮影したが、その後多くのドラマでこのとき撮影した映像を活用してきた。今回もある程度費用をかけて新しい技術を導入しているが、今後の「大河ドラマ」をはじめさまざまな番組で活用していきたい。

○　ＣＧ技術を活用した映像はスケールが大きく素晴らしいと感じたが、陰影が濃いためか、全体的に画面が暗く感じた。第１回は、主人公の家康が危機に陥った場面で終わり、やや消化不良に感じたが、第２回でその危機を乗り越えて安心した。次回への期待を高めようとする制作側の意図を感じた。本編のあとのゆかりの地の紀行は、今までの「大河ドラマ」ではアナウンサーのナレーションだけだったが、今回の「どうする家康ツアーズ」では、家臣の石川数正役の松重豊さんが語りを務め、主人公の松本潤さんがゆかりの地を訪れていて新鮮に感じた。今後も続けてほしい。

○　「ＮＨＫプラス」で視聴した。非常に展開が早かったので、巻き戻して見直したり、字幕を表示したりして、時間をかけて内容を確認しながら見た。ＣＧについて、人間の感性は非常に鋭く作り物を見分けるので、本物に見えるようなＣＧを作ることは簡単ではないと思うが、挑戦を続け、さらなる進化に期待したい。また、ＣＧと実写の効果的な組み合わせを追求するのもよいと思う。今回、ＳＮＳなどのデジタルツールを効果的に活用していて、特に歴史ファンのニーズに応えていると思うが、より多くの人に大河ドラマを届けるためには、歴史ファン、時代劇ファン、出演者のファンなど、それぞれのファンに向けたコンテンツを提供していくのがよいと思う。それぞれのファンの年層やデジタルへの親和性などを整理して、対応のしかたを検討するとよいのではないか。歴史ファンはデジタルに慣れている人が多いので、コンテンツを届けやすいと思う。ゆかりの地や登場人物などを、デジタルを活用して分かりやすく紹介したり、動画共有サイトで物語に関連する歴史についての動画を配信したりして、より多くの人をひきつけるよう取り組んでほしい。ただ、「２分ダイジェスト」は動画共有サイトではあまり見られていないと思う。ダイジェストがふだん番組を見ていない人に届いているのか、現在番組を見ている人の離脱防止に役立っているのかなど、効果を検証してはどうか。

○　のちに家臣となる榊原康政が木の上で本を顔に伏せ寝ていたり、若き日の信長とその家臣がカラーギャングのような赤一色のいでたちで登場したりなど、コミックのようなシーンを物語の最初のうちに見せることで、リアリティライン、すなわちこの物

語はどのようなテーストで進んでいくのかを明確に提示していてよかった。このあとの家康の行動が「大河ドラマ」の王道から外れていても、視聴者は、これはこの物語ならではだと納得できると思う。歴史的建造物をデジタルデータ化して活用するという説明があったが、全国には地元の学芸員や研究者が歴史的建造物をデジタルデータ化する取り組みをしているところがある。それぞれの資産を相互に活用することも今後考えられるのではないか。かつては古典的な物語の教養を身につけたり歴史の知識を得たりするための役割を能、歌舞伎、落語、講談などが担っていたが、現在ではその役割の大きな部分を「大河ドラマ」が担っていると思う。最初からすべて理解できなくても、見続けているうちにだんだんと歴史の教養が深まっていくこともある。歴史の背景とか人物の関係などの前提知識がなくても、見ているうちにだんだん分かっていくということを伝えて、食わず嫌いの視聴者に見てもらえる工夫があるとよいと感じた。

（ＮＨＫ側）

今回の「どうする家康」では、「インカメラＶＦＸ」というスタジオの中にバーチャル空間の映像を背景として映し出しながら撮影する技術を活用している。いままでのオープンセットでは 200 メートル四方の中の空間しか描けなかったが、バーチャル空間では数キロ四方のスケールで当時の景色や風俗を表現することができ、視聴者に新しい映像表現を見てもらえるようになった。歴史的建造物のデジタルデータ化については全国で行われている文化遺産のデジタル化の取り組みと連携しながら、社会に還元できるように努めていきたい。

○　「大河ドラマ」の制作を通じて、ＶＦＸなどの映像技術の向上や歴史的建造物をデジタルデータ化して社会に還元するなど、社会の役に立つ取り組みにつながることを期待している。

○　ＣＧをはじめとしたデジタル技術の活用は積極的に進めてほしい。物の質感をＣＧで再現することは非常に難しく、海外の大作映画でも完全には再現できずに、カメラを揺らしたり効果音を使ったりして補っているのが現状だと思う。映像のリアルさを追求するのはもちろん大切だが、新しい技術ならではの表現に積極的に挑戦してほしい。例えば空から俯瞰（ふかん）した映像や、家臣の目を通した映像など大胆な表現を期待したい。

○　番組ＰＲについて、戦略に基づいて集中して実施したのだと思うが、やや多すぎな

のではないかという印象を受けた。ただ、関連番組の中で、１月４日(水)の歴史探偵「戦略家　今川義元」は今川家の視点で家康の行動を解釈していて興味深かった。今後のドラマで義元の息子である今川氏真がどう描かれていくのか注目している。

○　いままでの徳川家康のイメージとは全く違う、ナイーブで頼りない家康が周りの家臣に助けられている姿に新鮮さを感じた。野村萬斎さんが演じた今川義元が勇壮なたたずまいで非常に格好よかったので、第１回で討ち死にしていまい出番が終わってしまうかと思うと残念だ。再登場に期待したい。第１回を見て、登場人物のせりふが聞き取りづらい場面があったのが気になった。イッセー尾形さんが演じる家臣の鳥居忠吉は何を言っているのかわからない老人という設定なのであえてそうしていると思うが、ほかの登場人物については改善してほしい。

○　家族で視聴して大変楽しめた。子どもからはタイトルバックが前作の「鎌倉殿の１３人」と比べてインパクトが弱いという意見もあったが、本編に入るとテンポがよく、子どもにとってもおもしろく感じたようだ。ただ、登場人物が多くて分かりづらく、ガイドブックで確認すながら視聴した。番組放送中にＱＲコートなどを使って登場人物紹介のホームページを参照できるような工夫があってもとよいと思った。「大河ドラマ」を長年視聴してきたが、今回の「どうする家康」は新鮮で興味深く、今後に期待している。

（ＮＨＫ側）

第１回では、三河の家康の家臣団と今川家を中心に人間関係を細かく説明するように描いた。瀬名と今川家の関係性がやや分かりづらかったかもしれないが、回が進むにつれ分かるような描き方にしている。

（ＮＨＫ側）

番組ホームページなどでは、登場人物の関係性がより分かりやすくなるよう工夫したい。第１回では合戦シーンが多かったため大きな音から小さな音まで音の幅が広く、せりふが聞きづらい場面があったかもしれない。音声のバランスには注意を払っていきたい。

ＳＮＳや動画共有サイトの活用のしかたは、よりブラッシュアップしていきたい。ＣＧ表現についても検討を重ねていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　１月１日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀「２０２３巻頭言　世界は平和と秩序を取り戻せるか」(総合 後 9:00～9:59)を見た。世界の７人の識者が、安全保障、エネルギー、食料、核兵器という４つのテーマの課題を分かりやすく分析し、未来への提言を伝えていた。経済学者のジャック・アタリさんが、将来世界的な食料危機が訪れると明言し、自給率の低い日本に対し、農業を魅力的なものにしたとしても、昆虫や雑草を食べることも含めて食生活を変える必要があると言及していたのは非常に驚いた。番組の最後に国連事務次長の中満泉さんが語った「国際的な課題を自分事とし、身近な友人や家族と語り合い、自分に何ができるか考え、行動に移してほしい」というメッセージが胸に響いた。

○　１月１日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀「２０２３巻頭言　世界は平和と秩序を取り戻せるか」と１月１５日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀「第６回“情報戦”ロシアＶＳウクライナ知られざる攻防」を見た。「２０２３巻頭言　世界は平和と秩序を取り戻せるか」は、世界を代表する識者たちのことばをよくぞ伝えてくれたと感心する内容で、これからの時代にどう向き合うか、大きなヒントになると感じた。作家・ジャーナリストのスベトラーナ・アレクシエービッチさんがロシアは絶対に戦争をやめないと明言していたが、ロシア文化に精通しているアレクシエービッチさんのことばだけに説得力があった。フランス元外相のユベール・ヴェドリーヌさんの「フランスはアメリカと友人であり同盟国だが同調はしていない」ということばは非常に興味深かった。日本もアメリカとの同盟を維持しながらも、アメリカの言いなりになるのではなく、日本にも発言権と自主性があることをアメリカに認めさせていく必要があると感じた。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫスペシャル「混迷の世紀」シリーズは今まで５本を放送してきた。それぞれの回で識者にインタビューをしているが、番組で紹介できるのはその一部に限られる。今回の「２０２３巻頭言　世界は平和と秩序を取り戻せるか」では、未公開のインタビュー素材を有効に活用し、巻頭言としてふさわしい知見を集めて伝える番組にした。

○　１月７日(土)のＮＨＫスペシャル「認知症の母と脳科学者の私」を見た。ある脳科学者が認知症となった母親を７年間にわたって介護する姿を取り上げていた。認知症

の母親がネガティブな発言をすることも、母親らしさが残っている証しだと前向きに受け取るなど、脳科学者ならではの視点が興味深く、介護をする人が認知症の患者と関わるときの視点や物事の捉え方について示唆に富む内容だった。脳科学者が一人称で語る場面も、感情移入がしやすくてよいと感じた。

○　１月７日(土)のＮＨＫスペシャル「認知症の母と脳科学者の私」を見た。このようなテーマを見つけ出し、紹介する取材力に感心した。脳科学者が、家族として複雑な感情を抱えながら認知症の母親に向き合っている姿に共感したが、脳科学者ならではの視点にもっと迫れるとよかった。

○　１月７日(土)のＮＨＫスペシャル「認知症の母と脳科学者の私」を見た。自分自身の親の介護の経験を重ね合わせながら見た。東北大学の研究室で母親の脳の状態についての分析結果を聞いたあと、母親に対する接し方が実際にどのように変わったのか、もう少し詳しく描かれたらなおよかったと感じた。その人らしさは脳の機能だけでなく、周りの人との関係にもよると思うので、今後、認知症と周囲の人や社会との関係を取り上げた番組に期待したい。

（ＮＨＫ側）

この番組は 2020 年に放送したＮＨＫスペシャル「認知症の第一人者が認知症になった」などを手がけ、認知症の取材をライフワークとしているディレクターによるものだ。科学者であっても、家族としての感情が表に出てしまう場面など、リアルな姿を描けたと思う。

○　１月８日(日)のＮＨＫスペシャル「超・進化論　第３集 すべては微生物から始まった」(総合 後 9:15 ～10:04)を見た。微生物が感染した動物や昆虫を操って自分に都合のよい行動を取らせている、微生物が他の動物の進化の駆動力になっていることが、いくつかの実例で示され、興味深かった。番組の終盤で「私たちは微生物によって生かされている」「地球は微生物によって支えられている」という考えが示された後で、「それならなぜ、コレラ菌、ペスト菌など、明らかに有害な細菌がいるのか」という鋭い問いがあったが、その答えは肩すかしだった。胃がんを引き起こすピロリ菌にアレルギーを抑える効果もあることが紹介された程度で、問いに対して正面から答えていない印象を受けた。また、ウイルスは厳密には生物ではないかもしれないが、新型コロナのパンデミックという現状を踏まえると、ウイルスに対する考察があってもいいと思った。

○　１月１５日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀「第６回　“情報戦”ロシアＶＳ．ウクライナ～知られざる攻防」を見た。ロシアのプロパガンダだけでなく、ウクライナが世界の広告代理店と手を組み、政治的なＰＲ戦略を展開していることにも触れていて、当事者双方についてバランスよく伝えていると感じた。戦争とプロパガンダの歴史をきちんと踏まえて伝えていたこともよかった。番組の末尾で、ＳＮＳのボタンをクリックすることで、われわれ一人一人が知らぬ間に情報戦に関わっていることを伝えたのは、非常に重要なテーマを指摘したと思う。現在進行中の情報戦に自分たちも巻き込まれているという事実を多くの人が知ることができるよう、さまざまな手段を駆使して伝えてほしい。

○　１月１５日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀「第６回　“情報戦”ロシアＶＳ．ウクライナ～知られざる攻防」を見た。湾岸戦争の際の実例を紹介しながらプロパガンダとはどういうものなのか分かりやすく伝え、市民として情報にどう接するべきなのか示唆していて、非常に参考になった。こういった情報を、テレビを見ない人たちに対してもどのようにして届けるのかが課題だと感じた。

（ＮＨＫ側）

現在ウクライナで繰り広げられている情報戦の実相を伝えようと制作した。情報戦の中で自分たちの身を守るためには、情報リテラシーを上げることが必要だと考える。ＮＨＫとしても、さまざまな情報が飛び交う中で、正しい情報を発信し、伝えていくことに努めていきたい。

○　１２月２０日(火)のプロフェッショナル　仕事の流儀「ＹＯＳＨＩＫＩスペシャル」(総合 後 7:30～8:42)と１月１０日(火)のクローズアップ現代「沢木耕太郎　自由を広げ、生きる」を家族で見た。子どもは今までＹＯＳＨＩＫＩさんに対して派手な人物という印象を持っていたようだが、プロフェッショナル　仕事の流儀「ＹＯＳＨＩＫＩスペシャル」を見てＹＯＳＨＩＫＩさんのストイックな生きざまに感銘を受け、印象が変わったようだった。クローズアップ現代「沢木耕太郎　自由を広げ、生きる」は、作家の沢木耕太郎さんと同世代の人たちへ向けたメッセージのような印象で、自分が若いときに沢木さんの作品を読んで抱いていたイメージとは若干違う感じもしたが、考えさせられる場面も多く、深いメッセージを受け取った。一方、子どもは一切興味を示さず、人物に焦点を当てた番組にも、世代を超えて共感するものもあれば、世代によって受け止めが変わるものもあることを改めて感じた。

１２月３０日(金)の「日本最強の城スペシャル」(総合 後 7:30～8:42)を家族で見た。自分は興味深く見ていたが、子どもはつまらなく感じていたようだ。歴史バラエ

ティーと銘打った番組だったが、ややおとなしい印象で、もう少しダイナミックな演出があったら子どもも興味を示したと思った。

○　１２月３１日(土)の「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。非常におもしろかったという感想で、知り合いもみなおもしろかったと言っていた。平均世帯視聴率が過去２番目の低さだったというが、デジタルの展開などを通じて、ふだんリーチできていない若い世代などにもリーチできたのではないかと思う。デジタル展開について、会場の臨場感を共有するショート動画や、ライブ配信などコンテンツが非常に充実していて、配信の形態もユーザーの視点が意識されていて、非常によかった。これらのデジタル展開が「ＮＨＫプラス」での視聴も含め、本編の視聴にどれだけ結びついたか確認し、動画共有サイトの「ＮＨＫ　ＭＵＳＩＣ」アカウントなども活用して、視聴者とのつながりを長期的に築いていくとよいと思う。さらに、出演するアーティストが自分のＳＮＳアカウントで「紅白への道」のようなコンテンツを作ってくれるなどの協力があると、いっそうつながりが広がるのではないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」は若い世代にもよく見られた。今回は大みそかの放送だけで終わりとせず、新年１月２日(月)に「生放送！紅白歌合戦お正月スペシャル」(総合 後7:20～8:48)を放送する展開をした。今後はＳＮＳを活用するなどして、年末はもちろん、年始や１年を通じて楽しんでもらえることも検討したい。

○　「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た。世帯視聴率が過去２番目の低さだったということだが、今のテレビ番組の視聴率としてはかなり高く、健闘したのではないかと思う。周囲の高齢者からは「知っている歌手は毎回同じ歌ばかり歌っている」「若い歌手がさっぱり分からない」という意見があり、一方で若い知り合いからは「民放の大型歌謡番組との違いが分からない」という厳しい意見もあったが、きめ細かい工夫が例年以上に感じられ、自分は非常に楽しめた。紅白の勝敗を決める視聴者投票は、視聴時間に応じて投票数が最大５票まで増える仕組みになっていて、「票が増えないからチャンネルを替えないでほしい」と家族に言われた知り合いもいて、一定の効果があったのではないかと感じた。一部の受信機で投票数が増えないという不具合が生じたことは残念だった。

○　「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」には、「＃謎解き紅白」など視聴者も参加できる企画が多くあって、家族で楽しめた。昔は好きなアーティストが出演している場面だけ

を見ていたが、今回は全体を通して楽しむことができた。司会の橋本環奈さんが本当に楽しそうに進行している姿を見て自分も楽しい気分になり、「ＬＯＶＥ＆ＰＥＡＣＥ～みんなでシェア！～」というテーマにふさわしい人選だったと感じた。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫ紅白歌合戦」は、次の放送に向け検証を始めている。いただいた意見を真摯（しんし）に受け止め、ブラッシュアップしていきたい。今回、リアルタイムでの視聴に加え、録画視聴なども含めて多くの人に見ていただき、多大な関心を寄せてもらえたのではないかと考えている。

○　「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」は今までの「ＮＨＫ紅白歌合戦」の中で一番おもしろかったと感じた。司会者もダンスやコスプレをするなど一体となって楽しんでいる様子が見えて、フェスのような雰囲気で全編を通して楽しめた。ＳＮＳを使って次に登場するアーティストや企画の予告をしていたのは、視聴者の離脱防止に効果があったのではないか。知人から、番組の途中でチャンネルを替えようとしたときに、ＳＮＳで次のコーナーに好きな俳優が出演するという予告を見て続けて見ることにしたという話も聞いた。Ｚ世代の知人たちの間でも、「紅白歌合戦」の感想が話題になっていたので、若い世代にもよく見られたのではないか。コンサート活動からの引退を表明していた加山雄三さんの最後のライブパフォーマンスの場面には、若い世代も年配の世代も感動していて、「紅白歌合戦」は世代をつなぐ懸け橋になる番組だと感じた。

○　「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」に、Ｋ－ＰＯＰアーティストが多く出演していたことが話題になっていたが、中学生の子どもは「Ｋ－ＰＯＰアイドルが出演するから紅白歌合戦を見る」と話していて、若い世代に対して効果があることを実感した。

○　「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」は、全体的に非常によかった。特に司会の橋本環奈さんは、聞き取りやすいことばで堂々と進行していて、番組を心から楽しんでいる様子が伝わってきて、視聴者も幸せな気持ちになるようで非常にすばらしかった。アーティストの皆さんのパフォーマンスもすばらしく、全編を通して楽しむことができた。特に安全地帯のパフォーマンスには大きく心を動かされた。アーティストのパフォーマンスを審査して勝敗をつけるということに違和感を覚えていたが、今回はお祭り気分で楽しみながら投票できる仕立てになっていてよかった。ただ、一緒に見ていた家族は「紅組と白組、企画枠の分け方がよく分からなかった」と言っていた。グループのアーティストが多くなり、男女で紅組と白組を分けることが難しくなってきている

と思う。多様性を尊重する時代になっているので、男女関係なく紅組、白組のチーム分けをすることも今後検討したらよいのではないか。また、企画枠で出場したアーティストのパフォーマンスが非常にすばらしく感じたが、企画枠がどのような位置づけなのかよく分からなかった。アニメキャラクターのウタさんの出演シーンでの歌唱は生歌ではなく音源だったとあとで報道で知った。出場者が会場の観客の熱気を感じながら、全国の視聴者と１年の最後の時間を共有し、歌を通して心のつながりを感じるのが「紅白歌合戦」のだいご味だと思う。今回のウタさんのパフォーマンス自体はすばらしかったが、生で歌唱していないことで、このような心のつながりが感じられないものだったことは残念に感じる。

（ＮＨＫ側）

今回の「ＮＨＫ紅白歌合戦」は、世代を超えた家族の会話やＳＮＳなどでの交流が生まれる場でありたいという思いも込めて制作した。７０回以上にのぼる伝統を守りながら、時代の変化も踏まえ、ジェンダーに配慮して、あえて男女の対戦を強調しないようにしている。出場者は、2022 年を振り返り、次の年への希望を感じさせるような歌を届けるという視点で選んだ。ウタさんのパフォーマンスは歌唱だけではなく、背景映像や共演者のダンスも含めた全体で一つのパフォーマンスだという考えだ。

○　１月１日(日)の「あたらしいテレビ　２０２３」(総合 後 11:05～２日(月)前 0:04)を見た。2022 年のエンターテインメント業界で活躍した多種多彩な人たちのインタビューや鼎談（ていだん）で、興味深い話が数多く聞けた。出演者のお勧めとして民放の番組も紹介されていて、ＮＨＫの懐の深さを感じた。民放各局の若手制作者や放送作家などがテレビ局の垣根を越え、番組制作について語り合う企画は非常に興味深い。ある若手制作者の「言語化できない笑いを作りたい。いくら考えても笑いの理由が分からず、笑った後に笑ったことを後悔して吐きそうになる番組を作りたい」という発言は理解できなかったが、常識にとらわれない発想には期待が持てた。テレビが元気でなくなった時代にあえて入ってきた若手制作者は根性が違うという話もあって、これからの若手制作者の飛躍が楽しみになった。

○　１月１日(日)の「あたらしいテレビ　２０２３」を見た。この番組の前身にあたる「新春ＴＶ放談」の時から毎年見ていて、番組を通してテレビの現在地を確認している。ただ、以前のＮＨＫ・民放各局のキーパーソンが一同に出演して自由に語りあうスタイルのほうがおもしろかったと感じた。

（ＮＨＫ側）

「あたらしいテレビ」は、刺激的な発想も含めたやりとりで
テレビの可能性を探る番組だ。今後も挑戦を続けていきたい。

○　１月２日(月)に再放送されたＮＨＫ　ＭＵＳＩＣ　ＳＰＥＣＩＡＬ「松任谷由実～私と荒井由実の５０年～」(総合 前 0:18～1:02)と１月５日(木)の「坂本龍一　Ｐｌａｙｉｎｇ　ｔｈｅ　Ｐｉａｎｏ　ｉｎ　ＮＨＫ」(総合 後 10:00～10:45)を見た。２人の影響を強く受けた世代として興味深く視聴した。松任谷由実さんの「５０年も音楽をやらせてもらえているのには何かの使命や意味があるのだと思う」ということばが印象的だった。坂本龍一さんが、がんと闘病中の体から絞り出すような演奏をしている姿は、モノクロの映像と相まって、神々しく感じた。７０年代、８０年代に活躍したアーティストも年を重ね、ＹＭＯの高橋幸宏さんやギタリストのジェフ・ベックさんなど最近亡くなった方もいる。これらのアーティストの映像は貴重な文化遺産、アーカイブとして保存していってほしい。

（ＮＨＫ側）

レジェンドと言ってもよいアーティストの番組出演は長年
にわたる信頼関係があってこそで、こうした絆を大切にしてい
きたいと考えている。映像アーカイブも大切にしていきたい。

○　１月５日(木)のギョギョッとサカナ★スター「日本人が大好き　マグロの謎」(総合 後 7:30～8:42)を見た。番組の主題歌を歌うザ・クロマニヨンズの甲本ヒロトさんがカブトガニにふんしたスーツを着て登場し、大好きだという昆虫について、さかなクンと話し合っていた。昆虫をテーマにした番組が終了し、もの足りなさを感じていた昆虫好きの子どもたちにとってよい企画だったと思う。

○　１月１０日(火)のドラマ１０「大奥」を見た。ジェンダーへの理解に貢献した作品としてアメリカの文学賞（ジェイムズ・ティプトリー・ジュニア賞、2009 年）も受賞した作品をドラマ化するという挑戦に、非常に興味を持った。エンターテインメントの世界にポリティカル・コレクトネスや多様性の考えを持ち込むと、作品がおもしろくなくなるという意見も多く聞いてきたが、このドラマは、社会の問題を提起しながらも、エンターテインメントとしても十二分におもしろい、非常によい作品だと感じた。１月２日(月)の１００分ｄｅ名著「１００分ｄｅフェミニズム」(Ｅテレ 後 7:30～8:42)をはじめ、ジェンダーについて考える質の高い番組を相次いで放送したことはよかった。

○　１月１３日(金)の「ニュースウオッチ９」を見た。受験生の痴漢被害を取り上げ、対策として、友だちや親と一緒に電車に乗る、私服を着る、座席エリア付近に立つといった対策が紹介されていたが、被害にあう受験生自身の対策ばかりが紹介され、周りの人ができることについてはあまり触れられていなかったのが残念に感じた。受験生に席を譲ったり、痴漢を見つけたらスマートフォンで大きな音を鳴らしたりするなど、周りの人が被害者を助けることができることを紹介してほしかった。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫニュース　おはよう日本」などほかの番組では周りの人たちができる対策も含めて紹介していた。いただいた指摘は現場と共有したい。

○　１月１日(日)のＢＳ１スペシャル「欲望の資本主義２０２３　逆転のトライアングルに賭ける時」(ＢＳ１　後 10:00～11:49)を見た。2017 年から年始に放送している「欲望の資本主義」シリーズを毎年楽しみに視聴している。今回は「逆転のトライアングルに賭ける時」というタイトルだったが、それがどういったことを意味しているのか、結論がよく分からなかった。番組の最後のパートで、膨張から循環、競争から協調、成長から信頼などさまざまなキーワードが紹介されたが、それらをまとめて語ることのできる学者が出演していなかったことが原因ではないかと感じた。

○　１月４日(水)の「国際報道２０２３」を見た。戦時下で新年を迎えたウクライナの状況を伝えていて、現地の実態がよく分かった。その後、世界各地の新年の様子も伝えていたが、ウクライナの状況とのコントラストに考えさせられた。ただ、後日、放送された内容を改めて振り返ろうと番組ホームページを見たが、情報量が少なく、また番組名でしか検索できず不便だと感じた。キーワード検索できるようにするなどの改善を期待したい。

○　１月８日(日)のＢＳ１スペシャル「“パンドラの箱”が開くとき 文化財返還 ヨーロッパの最前線」を見た。ヨーロッパ諸国で、かつてアフリカの植民地から収奪した文化財を返還する動きが急速に広がっていることを伝えていた。100 年も前の植民地支配の歴史に、博物館の関係者をはじめ、多くの市民、政治家が向き合い、返還に取り組んでいることに感銘を受けた。一方で、返還されるアフリカ側の保存環境の課題や、誰が返還を受けるのかをめぐり、現地で政治的な対立が発生していることなども指摘され、多角的な視点が示されていたのがよかった。日本もかつてアジアの国々を植民地支配したり占領したりしていた時代がある。日本人にとっても人ごとで済ませ

られないテーマだと感じた。今回の動きの契機として、フランスのマクロン大統領が５年前に行った演説が紹介されたが、そもそものマクロン氏の意図、動機、発言の背景を、もう少し詳しく伝えてもらえたら、より理解が深まったと感じた。

○　ＮＨＫオンラインの「ギュッと昼ニュース」を見た。その日の昼のニュースを、ＡＩを使って要約して伝えていた。要約して伝えること自体は時代のニーズにあうよいことだと思ったが、動画の再生速度を 1.25 倍にしていることは、倍速視聴を推奨しているようで違和感を覚えた。

（ＮＨＫ側）

放送を見ていない人にもニュースに触れてもらうため、さまざまな試行錯誤をしている。どのような見せ方がよいのか、いただいた指摘も踏まえて、検討してきたい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２２年１２月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１２月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１９日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

議事はまず、「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画(案)」の諮問にあたって説明があり、審議の結果、中央放送番組審議会として原案を可とする旨、答申することを決定した。その後、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋代表取締役社長執行役員）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	磯崎　功典	（キリンホールディングス株式会社代表取締役社長）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	﨑村　夏彦	（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本水泳連盟理事／シドニー五輪競泳日本代表）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜２０２３年度国内放送番組編集の基本計画（案）について　～諮問～＞

○　「４つの重点事項の具体的施策」は前回予備審議した案よりも内容が明確になったと思う。一方、「編集の基本方針」から「合理的なコスト」ということばが削除されたが、合理的なコストで事業を行うことは言わずもがなではあるものの、実際にはなかなかうまくいかないこともあり、合理的なコストで事業を行うことを常に意識する

意味で、「合理的なコスト」ということばをなくしたことは残念だ。「国内放送番組編集の基本計画」の文章で触れなくても、コスト管理はきちんとしなければいけない。分野を超えて全体を見渡し、切るところは切るという「選択と集中」をしていく必要があると思う。

○　この意見に賛成だ。民間企業では「合理的なコスト」「リーズナブルなプライス」といったことばを意識して使っている。ＮＨＫの「国内放送番組編集の基本計画」でも「合理的なコスト」ということばは残してもよいのではないか。

○　自分も同意見だ。言わずもがなのことばであっても後から検証する意味でも、文面にしておくことが重要になる。

○　前回の審議会で、「合理的なコスト」で事業を行うことは言わずもがなであり、あえて記載する必要はないのではないかと意見した。常にコストを意識し、無駄を省くことは当然だ。その上で、編集の「基本方針」の、しかも冒頭に、「合理的なコスト」と記すことで、コストカットの意識が過剰に強まり、番組制作に対する適正な資源配分がなされなくなる懸念があると感じた。「合理的なコスト」ということばを一切使うなという趣旨ではなく、副作用もあるのではないかという懸念を伝えたかった。

○　「編集の基本方針」で議論になっている部分の少し前には「限られた経営資源を最適に配分」ということばもある。全体として合理的に事業を行うのは当然だが、一方で多様な価値も生かし、合理性と多様性のバランスをとっていくことが大切だ。合理的、最適ということばで、多様性を押し殺し、一つの尺度で全体を見ようとするような傾向にならないようにしてほしい。

（ＮＨＫ側）

「編集の基本方針」の冒頭に記述した「スリムで強靭（じん）」ということばに集約して伝えることにした。コストはスリムにする一方で、強靭ということは視聴者に対するコンテンツ・サービスの質を落とさないための資源配分は行っていくということを意味している。

○　「編集の基本方針」に記載されている「スリムで強靭」と「経営資源を最適に配分」ということばに「合理的なコスト」の意味合いを込めていると理解した。ここからさらに「合理的なコスト」ということばを足すとコスト意識のほうがかなり強くなってしまう懸念があるという意見があることを踏まえ、表現はこのままでよいと思う。

○　「１．デジタル時代に新たな公共性を確立」の具体的施策について、前回の審議会で指摘した「フェイクニュース」に関する記述が見直されたことはよかった。ただ、新たな案で「情報空間全体におけるインフォメーション・ヘルス確保の問題」という表現があるが、「インフォメーション・ヘルス」ということばは最近生まれたもので、多くの視聴者にはまだ浸透していないのではないか。また、ことばの定義もまだ定まっていないのではないか。

（ＮＨＫ側）

前回提示した案で挙げていた「フィルターバブル」「エコーチェンバー」などの情報空間における課題を総括することばとして「インフォメーション・ヘルス」ということばを使った。新しいことばで、定義が定まっていないのではという指摘も踏まえ、「情報の健全性の確保の問題」と言いかえたいと思う。

○　「インフォメーション・ヘルス」ということばは、総務省の「デジタル時代における放送制度の在り方に関する検討会」の中でも出てきているが、その中で、慶應義塾大学大学院法務研究科の山本龍彦教授は、「インフォメーション・ヘルス」を「情報的健康」と説明している。「情報の健全性」とは少しニュアンスが異なるように思う。

（ＮＨＫ側）

指摘のとおり総務省の「デジタル時代における放送制度の在り方に関する検討会」の中で「インフォメーション・ヘルス」ということばが使われている。今回の「編集の基本計画」もこれと関係しているが、「インフォメーション・ヘルス」ということばは検討会での使われ方に必ずしも即したものではなく、デジタル空間における情報の課題を広めに捉えることばとして使用した。ただ、それでは広すぎて誤解を生むということであれば、今までの議論を踏まえ「情報空間における健全性」と言いかえるべきと考える。その定義するものは、これからＮＨＫが身をもって示していかなければならない。何か答えがあり、その物差しで全部説明できるということではなく、ＮＨＫもその物差しを作っていく役割を果たしていく姿勢を示すことに尽きるのではないか。

○　「情報空間全体におけるインフォメーション・ヘルス確保の問題」という記述は「情

報空間全体における健全性確保の問題」と言いかえることで、同意をいただけたと思う。文言の修正については委員長に一任とした上で、各委員の意見の趣旨が番組編成に生かされることを前提に、今回の原案を可とし、答申したいと思う。異議はないか。

○　異議なし。

○　原案を可とし、答申することにする。

（ＮＨＫ側）

答申いただき感謝申し上げる。最後に議論となった内容も心して、来年度に向け取り組んでいきたい。中央放送番組審議会の答申をいただいたので、「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画（案）」を経営委員会に提出し、議決を得たい。来年度の具体的な番組編成を記した「編成計画」については、２月に予定している審議会で報告させていただく。なお、１ページ目の「中期経営計画（２０２１－２０２３年度）の修正案」という記述は、基本計画の公表の時点で修正案について経営委員会の議決が得られれば、「案」を外すこととしたい。

＜放送番組一般について＞

○　１１月２７日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀「第４回　世界フードショック～揺らぐ『食』の秩序～」を見た。日本の食料をどのように確保するのかという課題に正面から向き合い、食料確保が相当危機的な状況にあることを伝えていた。ロシアによる「食料の武器化」や、南米の穀物の買い付けで日本が中国に負け始めているといった課題も広く伝えていた。フランスの経済学者のジャック・アタリさんが、「国家における『食』の位置づけを考え直さないと、農業全体を失う危機に直面する」と警鐘を鳴らすことで、視聴者に行動を促したのはよかったが、具体的に何をすればよいのか分かりづらかったのではないかと感じた。街角の消費者の反応なども取り上げたらよかったのではないか。また、野菜が年末には買いやすい価格になるという見通しを伝えるニュースで、消費者の歓迎する声を紹介していたが、その裏には生産者の苦悩があることも伝えてほしい。その点について、１２月５日(月)の「首都圏ネットワーク」で「本当は手間がかかっていてもう少し高くしたい」というネギ農家の本音を紹介していたのはよかった。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫスペシャル　混迷の世紀」シリーズの中で今回の番組は視聴者に一番身近なテーマだったのではないかと思う。これからも視聴者により自分ごととして感じてもらえるような番組作りに取り組んでいきたい。

○　１２月３日(土)のＮＨＫスペシャル「キラキラムチュー　～発達障害と生きる～」を見た。発達障害のある４人の小中学生に密着し、好きなことに夢中になることで苦手なことを少しずつ克服しようと努力する姿を紹介していた。生き生きと好きなことに没頭する子どもの姿、そこに至るまでの家族の苦労、さらには思春期を迎えて周囲が自分のことをどう見ているのかを意識して苦悩する姿まで幅広く取り上げていたことは非常によかった。発達障害についてよく知ることができる番組で、社会の理解を促すきっかけになったのではないか。また、専門医が発達障害のある子ども170人を２０年間追跡調査した結果、好きなものが支えとなって、社会参加や自立生活によい影響を与えることが分かってきたことをあわせて紹介していたのは、発達障害の子どもを持つ家族に勇気を与えたと思う。番組に登場した子どもが「発達障害は僕のアイデンティティー」と誇らしげに語っていたが印象的だった。この番組の放送後の１２月１３日（火)、公立小中学校の通常学級に通う児童・生徒の８．８％に発達障害の可能性があることが文部科学省の調査で明らかになったというニュースが伝えられた。このニュースのあとに番組を放送していれば、より多くの人が見たのではないかと少し残念に思った。この番組がきっかけとなり、１２月１７日(土)の土曜ドラマ「ひきこもり先生シーズン２」も見た。このドラマで、不登校の子どもたちの授業の遅れをフォローする「ステップルーム」の存在を知った。非常によい施策だと思ったが、「ステップルーム」に行くことで差別を受けたり、「ステップルーム」に行きたくないので過度に無理をしたりする子どもの姿も描かれていて、難しさも分かった。これらのような番組を放送することで、発達障害をはじめ教育の課題に対する社会の理解を高めることに取り組んでほしい。

○　１２月３日(土)のＮＨＫスペシャル「キラキラムチュー　～発達障害と生きる～」を見た。専門医による２０年間の追跡調査から、好きなものがあることが社会参加や自立生活によい影響を与えることが分かってきたことは、発達障害の子どもを持つ家族に勇気を与えたと思うが、それでも家族にとっては不安も多くあると思う。発達障害に対する国や自治体の支援や学校での教育のあり方なども取り上げると、より安心できるのではないか。鉄道に夢中になっていた小学５年生の子どもが中学生になり、勉強が難しくなって悩む姿を取り上げていたが、さらに成長して新たな障害にぶつかることを回避するためにどのような方法があるのか知りたいと思った。今後、取り上

げることを期待している。

（ＮＨＫ側）

この番組は、子どもたちのキラキラしている姿を大事にするため、実名、顔出しに協力してもらえる子ども、家族に出演してもらい、ディレクターが時間をかけて丁寧に取材して番組にし、「君の声が聴きたい」キャンペーンと併せて放送した。当事者の子どもたちや家族、そして大人になって壁にぶつかっている人に少しでも力を与えられるよう取材を続けていきたい。

○　１２月１０日(土)のＮＨＫスペシャル「戦禍の国のキックオフ　～サッカーが映すウクライナのいま～」を見た。ロシアの攻撃が続く中で再開したウクライナのサッカー国内リーグを取り上げていて、サッカーを通じ、ウクライナの現状を感じることができた。空襲警報で試合が中断したり、スタジアムが攻撃されたりするなど、悲惨な状況にショックを受けた。ウクライナの人にとってサッカーは生活の大きな部分を占めていていると感じるとともに、ＮＨＫの取材力と冷静に事実を伝える姿勢に感心した。「ＦＩＦＡワールドカップ２０２２」が盛り上がっている時に、サッカーを通じて戦争について考える番組を放送した意義は大きい。今回は選手と家族、サポーターを中心に取り上げていたが、国内リーグを支える運営の人の姿も見てみたいと思った。また、ウクライナだけでなく、ロシアのアスリートたちが今どのような状況に置かれているかも気になっている。機会があれば取り上げてほしい。

○　１２月１０日(土)のＮＨＫスペシャル「戦禍の国のキックオフ　～サッカーが映すウクライナのいま～」を見た。戦時下でサッカーに向き合う人々を現地取材していて、ウクライナの人の平和への思い、戦争に対する怒りを深く感じた。多くのサポーターが率先して戦場に赴き、戦死しているショッキングな事実や、故郷を離れプレーする選手、家族と連絡が取れないままメンタルケアを受けながらプレーする選手、ロシアリーグでプレーしていたため裏切り者とされた選手など、ウクライナのサッカーの現状や、選手の今をたどる非常に中身の濃いドキュメンタリーだった。ウクライナで起きている現実を伝え続けようとするＮＨＫの意思を強く感じた。非常にすばらしい番組だったので、国際放送で世界に向けて発信してもよいのではないか。非常に重たい内容だったが、戦争の悲惨さを伝えるＮＨＫならではの番組だと感じた。

（ＮＨＫ側）

「ＦＩＦＡワールドカップ２０２２」でサッカーが盛り上がる中、公共メディアとして伝えるべきことは何かと考えてこの

番組を放送した。ウクライナでの取材はリスクもあるが、安全管理を十分に行った上で現地取材をした。

○　１２月１１日(日)のＮＨＫスペシャル「金正恩の北朝鮮　～“先鋭化”の実態を追う～」を見た。ミサイルの発射位置や北朝鮮船籍の船の位置情報、脱北者からの証言などさまざまなデータを分析して、北朝鮮のキム・ジョンウン（金正恩）総書記の強硬姿勢の背景に迫っていて見応えがあった。ただ、キム総書記の１０年間に及ぶ約１万 5000 の談話、演説をＡＩで分析して、トランプ前大統領との米朝首脳会談をきっかけに核・ミサイル開発を先鋭化させていったと結論づけていたが、米朝の交渉が決裂に至ったエピソードはよく知られている話なので、膨大な文書をＡＩで分析した結論としては、ややもの足りなく感じた。とは言え、膨大な文書のＡＩ解析はＮＨＫならではのすばらしい手法だと思うので、今後の活用に期待している。

（ＮＨＫ側）

この番組は 公開されている情報を収集して分析する手法で制作した。ＡＩによる解析は、興味深い結果が分かることもあるが、そうでない場合もある。新型コロナウイルスに関する論文の分析など、興味深い知見が得られた実績もある。これまで積み重ねてきた知見を生かし、今後もさまざまな番組で活用していきたい。

○　１１月５日(土)の有吉のお金発見　突撃！カネオくん「食卓に欠かせない！“たまご”のお金の秘密」を見た。日本はたまごの１人当たりの年間消費量が世界２位の世界有数のたまご消費国であることが紹介されていたが、たまごの値段が５０年以上ほぼ変わらない“物価の優等生”であることは伝えていなかった。この１年でアメリカのたまごの値段が３倍ほどに値上がりしているのに対し、日本のたまごの値段はあまり上がらず、養鶏農家は苦しんでいる。日本ではＧＰセンターという施設で衛生管理をしているからこそ生たまごを食べることができることを紹介していたのはよかったが、“お金にまつわるヒミツ”について取り上げる番組だからこそ、収益悪化に苦しむ養鶏農家の状況を伝えてほしかった。

○　１２月５日(月)のエマージェンシーコール　～緊急通報指令室～「埼玉」(総合 後10:00～10:45)を見た。１０月１０日(月)の「東京」を見た際は、オペレーターたちがメンタルヘルスをどう保っているのか気になったが、今回の「埼玉」では、オペレーターが勤務時間外にランニングをして気持ちを落ち着かせている場面が紹介されていて安心できた。前回に引き続き、緊張感のある現場で、オペレーターが冷静かつ愛

情をもって対応している姿に感動した。オペレーターがいったいどのような訓練を受けているか興味を覚えた。何らかの番組で取り上げられることを期待している。

○　１２月６日(火)のクローズアップ現代「きこえますか？　子どもの心のＳＯＳ　コロナ禍のメンタルヘルス」を家族で見た。大事な問題だと真剣に視聴していた親に対して、子どもはあまり関心を示していなかった。子どもがもっと身近に感じられる場面や、子ども自身の声を取り上げれば、子どもにもより訴求できたのではないかと感じた。１２月１３日(火)の「“母親の後悔”その向こうに何が」も家族で見た。子どもが親のつらさに共感を示し、子どもたちにとっても大人の大変さが少し分かるような番組だった。このように世代を超えた対話のきっかけになることも、公共性の一つだと感じた。「サラメシ」は家族全員で楽しみながら見ている。総合テレビの番組も、より子どもや若者に訴求することに努めてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

「きこえますか？　子どもの心のＳＯＳ　コロナ禍のメンタルヘルス」は子どもに、「“母親の後悔”その向こうに何が」は男性に見てほしい番組だった。どうすればそのような視聴者にも届くのか引き続き検討していきたい。

○　１２月８日(木)の「ドイツで国家転覆目指すテロ組織摘発」のニュースを見た。摘発のニュースは時間をかけて丁寧に伝えていたが、その後の情報が伝えられていない。日本人の暮らしには直接関係ないかもしれないが、世界的には重要な動向の一つとなるかもしれないので、機会があれば掘り下げて伝えてほしい。

○　１２月１３日(火)のクローズアップ現代「“母親の後悔”その向こうに何が」を見た。ＳＮＳなどで「母親になって後悔してる」という本が話題になっているのが気になっていたので、この番組で取り上げられてよかった。番組では母親になった際に、よい母親像という固定概念に縛られてしまう状況がある一方で、それにとらわれすぎなくてもよいという価値観にも触れられた。これから母親になろうとする女性が、自分らしく選択してよいと、肩の荷が少し下りたように感じられるすばらしい番組だった。また、母親をテーマにした番組だったが、後悔していると言われる子どもに対する配慮もあって非常によかった。

○　１２月１４日(水)の歴史探偵「情報戦　関ヶ原」を見た。関ヶ原の戦いの直前に送られた500通の書状を分析し、当時繰り広げられた情報戦の模様を歴史学者の解説を交えて分かりやすく取り上げていて興味深かった。西軍の総大将ながら関ヶ原の戦い

に参戦しなかった毛利輝元の心理と行動や、戦いがたった１日で決着した背景など、新しい発見が多く、非常に興味深かった。

○　１２月１７日(土)の「三谷幸喜の言葉～『鎌倉殿の１３人』の作り方～」(総合 後3:20～3:54)と、１２月１５日(木)の「ＮＨＫ　ＭＵＳＩＣ　ＳＰＥＣＩＡＬ　松任谷由実　～私と荒井由実の５０年～」(総合 後 10:00～10:44)を見た。どちらも日本の文化をけん引する一流のクリエーターが、アイデアを出し、それを形にする過程を見ることができて、非常に興味深かった。トップクリエーターの頭の中がどうなっているかということには多くの人が興味を持っていると思う。「三谷幸喜の言葉」は、大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」の脚本を手がけた三谷幸喜さんと、ドラマのスタッフとの間で交わされたメールのやりとりをもとにしていて、三谷さんの頭の中を旅するロードムービーように感じられた。女性キャラクターの名前を身近なものからつけたことや、演じる部屋や服装などが具体的にどうなるのか分からない状態で脚本を執筆していたことなど、制作の背景を知ることができて非常によかった。「ＮＨＫ　ＭＵＳＩＣ　ＳＰＥＣＩＡＬ　松任谷由実」について、松任谷由実さんを取り上げた番組は数多くあるが、今回の番組はレコーディングに参加したミュージシャンや、アルバムのジャケットを手がけたデザイナーのインタビューを通して、松任谷さんのクリエーターとしての強いリーダーシップが伝わってきて見応えがあった。松任谷さんがデビュー４０周年の際に楽曲発表時のオリジナルメンバーと演奏した「ひこうき雲」など、貴重な映像を見ることができたのもＮＨＫならではで、非常に充実した内容だった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫの番組には多くのすばらしいクリエーターに関わってもらっている。これらの番組のほかにも１２月１１日（日）の「鎌倉殿の１３人　～オープニング１３の秘密～」(総合 後4:15～4:30)では、大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」のタイトルバックに焦点を当て、映像、音楽、題字を担当したクリエーターの発想を描いた。

○　１２月１８日(日)の日曜討論「原発“方針転換”　エネルギー政策を問う」を見た。エネルギー問題、とりわけ原子力発電の問題について、西村康稔経済産業大臣と３人の有識者が議論していた。有識者がそれぞれの立場から鋭い指摘をしていたことが興味深かった。「エネルギーの問題をテーマにするならば、再生可能エネルギーを主力電力としていくことが政府の方針である以上、原子力発電についてではなく、再生可能エネルギーをどうするのかという議論をすべき」という番組のテーマ自体を問う指

摘もあって感心したが、全体的には大臣が有識者の意見を聞いた上で無難に回答するといった形になってしまっていて、激しい討論にはなっていなかったと感じた。日本が進むべきエネルギー政策については視聴者の関心も高いと思うので、激しい議論となるような工夫があればよりよかった。

（ＮＨＫ側）

討論番組では、白熱した討論になるかという点は、課題だと感じている。冷静ながらも白熱した議論が実現するよう取り組んでいきたい。

○　１２月１８日(日)のダーウィンが来た！「星野道夫が見た　幻のトナカイ大集結！」を見た。自然を愛した写真家の星野道夫さんに焦点を当てながら、野生のトナカイが山を越えて集結する様子を追った番組で、迫力のある映像に魅了されただけでなく、星野さんが撮影したすばらしい写真に心をわしづかみにされた。また、1992年の星野さんの撮影に同行取材した際の映像を紹介したこともＮＨＫならではと感心した。星野さんは一人で撮影に行くことが多かったので、撮影の模様を記録した映像は大変貴重だ。映像の中でトナカイの死骸を発見した星野さんが、これが土の養分となり、植物が育って自然が循環していくと、自身の自然観を語っていたことが印象的だった。「ダーウィンが来た！」では、専門家などが登場することはあっても、通常は特定の人物から離れた視点で自然や動物を語っているが、今回、星野さんという特定の人物の目を通して語ったことは珍しく思った。人と自然のかかわり方をもう一度考える必要がある時代になっていると思うので、このような自然と関わってきた人物に焦点を当てる企画があってもよいと感じた。ＮＨＫには過去の貴重な映像もあるので、これからもこのような企画を続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

「ダーウィンが来た！」は新型コロナウイルスの影響で３年近く海外取材ができなかったが、今年の夏から再開した。星野さんの生誕７０年の節目にあたり、自宅を取材した際に、未公開の写真が見つかり、それも踏まえて今回の番組を制作した。星野さんについては、今回の「ダーウィンが来た！」で放送したものに、新たな素材を加えて、特集番組を制作することを検討している。

○　「ＦＩＦＡワールドカップ２０２２」を見ていた。生中継でリアルタイムならではのだいご味を堪能することができた。

○　１２月１８日(日)のＦＩＦＡワールドカップ２０２２　決勝「アルゼンチン×フランス」を見た。試合自体はもちろん、試合終了後の表彰式まで伝えていて、余韻を楽しむことができた。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫのスポーツ中継は最後まで伝えることを基本としていて、「ＦＩＦＡワールドカップ２０２２　決勝」では表彰式まですべて伝えることにした。

○　大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」を見ていた。史実とフィクションのバランスが絶妙で、最後まで引きつけられた。「大河ドラマ」は、歴史という結末が分かっている物語だが、ただ史実をなぞるだけではなく、思い切ったフィクションを交えることで、さまざまな解釈が生まれ、家族、友人などで話し合うきっかけとなった。これも新しいドラマの楽しみ方なのではないかと感じた。また、タイトルバックが今までよりもコンパクトになり、ドラマの導入から集中することができた。来年の「大河ドラマ」にも期待したい。

○　大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」を見ていた。テンポがよい上に、めりはりも深みもあるドラマだった。連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」、夜ドラ「あなたのブツがここに」でも同様のことを感じたが、若い世代にも十分に通用するドラマだと思う。

（ＮＨＫ側）

大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」について、家族、友人の間だけでなく、ＳＮＳ上でも交流が広がっている。番組をきっかけにさまざまな話題が生まれ、世代を超えて会話が広がっていることは、番組制作の一つの理想で、制作者として非常にうれしく感じている。「鎌倉殿の１３人」では、全国４０か所以上でファンミーティングを実施した。畠山重忠、三浦義村、比企能員など、今まで広く知られていなかった歴史上の人物に焦点が当たったことで、ゆかりの地域では、地元の歴史を見つめ直すきっかけになったという話も聞いている。

○　大河ドラマ「どうする家康」について、時期を分けて出演者を発表するなど、話題が尽きないよう工夫していて、今後の展開に期待している。ただ、ＳＮＳアカウント

の名前を「2023 年　大河ドラマ『どうする家康』」としているが、検索した際に名前が途中までしか表示されず番組名が分からなくなってしまうことがあるので、名前のつけ方を工夫した方がよい。ドラマの中では、主人公の徳川家康が選択を迫られる場面もあるかと思うので、それにあわせてＳＮＳで「あなたならばどうする？」といったアンケート形式の質問を投げかけると、視聴者が気軽に参加できて話題にもなるのでないか。

○　１１月２３日(水) のハートネットＴＶ「＃ろうなん１１月号 ろうなんと映画、そして芸術、芸能」を見た。ろうなん、即ち、ろう者と難（なん）聴者に向けた番組で、ろう者のゲストコメンテーターは手話で語り、画面にはテロップがつく。今回は、ろうの俳優が出演した映画「ＬＯＶＥ　ＬＩＦＥ」の紹介から始めて、日本の映画やドラマの中でのろう者の扱われ方の歴史を振り返りながら、ろう者の演劇集団による手話狂言の取り組みや、「耳が聞こえない人のための俳優養成講座」といった最近の動きまでを紹介していた。ＮＨＫは以前から、ろう者、難聴者のための番組を放送し続けていると知って、その地道な取り組みに大変感銘した。こうした番組が、ろう者、難聴者に向けた情報の提供にとどまらず、健常者にも広く見てもらい、共生社会を考えるきっかけになるとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

昨年度までは「ろうを生きる　難聴を生きる」という番組で、聴覚障害のある方が必要としている情報や、それぞれの地域で生き生きと活躍している障害者を紹介してきた。今年４月から「ハートネットＴＶ」の中のシリーズ「＃ろうなん」としてリニューアルし、当事者の視点とともに、より自由テーマを扱うことで、幅広い視聴者に理解を深めてもらうことを意識して番組を制作している。

○　１２月１３日(火)の先人たちの底力　知恵泉「“さる知恵にあらず”　天下人秀吉の交渉術」について、番組を見た知人から、難しくてついていけなかったという話を聞いた。今回の番組は登場する人物が多く、番組を理解するには前提知識がかなり必要だと感じたので、もう少し登場人物をしぼったほうがよいと思う。

○　１２月１４日(水)のハートネットＴＶ「１２月特集　進まぬ退院　“社会的入院”を考える」を見た。日本で精神科病院に１年以上の長期入院をしている患者がおよそ１６万人いる現状があり、なぜ退院が進まないかという要因を本人、家族、病院といったさまざまな角度から非常に分かりやすく伝えていた。何十年間もの入院を経験した

当事者、病院経営者、支援団体の人の生の声を伝えたことがよかった。特に退院支援を行う支援団体の代表が、現在の病院のあり方を鋭く批判していたことに共感した。“社会的入院”の問題は以前から課題と指摘されていても、あまり変化がないと感じている。このような社会課題を、多角的な視点で議論することが、問題点の気づきにもつながると思う。継続的に取り上げることで変わる機運が生まれることを期待している。

（ＮＨＫ側）

「ハートネットＴＶ」の取材では、放送の意義は理解していても、顔を出しての取材に応じることには抵抗を感じる人も多い。そのような中で番組の取材に応じ、社会に対し課題を投げかけられればと、協力してくれた取材相手に感謝したい。

○　１２月３日(土)の「こうして僕らは医師になる～沖縄県立中部病院　研修医たちの１０年～」(ＢＳ１　後 8:00～9:39)を見た。沖縄の病院で研修医として学んだ若者たちが１０年後に全国各地で活躍する姿を取り上げていた。医療の現場の最前線に立つ若い医師が、さまざまな思いを抱いて、命と向き合っている姿に心打たれた。また、海外ドラマで見たような救命救急センターでの研修が日本でも実際に行われていることを知ることができたことも有意義だった。この番組に登場した医師たちの研修医時代を取材した１０年前の番組「こうして僕らは医師になる～沖縄県立中部病院　研修日記～」も、あわせて見たかった。

（ＮＨＫ側）

この番組は１０年前の番組と同じディレクターが制作に当たった。取材した医師たちとディレクターの１０年にわたる信頼関係があって制作した番組だ。大きな反響もあったので、今回の番組と１０年前の番組をあわせて再放送することを検討している。

○　この番組が「ＮＨＫオンデマンド」で見られないことは残念だ。「ＮＨＫオンデマンド」がより充実することに期待している。

○　１２月１１日(日)のＢＳ１スペシャル「米中対立　南太平洋で何が」を見た。中国の海洋進出が東シナ海、南シナ海を超え、近年では南太平洋の島しょ国をめぐって米中が攻防し、そこに日本も深く関わっている実情を、ソロモン諸島を舞台に描いていた。日本の海上自衛隊の護衛艦が南太平洋諸国を友好親善訪問する中で、自衛隊の側

が米軍から給油を受けている場面があり、日米の一体化の進展ぶりに目を見張った。ほとんどの国民が知らないであろう自衛隊の海外での活動を伝える、意義のある密着リポートだと思う。番組の最後に、太平洋戦争の激戦地だったガダルカナル島が取り上げられた。当時の不発弾が 100 万発も残っていて、今でも不発弾の事故で死傷する人がいることを知った。「我々は今も戦争を体験している」「二度と戦争に巻き込まないでください」という島民のことばが印象的で、単に大国の攻防を描くだけではなく、そこに生きる人たちの視座がきちんと示されたことはよかったと思う。

○　「クラシック倶楽部」を見ている。１２月１２日(月)から１６日(金)まで「第９１回日本音楽コンクール」本選会の模様を紹介していた。このコンクールは若手音楽家の登竜門として知られるもので、将来日本を代表する音楽家になるような若手が出場していて、その記録には資料的な価値がある。コンクールの模様をアーカイブし、視聴者がアクセスできるようにすれば、将来の視聴者が有名音楽家の若い頃の演奏を見ることができ、公共メディアＮＨＫならではの取り組みになると思う。今後に期待したい。

（ＮＨＫ側）

「日本音楽コンクール」は長い歴史を持つイベントで、バイオリニストの諏訪内晶子さんや、ピアニストの反田恭平さんなど、日本を代表する音楽家もかつて出場したコンクールだ。指摘のように貴重な映像資料なので、アーカイブスとしての活用も検討していきたい。また、このコンクールの存在をより多くの人に知ってもらえるようにも努めたい。

○　「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」に期待している。「ＮＨＫ紅白歌合戦」は日本最大の音楽フェスティバルだと感じていて、今まで見たことのない人もぜひ見てほしいと思っている。動画共有サイトなどデジタルのプラットフォームにチャンネルを作り、さまざまな層にリーチすることを試みたらどうか。このためだけの展開は制作現場にとって負担になるかもしれないが、日常的に取り組み、蓄積されたものを展開するのであれば負担も少なくなるのではないか。こうした展開が、若い世代の視聴や「ＮＨＫプラス」の普及にもつながるのではないか。

（ＮＨＫ側）

動画共有サイトに「ＮＨＫ　ＭＵＳＩＣ」というチャンネルを立ち上げ、さまざまな取り組みを行っている。デジタル展開の知見はまだ少ないが、蓄積を重ねてブラッシュアップしてい

きたい。

○　「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」について、さまざまな番組の中でＰＲをしているのを見た。また、「大河ドラマ」についても、トーク番組などにドラマの出演者が出演したり、登場人物に関係する歴史番組が再放送されたりと、ＰＲに力を入れていると感じる。番組のＰＲをどこまで展開するのか基準のようなものはあるのか。

（ＮＨＫ側）

「大河ドラマ」や「連続テレビ小説」では、放送前や中盤のタイミングで周知を行うことが多いが、視聴者がドラマのストーリーをより楽しむために役立つ情報がある番組と、コラボレーションをすることがある。そうすることで、それぞれの番組を見ている視聴者が、相互に新しい発見をするきっかけになればと思っている。今年の６月には大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」と「１００カメ」でコラボレーションをしたが、このような単なる番組の広報ではなく、視聴者により番組を楽しんでいただくためのコラボレーションを進めていきたい。また、その都度効果も検証するようにしている。

○　ＳＮＳで写真を投稿する際、ＮＨＫのアカウントにタグ付けができない設定になっているようだ。有名人が自分の出演した番組を自身のＳＮＳで紹介する際に、ＮＨＫアカウントにタグ付けできれば、ＮＨＫアカウントの認知の向上につながると思うので、タグ付けを可能にするようぜひ検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

タグ付けについては、現状、アカウントごとの運用で統一されていないが、指摘を踏まえて、担当セクションや各制作部局で検討したい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２２年１１月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１１月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２１日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１３人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２０２２年度第２四半期・７～９月）について説明があった。続いて、放送番組の種別および種別ごとの放送時間（２０２２年４～９月分）と「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画（案)」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋代表取締役社長執行役員）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	崎村　夏彦	（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	橋本　麻里	（公益財団法人永青文庫副館長）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２０２２年度第２四半期・７～９月）について＞

○　今期と比較して前年同期がよく見られたのは、東京オリンピック・パラリンピックの影響が大きいと考えられる。

○　「ＮＨＫプラス」の視聴ユニークブラウザ数が着実に増加していることはよい。一

方で、ユニークブラウザあたりの平均視聴分数はやや減少している。視聴者ニーズを理解する上で、１週間ごとだけでなく、日ごとの特徴的な動きも分析するとよいのではないか。またデバイスごとの見られ方についても、個別に把握するのが望ましいと思われる。

（ＮＨＫ側）

去年の第２四半期には東京オリンピック・パラリンピックが開催されていた。「ＮＨＫプラス」での東京オリンピック・パラリンピック中継の同時配信では、登録案内のメッセージの表示を外して、誰でも制限なく見ることができるようにしたため、通常と比べて視聴分数が伸びた。東京オリンピック・パラリンピックで「ＮＨＫプラス」が広く認知され、その後の「第７２回ＮＨＫ紅白歌合戦」や北京オリンピック・パラリンピックなどを経て視聴ユニークブラウザ数は順調に増えている。今年度、全体の視聴分数は東京オリンピック・パラリンピックがあった去年ほど大きく伸びていない一方で、視聴ユニークブラウザ数が増えたため、ユニークブラウザあたりの視聴分数はやや減少した。「ＮＨＫプラス」の視聴分数や視聴ユニークブラウザ数は、１週間ごとに集計した数値を局内で共有しているほか、日ごとの視聴ユニークブラウザ数・視聴分数の動きも追っており、特徴的な動きがあった場合には、その都度分析して共有するようにしている。大きな事件や災害などがあった際に、視聴ユニークブラウザ数、視聴分数とも大きく伸びる傾向がある。今後も視聴ユニークブラウザ数の増加に向けてサービスの周知・広報に取り組んでいきたい。

＜２０２３年度国内放送番組編集の基本計画（案）について　～予備審議～＞

○　「編集の基本方針」の内容には、基本的には賛成だ。この方針のもとＮＨＫらしさを失わずに進めてほしい。ただ、受信料を値下げし、事業の規模を縮小することにはやや不安を感じている。2023 年度末に衛星波は２Ｋのうち１波を削減するのを踏まえ、利便性を損なわず新たな魅力を創出できるよう４月からの番組編成に工夫をこらすということだが、具体的にはどのように工夫をするのか。現在のＢＳプレミアムの番組を新ＢＳ４Ｋに移行すると推察されるが、「各波の基本方針」に記載されているジャンルの例はＢＳプレミアムと新ＢＳ４Ｋで若干の違いがある。この違いには何か

理由があるのか。特に理由がないのであれば統一すべきだと思う。

（ＮＨＫ側）

衛星波の再編について、新ＢＳ２Ｋは、現在のＢＳ１とＢＳプレミアムの魅力を凝縮したチャンネルとする。再編直後の2024年度４月の時点では、新ＢＳ２Ｋでは、今、２Ｋテレビで衛星放送を視聴しているみなさまの利便性を確保できるような編成を考えている。その後、４Ｋテレビの普及状況を見ながら、新ＢＳ２Ｋ、新ＢＳ４Ｋの特徴を明確にしていくことを検討している。「４月からの番組編成に工夫をこらす」ということは、４月の時点から１２月の再編を見越した編成にして、再編時に視聴者を混乱させないように工夫していくということだ。それぞれのチャンネルのジャンルの例示は改めて精査して整理したい。

○　「２０２３年度の放送における４つの重点事項」の１番目を「デジタル時代に新たな公共性を確立」としたことに、ＮＨＫの覚悟を感じた。視聴者、国民が起点であることを意識し、明示しているのがよい。具体的施策の「フェイクニュースあふれる時代の公共性を追求」について、３月６日(日)のＮＨＫスペシャル「攻撃は止められるのか～最新報告　ロシア軍事侵攻～」でも取り上げられていたように、国家が誤った情報を発信している状況に対して実際に起きている事実を個人がＳＮＳで発信するなど、ＳＮＳがポジティブな役割を果たしていることがある。インターネットと放送を対比するようにして、インターネットの世界にフェイクニュースがあるという書き方は、ミスリードするのではないかと感じた。また、「フェイクニュース」ということばも誤解を招くように感じるので、「ミスインフォメーション」「誤情報」というような表現のほうがよいのではないか。インターネットの世界だけでなく、既存のメディアも含め、さまざまなメディアで誤った情報のリスクはあると思うので、そうした観点を盛り込んだほうがよいと思う。２番目の重点項目に「時代を超える本物のコンテンツを提供」とある。動画配信者が作るコンテンツを本物ではないという人もいるが、 それは年長の世代の価値観で、若い世代にとっては、いわゆる大人が言う“本物のコンテンツ”は作り込み過ぎているため、うそくさく、本当のことを伝えていないという感覚がある。ＮＨＫが若い世代に向き合っていくのならば、表現を再検討してもよいと思う。「将来世代まで残る世界水準のコンテンツを追求」の施策で、「世界のコンテンツ業界で存在感を発揮します」とあるのは非常にチャレンジングな表現

だと思う。ただ、コンテンツ業界といっても幅が広いので、どの領域で存在感を発揮するのかを明確にしたほうが、実際の評価につながるのではないか。

○　「フェイクニュースあふれる時代」という表現には、フェイクニュースが問題となっていても、「あふれている」というほど多いのかという違和感を覚える人もいると思う。改めて表現を検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

「本物のコンテンツ」ということばには、時代を超えて残るコンテンツということと、さまざまな展開ができる強いコンテンツという意味を込めている。意図がうまく伝わるよう、改めて表現を検討したい。「世界水準のコンテンツ」について、世界の公共放送や放送を軸としたサービス事業者と協力し、ノウハウと資金を結集した国際共同制作に積極的に参画していくことも念頭に置いている。

○　４つの重点項目の「１．デジタル時代に新たな公共性を確立」と「４．映像・音声資産の再構築と価値還元」は、デジタル時代を踏まえたものだと思う。「１．デジタル時代に新たな公共性を確立」の具体的施策「視聴者のみなさまとの共創で新たな価値を創造」に「オープンデータ」ということばがあるが、デジタル時代への対応の大きな鍵を握るものなので、ある程度定義を明確にしたほうがよいのではないか。番組のタイトル、内容、出演者など番組に関連するデータの検索や、そのデータを活用してＳＮＳから番組情報へのリンクなどの可能性もあると思う。フェイクニュースあるいは誤情報に対しても、情報に裏付けを与えることで公共的な価値を発揮できるのではないか。方針にはこのような意図が含まれているか確認したい。「４．映像・音声資産の再構築と価値還元」の具体的施策に「今を生きるヒントにアーカイブスを活用」について、過去の番組そのものを全て公開するには権利処理などさまざまな課題があるが、番組に関連するデータのみの公開であれば比較的容易だろう。過去の全番組のタイトル、内容、出演者などのデータをオープンデータとして提供し、国民が自由に検索できるようにする、あるいはアーカイブスでの公開の優先順位づけに活用できるようにする。そのためのロードマップを作っていくのがよいのではないか。「２．時代を超える本物のコンテンツを提供」で「本物」ということばに対しての議論があったが、情報に裏付けがあるかどうかということが重要なので、そのことをもう少し打ち出したほうがよいと思う。

（ＮＨＫ側）

ことばの定義については、人によってイメージがぶれないような形で提示したい。アーカイブスについて、各放送局に設置している端末で、かなりの量のアーカイブスにアクセスできるが、放送局に行かなければそのアーカイブスを利用できない。より多くの人に、オープンに利用できる接触の機会を持ってもらうために、仕組みを整えなくてはならないと認識している。

○　現在の「ＮＨＫオンデマンド」では、ＮＨＫの保有する全てのコンテンツを見ることはできないので、充実をぜひ検討してほしい。

○　「各波の基本方針」について、ほかの委員の指摘もあったが、ジャンルの例の表現が少しずつ違うのが気になった。「美術」「音楽」は「芸術」に含まれると思う。それぞれの波で重点的に取り上げるジャンルが異なるのでなければ、「芸術」という表現がよいのではないか。

○　受信料の値下げや保有メディアの整理などの事業規模の縮小を、「大きなチャンスにしていきます」という表現が分かりにくい。もう少し前向きな表現にした方がよいと思う。「４．映像・音声資産の再構築と価値還元」の具体的施策の「今を生きるヒントにアーカイブスを活用」について、「2025 年に迎える放送開始 100 年を前に」という記載があるが、放送開始 100 年に向けての取り組みがあれば具体的に挙げたほうがよいと思う。まだ公表できないのであれば、具体性がなく中途半端な記載だと感じる。

（ＮＨＫ側）

放送開始 100 年に向けたアーカイブス活用の取り組みの一つとして、今年の夏に「ＮＨＫ戦争を伝えるミュージアム」というホームページを開設した。第一次世界大戦、第二次世界大戦から現在のロシアによるウクライナ侵攻まで、戦争に関するアーカイブスを集め、次世代に伝えるためのプラットフォームにしていきたいと考えている。

○　「２０２３年度の放送における４つの重点事項」はそれぞれよく考えられた内容だと思う。ただ、４つの重点事項がそれぞれ別個の取り組みを指し示しているような印象を受ける。例えば、「１．デジタル時代に新たな公共性を確立」の災害や学びに関する項目は、「３．地元密着と地域連携を強化」にも関わると思う。４つの重点事項の相互の関係が強調されるとよりよくなるのではないか。

（ＮＨＫ側）

４つの重点事項に共通するのは、公共性、本物感、地域放送局のネットワーク、100 年近くにおよぶこれまでの蓄積など、ＮＨＫの強みをさらに生かそうというものだ。共通するものがあることをもう少し明確にできるよう検討したい。

○　「受信料の値下げや保有するメディアの整理」などの事業規模の縮小が、なぜ「放送・サービスの質を向上させる大きなチャンス」になるのかが分かりにくい。「編集の基本方針」の第１項に「合理的なコストで」とあり、４つの重点事項の「２．時代を超える本物のコンテンツを提供」にも「合理的なコストで」とある。「合理的なコスト」で事業を行うことは言わずもがなであり、「編集の基本計画」の中にあえて記載する必要はないのではないか。「視聴者リレーション」ということばが使われているが、一般にはあまり浸透していないので、具体的な中身を説明した方がよい。「３．地元密着と地域連携を強化」の記述は、それぞれの地域の中で完結する取り組みが多いように感じる。単なる地域密着を超えた、ＮＨＫならではの全国ネットワークを生かした発信などにも触れた方がよい。「４．映像・音声資産の再構築と価値還元」にある「アーカイブスの活用」はよいことだと思うが、視聴者への還元は無償なのか。ＮＨＫでは過去の「大河ドラマ」「連続テレビ小説」などのＤＶＤを販売しているが、有償のコンテンツと、社会の共有財産として無償で還元するものとの線引きを、どのように考えているのか。

（ＮＨＫ側）

事業規模の縮小をチャンスにというのは、経営資源が厳しくなる中で、視聴者ニーズに基づいたサービスに、より的確に集中することを目指すということを意図している。視聴者の満足度を上げるようなサービスを強化していきたい。「合理的なコスト」は言わずもがなという指摘については検討したい。「視聴者リレーション」ということばが、具体的にどのようなサービスを指しているのか分かるような表現を検討する。「３．地元密着と地域連携を強化」について、さまざまな地域に共通する課題の解決に向けて、ＮＨＫの全国ネットワークを生かして全国規模で取り組んでいくということが本意だ。アーカイブス提供に対して対価を求めるかは、「国内放送番組編集の基本計画」だけで取り扱うテーマではないが、有償・無償の線引きはしっかりと考えていきたい。

○　「１．デジタル時代に新たな公共性を確立」に記載されている項目は、それぞれ非常によい公共的価値を示していると思う。その中に「意見の分断の可視化や判断材料の提供、多様な価値観に対する相互理解の促進など」とあるが、判断材料の提供が単なる両論併記になってはいけない。ＮＨＫの提供する情報がどのような価値に基づくものなのかが分かる表現にするのがよいのではないか。

○　大規模災害への備えについて記載しているが、命を守るという意味合いでは医療も重要なキーワードだと思う。「娯楽」ということばが各論にはあるが、基本方針では触れられていない。ＮＨＫが娯楽番組を放送していることに対する批判を恐れず、ＮＨＫならではの娯楽を追求してほしい。

○　ＮＨＫの強みはどこにあるのか考え、ＮＨＫでしか味わえないコンテンツの制作に思い切り向かっていったらよいと思う。リアルタイムでの視聴率に一喜一憂するのではなく、たとえ視聴率が低くても時代を超えて評価されるような骨太なドキュメンタリーなどにしっかりと取り組んでほしい。

○　子どもの不登校が激増していることを踏まえ、子どもの学びを支えるオンライン上のコミュニティを作るとよいのではないか。そうしたコミュニティを作ることで、公共メディアＮＨＫを理解する応援団を増やすことも期待できる。

○　「３．地元密着と地域連携を強化」について、地域社会との連携により一層努めてほしい。例えば地域放送局のアナウンサー、キャスターに加え、地元の学校の児童、生徒が登場して、地元の魅力をリポートすることに取り組んでほしい。地元の子どもたちの視点で地元のよさをリポートすることに意義がある。子どもたちが地元のよさを再確認できる時間になり、ふるさとを愛することにもつながると思う。

＜放送番組一般について＞

○　１０月３０日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀　「第３回　岐路に立つ“民主主義”～権威主義拡大はなぜ～」を見た。戦後、日本人は民主主義を世界共通の理想だと信じてきたが、必ずしもそうではないのではないかと考えさせられるショッキングな内容だった。民主主義の達成のためには、人材、教育、正確な報道など、さまざまなコストがかかり、欧米や日本で民主主義が実現してきた一方で、そのコストを負担できず民主主義が実現できていない国があることを伝えていた。番組で紹介していたハンガリーやポーランドのように民主主義の価値観と距離を置こうとする動きを

どう考えるのか、ロシアや中国などの権威主義の国について今後どう働きかけるべきなのか、世界全体が民主主義になるためのコストを人類はまかないきれないのではないかなど、課題ばかりで暗たんたる気持ちになり、明るい未来も示してほしいと感じた。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫスペシャル　混迷の世紀」はロシアによるウクライナ侵攻により、あらわになったさまざまな課題を重層的に描くことがねらいだ。世界の識者に未来の展望を聞き、乗り越えるすべを探ることを目指しているが、そのメッセージがより伝わるよう今後の教訓としたい。

○　１１月６日(日)のＮＨＫスペシャル　超・進化論　第１集「植物からのメッセージ～地球を彩る驚異の世界～」と、１１月１３日(日)の第２集「愛（いと）しき昆虫たち　～最強の適応力～」を見た。植物同士がコミュニケーションをとっており、動物や虫に食べられた時、周囲に危険を知らせて、防御反応を起こさせているとか、森の木々が地下の菌を通して栄養を融通し合っているとか、発見と驚きに満ちた刺激的な番組だった。教授役の西田敏行さんの「人間は自分が見ている世界だけがすべてだという気になりがちだが、地球の仕組みをこれっぽっちもわかっていない。もっと謙虚にならなければいけない」「生きるイコール競争ではない。競争より助け合った方が命をつなぐことができる」といったことばに共感した。番組のホームページも見たが、ディレクターの書いた番組の裏話が大変おもしろく、企画のねらい、訴えたかったことが鮮明に理解できた。ＣＴスキャンでとらえたチョウのさなぎの羽化や、超高速カメラで撮影したハチの飛行メカニズムなど、番組の中の映像ならではの表現と、それを補うホームページの文章とが、見事に相乗効果を発揮していた。

（ＮＨＫ側）

取材後記という形をとって、ホームページで番組の裏話のようなものを伝えることが、番組のファンを増やすことにつながればと思っている。また、番組のねらいを簡潔に発信することも大事なことなので、引き続きインターネットの活用にも取り組んでいきたい。

○　１１月３日(木)の「東京国立博物館１５０年“推し”の国宝　大公開」(総合 前10:55～11:54)を見た。“推し”ということばを使って、感覚的に芸術を楽しむことは初心者に間口を広げる意味で有効だと思うが、対象を適切に批評する、理解するといった

学問的なアプローチも忘れないようにしてほしい。この番組は、特別展「国宝　東京国立博物館のすべて」の関連番組の一つだが、展覧会は予約制のため、番組を見て興味を持っても展覧会のチケットがとれないという声もある。関連番組の展開には、展覧会のキャパシティとのバランスも考慮してもらいたい。

○　１１月８日(火)のクローズアップ現代「“送料無料”の陰で…　トラックドライバーの悲鳴」を見た。日本の物流を支えるトラックドライバーの現場の実態をよく伝えていた。運行記録を途中で止めるよう会社が指示するといった違法行為の実態と、国の基準を超えた残業が認められるトラック業界独自の基準が容認されていることを取り上げていたが、それぞれ掘り下げて議論してほしかった。２７分の放送時間の中で伝えるには大きすぎるテーマではないかと思う。今後もこのようなテーマを取り上げてもらいたい。日本人の、サービスは無料だという意識を変え、賃金を上げる必要があるという観点からも、意義のある番組だったと思う。番組では、国が定める過労死ラインを「１か月 100 時間の残業」と紹介していたが、正確には「１か月 100 時間の残業もしくは２か月間ないし６か月間にわたって平均８０時間の残業」なので、８０時間のラインを念頭において議論してほしかった。

（ＮＨＫ側）

この番組は、岐阜局でこの問題に着目し、地域放送番組で伝えたあと、全国的な課題として「クローズアップ現代」に展開した。２７分では伝えきれない問題という指摘があったが、まずは“送料無料“という仕組みの裏に問題点があることを視聴者に感じてもらいたいという意図で制作した。ほかの番組も含め今後このテーマをどう取り上げていくか考えていきたい。

○　１１月９日(水)の連続テレビ小説「舞いあがれ！」の午後０時４５分からの再放送を見た。主人公が仲間の思いを背負って人力飛行機で飛び立つ、この週のクライマックスと言うべき感動的な場面だったが、逆Ｌ字画面でアメリカ中間選挙の速報を伝えていて、集中できなかった。アメリカ中間選挙は、日本でも大きく注目されているとはいえ、災害情報や日本の国政選挙と同じように、数分ごとに速報を伝える必要があるのか疑問を感じた。

（ＮＨＫ側）

アメリカ中間選挙については、その結果がアメリカのみならず、日本をはじめ世界に大きな影響を与えることを踏まえて伝えた。指摘と同様の意見は、視聴者からも多くあった。番組の

内容との兼ね合いなども考え、伝え方を検討していきたい。

○　１１月９日(水)の四大化計画～世界は３つで語れない～　新教養バラエティー！「ダイヤモンド」を深掘り！(総合 後 10:00～10:45)を見た。世界三大ダイヤモンドに加える「４つ目」のダイヤモンドをファッションモデルのアンミカさんとお笑い芸人のとにかく明るい安村さんがそれぞれに提案し、ゲストがジャッジするという内容だった。昔からさまざまな場面で「御三家」「四天王」などの名前をつけて売り出す手法があるが、それをバラエティー番組に発展させた企画は非常に興味深かった。世界三大ダイヤモンド自体も、番組で選定したもので、正式な根拠のあるものではないが、それぞれのダイヤモンドのエピソードをうまく紹介していて、見ているうちに確かに三大ダイヤモンドの価値があると思えた。４つ目の提案について、アンミカさんが有名なダイヤモンド会社の100周年記念ダイヤモンドを見事にプレゼンしていたのに対し、とにかく明るい安村さんの人工ダイヤモンドのプレゼンは単調で勝負にならず、盛り上がりをやや欠いたように感じた。気楽に楽しめるバラエティー番組であるが、知的好奇心をくすぐる内容だっただけに、対決ももっと白熱したほうが、より盛り上がったのではないか。過去に何度か放送したことがあったからか、架空の秘密結社「ＵＭＲ」の名前の意味や、司会の内村光良さんがミドルネームに「ザッハトルテ」を入れて名乗っていることに説明がなく、初めて見た視聴者からすると、やや疎外感を感じた。

（ＮＨＫ側）

「四大化計画～世界は３つで語れない～」は、アーカイブス映像を活用したバラエティーだ。「ＵＭＲ」は、司会の内村さんのローマ字表記「Uchimura」をもとに名付けた。「四大化計画～世界は３つで語れない～」は今回で４回目の放送となる。視聴者に楽しんでもらえる番組にブラッシュアップしていきたい。

○　１１月１４日(月)のクローズアップ現代「親のお金をどう守る　認知症６００万人の資産管理」を見た。認知症になると銀行口座が凍結され、家族であっても引き出すことができなくなるおそれに対して、弁護士や司法書士などが本人の代わりに財産管理などをする成年後見制度の仕組みとその課題を取り上げていた。成年後見制度を使った家族の実例を紹介していて、制度の内容と課題の理解が深まった。一方で国連から、本人の意思を別の人が代行する仕組みの廃止を念頭に、本人の意思決定を支援する仕組みを確立するよう勧告があったことを紹介していたが、この勧告自体にどの程度の影響力があり、実際に制度が変わる可能性があるのかについても説明してほし

かった。また、要介護者の意思決定を、専門職に加えて地域の人々も入ったチームでサポートするオーストラリアの事例が紹介されていたが、財産の管理については触れられていなかったので、その点についてもっと知りたいと思った。病院への同行など、従来の役割とは異なる成年後見人のさまざまな活動を紹介していたが、かえって「認知症患者の資産管理」という当初のテーマがややぼやけてしまった印象を受けた。資産管理の問題にテーマをしぼり、深く掘り下げてほしかった。

（ＮＨＫ側）

「クローズアップ現代」の中でも、お金にまつわるテーマはよく見られており、視聴者の関心の高さを感じている。どうしても総花的に取り上げがちだが、テーマを資産管理に絞ったほうがよかったという指摘は現場に共有したい。番組の時間が限られている中で、複数回に分けて取り上げるなど、さまざまな形を検討したい。

○　１１月１４日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト　選「ベルリンの壁崩壊　宰相メルケルの誕生」を「ＮＨＫプラス」の見逃し配信で見た。冒頭に「この番組は１１月３０日の深夜２４時２０分から改めて配信します」というテロップが表示されたが、何を意図するものか分からなかった。そのまま続けて見ていると、番組の途中で地震が発生し、番組を中断して地震のニュースを伝えていたことが分かった。リアルタイムの放送がニュースで中断することはしかたがないが、「ＮＨＫプラス」の見逃し配信でも、途中で中断した番組をそのまま配信する必要があるのか疑問に思った。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫプラス」は放送したものをそのまま配信するサービスなので、見逃し配信でもニュースで中断した状態で配信している。そのため配信の冒頭では「午後１０時２８分すぎから地震のニュースになります」というテロップを表示して中断を知らせるようにしたが、より分かりやすく伝わるよう運用の中で改善していきたい。

○　「映像の世紀バタフライエフェクト」を見ている。映像アーカイブを単に並べて見せるのでなく、一つのストーリーで結びつけ、現代と過去とのつながりを見いだすドキュメンタリーだと思う。多くのアーカイブス映像を所有し、必要な映像を探し出して見定めるノウハウを持つＮＨＫならではの番組だ。ふだん詳しく学ぶ機会のあまりない近現代の歴史を、リアルな映像で描いていて、若い世代の関心も呼ぶと思う。

○　大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」を家族で見ている。家族全員で、世代を超え、この先の展開にハラハラドキドキしながら楽しんでいる。三浦義村など存在感のあるキャラクターは子どもの心にも響いているようだ。

○　１１月１０日(木)のねこのめ美じゅつかん　１３歩め「国宝の茶碗は“感動アニメ”と心得よ！」(Ｅテレ 後2:50～3:00)と、１１月１７日(木)の１４歩め「猫も大好き！岡本太郎のアートは誰のもの？」(Ｅテレ 後 2:50～3:00)を見た。予備知識を必要としない説明や親しみやすいエピソードは、子どもたちにとっても分かりやすく、よいと感じる。ミニコーナーの「巻き寿司アート」のおもしろさはＳＮＳ向きだと思うので、「びじゅチューン！」のようにこのコーナーの動画をＳＮＳで公開すると、番組の認知の向上にもつながるのではないかと感じた。一方で、作品紹介までの導入や、番組末尾の「画家のうた」がやや冗長に感じるので、これらの部分を簡潔にし、本編の作品紹介を分厚くしたほうが、１０分という短い番組の中でより満足感が高まるのでないかと思う。

○　１１月１４日(月)のツクランカー「おと（1）」を見た。主に小学生を対象とした、ものづくりを通じて問題解決能力を育む「ＳＴＥＡＭ教育」の考え方を取り入れた番組だが、非常に丁寧に作られていた。「NHK for School」のホームページでは、番組の動画に加え、ワークシート、プロセスマップなどの教材がダウンロードでき、テレビとインターネットの連動という意味でも非常によい取り組みだと思った。この教材について、学校での利用に加えて、家庭での使い方のガイドも掲載されているが、実際に家庭でどれほど使われているか知りたいと思った。また、家庭で教材を利用する場合、親が面倒を見ることになると思うが、親のサポートが得られない家庭の子どもでも利用できるように、支援するＮＰＯなどと連動できるとよいと思う。「２０２３年度国内放送番組編集の基本計画（案)」の重点項目の具体的施策に挙げられていた「あらゆる世代の学びを支援する」を具現化するＮＨＫならではの取り組みだと感じた。

○　１１月１５日(火)のハートネットＴＶ「私は何者～ＡＩＤで生まれた子どもたち～」を見た。これまでＡＩＤ(配偶者以外の精子による人工授精)を利用した親の、どうしても子どもが欲しいという気持ちに共感していたが、生まれた子どもにとって、精子提供者が匿名であるため自分の出自が分からず、知らないうちに血のつながっている人と恋をしてしまったらという不安や、自分が何者なのか知りたいという思いがあることが分かり、理解を深めることができた。番組では自分の出自を知りたいという子どもの声を紹介していたが、親がどのような判断でＡＩＤを利用し

たのかということも伝えるとよかったのではないか。番組を見たあと、このテーマに対する自分の考えがまとまらなかった。必ずしも結論を出す必要はないのかもしれないが、番組として何らかの方向を指し示してくれたらよかったと思った。１１月１６日(水)の「日常が溶ける　検証　コロナ禍の虐待事件」も見た。ドラマ仕立てで虐待の様子が生々しく描かれていて、つらくなって途中で見ることができなくなってしまった。見られなくなってしまうと伝えるべきテーマも届かなくなるので、番組の見せ方を考えて欲しい。

（ＮＨＫ側）

「私は何者～ＡＩＤで生まれた子どもたち～」は、ＡＩＤで生まれた子どもたちが大人になり、自分たちの出自のこと、自分たちのありようについてようやく声を上げられるようになったことが制作の出発点だった。親の声も伝えてほしいという指摘は、現場に伝え、これからの番組づくりに生かしたい。「日常が溶ける　検証　コロナ禍の虐待事件」について、つらすぎて見ていられなかったという指摘を踏まえ、虐待の問題をどう伝えていくか、演出手法も含めて検討したい。

○　「アイラブみー」を「ＮＨＫプラス」で見た。「ＮＨＫプラス」のプレイリストの中で、「＃“性”について考える」というリストに興味を持ち、性の多様化について学べるという期待からこの番組を視聴した。声の出演の満島ひかりさんが、老若男女の登場キャラクターを１人ですべて演じ分けているのには、性別や年齢の違いを意識させないというねらいがあるのではと思い、非常に興味深かった。特性のある子どもを持つ家庭で子どもと一緒に見ることも非常によいと感じた。放送だと午前８時３５分からの本放送を見るのは難しいが、少し早い午前７時２０分からの再放送だと見ることができる。朝の慌ただしい時間には非常にありがたい編成だと感じた。

○　「NHK for School」の「ものすごい図鑑」について、子どもが学校を休んだときの家庭での学習に役立った。家庭で退屈せずに学ぶことができる有益なコンテンツだ。新型コロナウイルス感染の第８波が来ているとも言われているので、多くの親子に知ってもらいたいと思う。

（ＮＨＫ側）

「ものすごい図鑑」は動物編、植物編に加えて文化財編も制作した。「NHK for School」は学校でだけでなく、家庭でも広く使ってもらうのが課題だ。いただいた意見を参考にして検討し

ていきたい。

○　１１月１３日(日)のＪリーグ２０２２　Ｊ１参入プレーオフ決定戦「京都サンガ」対「ロアッソ熊本」(ＢＳ１　後 1:00～3:10)について、「女性サポーターばかりが映し出されていて、ルッキズムではないかということが気になり、中継に集中できなかった」という話を聞いた。制作方針でアスリートファースト、ダイバーシティを意識することを明確にして見ている人たちが安心して楽しめるスポーツ中継を心がけてもらいたい。

（ＮＨＫ側）

３月の選抜高校野球の中継で特定の女子生徒を何回も映しているという視聴者からの指摘があったことを踏まえ、客席の撮り方やサイズ、頻度や回数などに注意を払ってきた。今回の試合の中継で、女性サポーターを映した回数は実際には多くないが、そのように見える印象を与えてしまったと受け止めている。改めて客席の撮り方には注意を払っていきたい。

○　１０月２８日(金)の「生中継　神さまのお引っ越し　奈良・春日大社」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 7:00～9:00)を見た。砂利道を踏みしめる音もよく聞こえ、現地にいるかのような臨場感があった。地域に根ざした伝統文化を映像で記録したＮＨＫならではの番組だった。

○　１０月２８日(金)の「生中継　神さまのお引っ越し　奈良・春日大社」を見て、2021 年３月放送の「生中継　闇と炎の秘儀　お水取り　～奈良・東大寺修二会～」を思い出した。東大寺修二会（しゅにえ）で、女性が入ることができない内陣の様子を鮮明に映していた。修二会に関する研究の第一人者として知られる女性でも直接見ることのできない映像で、その学術的な価値は高い。番組で使われなかった部分も含め、映像素材を公開することが、社会への還元につながるのではないか。

○　「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」に非常に期待している。ＳＮＳでの盛り上がりはかつてないほどだと感じている。出演者については賛否があると思うが、初めて「ＮＨＫ紅白歌合戦」を見た若者が翌年も見たいと思わせる工夫が必要だと思う。ＳＮＳで出演者からのメッセージ動画を発信するなどの工夫はよいことだと思う。さらに、今後は出演アーティストの中にもファンが多い動画配信者などのインフルエンサーが、「ＮＨＫ紅白歌合戦」を楽しむポイントなどをＳＮＳで発信するようになると、ブームが広がっていくと思う。

（ＮＨＫ側）

「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」のテーマは「ＬＯＶＥ　＆　ＰＥＡＣＥ　～みんなでシェア！～」だ。多くの人がＳＮＳで話題を共有し、楽しんでもらうことを目指している。いただいた意見も参考に、より楽しんでもらえる番組にしたい。

○　ＳＮＳのプラットフォームの信頼性が揺らぐ場合に、ＮＨＫのアカウントはどう対応するか考えを聞きたい。

（ＮＨＫ側）

偽アカウント対策など、ＳＮＳ側の窓口担当者と連絡を取り合い状況の把握に努めている。外部プラットフォームを利用したデジタル空間での展開にはこのようなリスクもあるので、丁寧に対応していきたい。

○　１１月７日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「世界を変えた“愚か者”フラーとジョブズ」を見た。「映像の世紀バタフライエフェクト」が扱うテーマに毎週注目している。豊富な映像と情報量で再構成する公共放送ならではの濃厚なドキュメンタリーで、俳優の山田孝之さんの重すぎず、軽くもならず、視聴者目線のナレーションも魅力的と感じる。スティーブ・ジョブズ氏がスタンフォード大学で行ったスピーチは、企業経営者の間や、研修などで繰り返し視聴されているが、このスピーチの中でジョブズ氏が発した「ハングリーであれ！愚かであれ！」ということばが、ジオデシック・ドームの発明で有名なバックミンスター・フラー氏のことばの引用だったことを初めて知った。「最小のもので最大の効果をなす」という「宇宙船地球号」のフラー氏のことば、思想がジョブズ氏に受け継がれ、数々の取り組みにつながっているという流れには説得力があった。２人の天才に共通するのは常に地球、社会を見つめ、人々の幸福を徹底追及している点であり、大いに勉強になった。番組の末尾で大谷翔平選手がジョブズ氏のことばに勇気をもらっているというエピソードを紹介したのは、感動したと言う人もいるかもしれないが、番組の世界にのめり込んで見ている視聴者にとっては多少違和感があったのではないか。

近代史を貴重な映像で探るコンセプトをぶれずに続けることが、この番組を一層存在感のあるものに高めていくのではないかと思う。

○　「第７３回ＮＨＫ紅白歌合戦」の出演歌手発表に関するニュースを見た。出演歌手の選考について、どのように決定しているのか。また、選考委員会はどのような構成

になっているのか。この選考にかかわるデータ類や選考委員会のメンバー構成などは公表されているのか。毎年出場歌手の方々が発表されるたびに、選考方法について知りたいと思っていた。選考については、毎年ニュースになるほど議論を呼んでいることはＮＨＫも認識していると思う。国民的番組なので、分かりやすく、より公平に、より開かれた選考が必要ではないか。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫ紅白歌合戦」の選考についての考え方は、番組のホームページに掲載している。「１．今年の活躍」「２．世論の支持」「３．番組の企画・演出」という三つの点を中心にデータを参考に検討し、総合的に判断している。「今年の活躍」についてはさまざまなデータをもとにし、「世論の支持」については電話、およびウェブアンケートを行った。選考にかかわるデータ類、選考委員会のメンバー、構成については公表していない。視聴者の納得のいくアーティストが出演して、視聴者に楽しんでもらえるよう努力していく。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２２年１０月ＮＨＫ中央放送番組審議会

１０月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１７日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１２人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、総合テレビ午後１１台の編成について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋代表取締役社長執行役員）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	磯崎　功典	（キリンホールディングス株式会社代表取締役社長）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	﨑村　夏彦	（ＯｐｅｎＩＤ　Ｆｏｕｎｄａｔｉｏｎ理事長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本水泳連盟理事／シドニー五輪競泳日本代表）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）

（主な発言）

＜総合テレビ午後１１時台の編成について＞

○　１０月３日(月)のヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち「ＺＡＲＤ・坂井泉水×河村花」を見た。一つのことを成し遂げた女性の人生を知ることができ、勇気をもらった。かねてから女性の活躍を取り上げた番組が見たかったのでこの番組を喜ばしく思う一方、残念に感じる部分もあった。歌手のＺＡＲＤ・坂井泉水さんの人生を若い俳優がたどっているのが、坂井さんの人生を演じる役作りのためのような印象を受け、違和感を覚えた。坂井さんと同じ若い歌手が人生をたどるほうがよいのではないか。今後も続くと思うが、取り上げる人物と同じ業種の人がたどるほうが、視聴者が彼女たちの仕事を知り、応援するきっかけになるのではないか。坂

井さんの当時のマネジャーやレコード会社の人の貴重な証言が多くあったのに、終始演じる俳優に焦点が当たっていて、印象が薄まってしまった感じがして残念だった。番組のテーマには期待しているので、ドラマ仕立てだけでなく、ほかの見せ方も検討してほしい。

１０月４日(火)の１００カメ「赤ちゃん誕生」を見た。４～６月の放送と比べると、登場人物の心情に迫る場面が増え、感情移入がしやすくなっているのがよい。子どもの頃にこの番組を見ていたら助産師を志したのではないかと思うほど心を動かされ、感動のあまり繰り返し視聴した。今までの「１００カメ」の、ふだん見ることのできない舞台裏を見せるというコンセプトもおもしろいが、今回の産科病院のように、多くの人が経験していても、自分以外の経験を見る機会がない事の現場ももっと見てみたいと思った。

１０月５日(水)のゲームゲノム「孤独と生命～ワンダと巨像／人喰いの大鷲トリコ～」を見た。去年１０月に「本田翼×星野源×小島秀夫出演！名作ゲームの魅力に迫る教養番組」を見た際には、ゲームの紹介にとどまっていて、もっとそのゲームが作られた背景や、別の作品との関連性を掘り下げてほしいと思ったが、今回はその点が非常に改善されていた。ゲームクリエーターがゲームを通して伝えたい思いを、クリエーターの幼少期の体験なども交えて知ることができた。「自分で操作して意思決定をする」というドラマや映画にはないゲームならではの特性によって伝わるクリエーターの思いがあることに感動した。このことから“ゲームの遺伝子”という意味の番組タイトルに込めた思いも感じることができた。また、ホームページの「ゲームゲノムｎｏｔｅ」にも熱量を感じた。ショート動画は、まだ番組内容の紹介や、司会の本田翼さんの意気込みといった内容にとどまっているので、ショート動画でしか見ることができないコンテンツを配信すれば、より見てもらえるのではないか。

○　午後１１時台の編成は全体的によい試みを続けていると思う。４～６月、７～９月の番組はいずれもとてもよい内容だった。

「ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち」は、どのような視聴者に対してどのようなメッセージを伝えるのかがあいまいで、やや散漫な印象を受けた。「ＺＡＲＤ・坂井泉水×河村花」で取り上げた坂井泉水さんは中高年世代になじみが深い人なので、若い世代に関心を持ってもらうために若い俳優を起用したと思うが、掘り下げが浅くなってしまったと思う。

「１００カメ」はもともとＮＨＫが得意な分野だと思う。以前よりブラッシュアップされ、よい出来になっている。

「ゲームゲノム」のテーマは、今やゲームは単純な遊びの域を超え、文化論、文明論につながる内容を含むものになっていると考えると、ＮＨＫが正面から取り上

げる意義はある。若い世代に見てもらうために本田翼さんを起用したと思うが、司会の役割にとどまっていることにもの足りなさを感じた。ゲストとして登場した俳優の山田孝之さん、芸人の野田クリスタルさんは、ゲームの文化的な側面も十分語れる人たちだと思う。彼らとゲームクリエーターが、ゲームの文化的側面について徹底的に議論したほうが、多くの人に見られ、若い人たちにも受け入れられる番組になるのではないか。

○　ゲームゲノム「孤独と生命～ワンダと巨像／人喰いの大鷲トリコ～」を見た。午後１１時台は１日の仕事を終えて疲れている視聴者も多いと思うので、ゆったり見る番組としてちょうどよいと思った。自分はゲームに詳しくないが、ゲームの世界の奥深さを感じた。もう少し技術的な側面も掘り下げると、若い世代だけでなく、もう少し上の世代の興味も引くのではないか。

（ＮＨＫ側）

「ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち」は、１人の女性の人生を紹介すると同時に、若い俳優がその女性の人生を学び、その人生の一場面を懸命に演じることで、若者が成長する姿も見せることもねらっている。俳優たちの一生懸命な姿と、取り上げた女性の人生を深く掘り下げることのバランスをどうとるかが課題だと感じている。主人公の人生をより深く掘り下げられるよう、いただいた意見を現場とも共有したい。

（ＮＨＫ側）

「１００カメ」と「ゲームゲノム」は、新しいＮＨＫらしさを体現するコンテンツとして開発してきた。

「１００カメ」は撮影の前に取材先にアンケートをとって、カメラを取り付ける場所の参考にしている。「赤ちゃん誕生」の回は、放送で使ったシーン以外にも感動的な場面がたくさん撮れていて、もう１本番組にできないか検討している。

「ゲームゲノム」について、ゲーム自体の説明をどれくらいするべきか、テーマの数はどの程度が適切か、本田翼さんの役割はどうあるべきかなど、試行錯誤を続けている。幅広い世代の人々に受け入れられる番組になるよう探っていきたい。

○　１００カメ「赤ちゃん誕生」は抜群な内容だった。妊婦が夫へ怒りを表す場面には共感し、出産の現場では夫は頼りにならないのはどこも同じだと実感した。また新人助産師の奮闘する姿からは、生命の現場での教育の大変さが伝わってきた。全体的にリズムがよく、若い世代も楽しめるテンポだったと思う。

ゲームゲノム「孤独と生命～ワンダと巨像／人喰いの大鷲トリコ～」を見た。日本は世界の中でも突出してゲーム動画がインターネット上で見られている。また、クリエイティブですばらしいゲーム作品も多いと思う。この番組で命や孤独というテーマについて深く考え抜かれていることや、爽快感ばかりを追い求めることがよいのかというクリエーターの問題意識など、作品の背景を知ることができた。紹介しているゲームは３０～４０代が好むものだが、より若い世代に届けるために、自らゲーム好きを公言する本田翼さんを起用したのはよいと思う。ゲームをテーマとする動画配信者も多くいるので、彼らを起用することで若い世代への接点を増やすこともできると思う。心を動かすような内容のショート動画は番組の視聴や「ＮＨＫプラス」への誘導につながると思うので、ブラッシュアップしてほしい。

○　「１００カメ」は以前のシリーズから見ていて、好きな番組の一つだ。「赤ちゃん誕生」も、登場人物それぞれのストーリーがよく描かれ、興味深く見た。ＭＣのオードリーの２人の経験談を交えたトークも嫌みのないものだった。ＳＮＳを使った番組告知は、放送への期待を高めてくれた。先輩助産師が後輩にかけたことばなど、教育現場でも活用できそうなことばが多く出てきていて、名言集のようにまとめて、ＳＮＳで発信してもよいのではないかと思った。「１００カメ」で取り上げている内容は、４０代の自分たちのような世代には興味深いが、もっと若い世代も関心があるのかよく分からない。若い世代に届けるのに、小中学生向けのキャリア教育など、教育現場で番組を活用してもらうことも役立つのではないか。

○　ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち「ＺＡＲＤ・坂井泉水×河村花」を見た。若くして亡くなられた坂井泉水さんの人生を若い俳優がたどり、番組の最後にその人生の一場面を短編ドラマで演じるという仕立てが新鮮で、俳優が本人に見えるほどの熱演に引き込まれた。

９月まで月曜日の午後１１時台に放送していた「朝ごはんＬａｂ.」が終了したことは残念だ。若い世代の４人に１人は十分に朝食を食べていないというデータもあるので、若い世代が朝ごはんを食べたくなるような番組を改めて放送してほしい。

（ＮＨＫ側）

「ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち」は、指摘の

ように俳優が主人公の女性の人生をたどっていくことで、本人のように見えるようになっていくことを見せることをねらっている。

（ＮＨＫ側）

「１００カメ」は短く編集した動画を「ＮＨＫラーニング」に掲載していて、比較的人気のあるコンテンツになっている。教育現場にも興味を持っていただけるような周知広報のあり方を探っていきたい。

○　ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち「ＺＡＲＤ・坂井泉水×河村花」を見た。坂井泉水さんの死の原因を探る番組だと思って見始めたところ、この番組で初めて知った若い俳優が坂井泉水さんを演じるという内容で戸惑ったが、次第に俳優が坂井さんに似て見えてきた。よくまとまっている番組だと思った。ただ、２０代の家族は、取り上げたＺＡＲＤは今の若い世代の興味を引かないし、番組のタイトルからも内容が想像できないので、現役で活躍している人を取り上げ、もっと分かりやすいタイトルにした方がよいのではという意見だった。

○　１００カメ「赤ちゃん誕生」を見た。放送前にＳＮＳの予告動画を見て、番組への期待が高まった。笑いあり、涙ありの非常に楽しい番組だった。出産の大変さと喜びが分かったが、出産の苦しそうな場面の印象が残り、みなこのような苦しいことばかりなのか気になった。最近は無痛分べんなどの出産方法も増えているので、ほかの出産方法の現場も見ることが出来たらよかった。

○　午後１１時台はインターネットを見ている人が多い時間帯なので、リアルタイムでの番組視聴が限られたとしても、ＳＮＳ上の番組の感想から興味を持って「ＮＨＫプラス」での見逃し視聴につなげることも出来ると思う。インターネットを見る人が多いこの時間帯には、重厚なドキュメンタリーよりも、喜怒哀楽のはっきりした番組のほうが若い世代にも見てもらえると思う。今の若い世代はタイムパフォーマンスの意識が非常に強く、満足できたかＳＮＳでシェアしあっている。また、この世代は作為的な演出を嫌うので、ありのままの姿を描くことに留意したほうがよい。

「１００カメ」について、100 台のカメラで撮影した膨大な映像を編集して２９分の番組にまとめるのは、かなり労力がかかる過酷な作業ではないかと心配している。スタッフの業務負担軽減も考えたほうがよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

「１００カメ」には実は働き方改革の中で生まれた番組という側面もある。今までのドキュメンタリー番組は、ディレクターとカメラマンと音声マンが現場に出向き、撮りたい場面を全て撮り切るまで撮影を続けるため、撮影に多くの時間と労力がかかっていた。一方、「１００カメ」はカメラを設置して、しばらくたってから回収するだけなので、撮影にかかる労力は大幅に少なくなった。編集作業が大変だと思われるかもしれないが、同じ場所に複数のカメラを設置しているときには、そのうちの１つのカメラの映像を集中して見るなど、絞り込む工夫をしている。撮影現場では相手の都合に合わせなければならないが、編集作業は自分のペースでできる面もある。「１００カメ」のスタッフで長時間労働に関する問題は起きていない。

（ＮＨＫ側）

「ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち」で取り上げる人について、若い世代に合わせるとあまり知られていない人になってしまい、ある程度知られている人にすると若い世代にとっては古いと思われてしまうことが大きな課題だ。幅広い世代に知られていなくても若い人の興味を引く人選に時には挑戦してみることも含め、検討していきたい。

○　ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち「ＺＡＲＤ・坂井泉水×河村花」を見た。自分の青春時代、ＺＡＲＤの楽曲は非常に身近な存在で、坂井泉水さんが亡くなった時には大きなショックを受けた。自分の記憶の中に確固としたイメージがある人物をほかの人が演じることには違和感があって、ドラマ仕立ての演出の番組には抵抗感がある。坂井さんを演じた俳優の河村花さんに対しても最初は不安を感じたが、河村さんが坂井さんと真剣に向き合い、その人生に魅了され好きになっていく過程を見ていくうちに抵抗感がなくなり、最後まで見ることができた。番組を通して坂井さんの知られざる一面が分かり、自分が思っていた以上に坂井さんが前向きで強い人だったということを知ることができ、その生き方に励まされる思いがした。欲を言えば坂井さん本人が歌っている映像や歌詞のテロップをもっと多く出してほしかった。

○　三つの番組の共通点として、視聴者の感動を呼び起こすことにかなり注力してい

ると感じた。一方で、デジタルに慣れ親しんだ世代にアピールするためには、客観的な掘り下げやアーカイブとしての資料性を強化することが大切だと思う。動画共有サイトでも掘り下げたコンテンツへの需要がある。若い世代は倍速視聴に慣れているので、もう少しテンポを速くしたほうがよいと思う。特に「ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち」はテンポが遅いと感じた。

ゲームゲノム「孤独と生命～ワンダと巨像／人喰いの大鷲トリコ～」は、今の若い世代にとっては取り上げたゲームが少し古いと思うが、ゲームの背景にある哲学的な側面が取り上げられていて興味深く見た。ゲーム文化を知る資料としても価値があると思う。

１００カメ「赤ちゃん誕生」は、自然分べんのみ取り上げていたことに違和感を覚えた。無痛分べんをはじめ、帝王切開や早産など出産にはさまざまな形がある。もう少し網羅的に取り上げると客観的になって、さらによかった。

ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち「ＺＡＲＤ・坂井泉水×河村花」は、若い世代がＺＡＲＤを知っているのか疑問に感じた。歴史上の人物として捉えて扱うのならば、資料としての価値を高める必要もあるので、ドラマ仕立ての演出は必要ないと感じた。

○　ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち「ＺＡＲＤ・坂井泉水×河村花」を見た。古い世代によく知られている人について、若い俳優を変換装置のように使い、俳優の目を通して若い世代に伝えていく仕掛けが非常に興味深かった。河村花さんも最初は坂井泉水さんのことを全く知らなかったのが、取材を重ねるにつれ深く理解するようになっていた。河村さんの成長を通じて、視聴者も坂井さんへの理解が深まるという過程が非常におもしろいと思った。一方、途中にドラマが挟まることで、河村さんの成長に焦点を当てているのか、坂井さんの知られざる側面に焦点を当てているのかがはっきりせず、もったいないと感じた。

「ゲームゲノム」について、自分はゲームをほとんどしないが興味深く見た。ゲームクリエーターの世界観やポリシーなどがよく分かった。ただ、登場するゲームクリエーターやゲストの個性に番組の内容がよってしまう部分もあると感じた。ゲームは芸術学や美学などでも研究の対象になっているので、時にはゲームの研究者のような人をコメンテーターとして起用してもよいと思う。

○　ゲームゲノム「孤独と生命～ワンダと巨像／人喰いの大鷲トリコ～」を見た。ゲーム実況、ゲームさんぽなど、動画コンテンツとしても人気のあるゲームをテーマに、テレビで何ができるのかを追求した野心的な番組だった。セットを簡素にし、出演者も絞り、番組の構成も単純化し、内容に集中できる枠組みになっているところも

よい。惜しむらくは出演者のコメントが感想を言い合うことにとどまっている点だ。日本で批評が弱い、育たないということは長年言われてきているが、この番組についても分析的な視点が薄い。難易度の高い話を入れるということではなく、ごく単純な構造の分析、ほかのゲームとの比較などであれば中学生レベルでも十分についていける。ユーザー目線のゲスト、クリエーターに加え、その話を批評し、分析できるファシリテーターを配することで、テレビならではのクオリティの番組に質を上げることができるのではないか。例えば立命館大学にはゲーム研究センターがあるので、その研究者などがファシリテーターの候補になるのではないか。

○　３番組はすべてすばらしい番組だと思う。午後１１時台に限らず、もう少し早い時間帯でも広く受け入れられるのではないか。

１００カメ「赤ちゃん誕生」は医療現場で実際にありがちな話が多く紹介され、笑いながら視聴した。おろおろするばかりの夫と陣痛で余裕のない妻とのやりとりには、よく顔を出しての出演を承諾したことと感心した。夫として出産の現場を経験して間もないオードリーの２人のトークもよかった。一方、新人助産師・タカハシさんへの上司の指導は少し厳しすぎ、作為的に感じてしまった。また、元気に、無事に生まれたケースばかりが出てきたが、現実にはそうでないケースがあることも忘れてはならない。

ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち「ＺＡＲＤ・坂井泉水×河村花」は俳優の河村花さんが坂井泉水さんにそっくりで感動した。途中から坂井さん本人の映像と区別がつかないこともあった。ただ、番組の中のドラマはこの番組の中だけのものなのか、坂井泉水さんをモデルにした本格的なドラマの一部を取り上げたメーキング番組なのか分からずに混乱した。坂井さんの本格的なドラマを見てみたいと思った。

ゲームゲノム「孤独と生命～ワンダと巨像／人喰いの大鷲トリコ～」は、最近のゲームをしたことがない人間にはついていけない世界だが、映像の美しさ、広大な世界観に感銘を受けた。

（ＮＨＫ側）

「ヒロイン誕生！ドラマチックなオンナたち」について、インタビューや資料ばかりだと見づらくなる視聴者もいることを想定し、より分かりやすく、見やすくするためにドラマ仕立ての演出を取り入れた。一方で指摘のように、かえって分かりにくくなったり、視聴者が期待するものから外れたりしている側面もあるかもしれない。取材した内容をどう表現するのが最適か検討していきたい。

（ＮＨＫ側）

「１００カメ」は、設置したカメラの前で起きたことを撮影していて、現場には撮影中スタッフはいなく、一切の作為はない。さまざまな形の出産を取り上げていないという指摘があったが、「１００カメ」はカメラの前で起きた出来事だけを伝えているので、あらゆるケースを網羅して描くことはできないということは理解してほしい。

＜放送番組一般について＞

○　９月２５日(日)のＮＨＫスペシャル　“中流危機”を超えて「第２回賃金アップの処方せん」を見た。中間層の賃金をどう上昇させるのか、処方せんを示していて非常に参考になった。従業員が新たなスキルを学び直す“リスキリング”を紹介していたが、これからの企業の価値を高めるために非常に重要なものだと思う。番組ではドイツの“リスキリング”の取り組みを紹介していた。ドイツは政府、経営者団体、労組の３者が一体となり、将来を見据えて“リスキリング”を進め、従来の産業から成長産業に労働移動を進めていた。日本でも岸田首相が“リスキリング”を支援する方針を表明したが、日本社会に根ざした産業構造の転換を、官民一体となって明確にしていく必要があると感じている。引き続きこのテーマを追い続けて、鋭い切り口の番組を制作していってほしい。

（ＮＨＫ側）

“リスキリング”はまだ耳なじみがないが、これから重要になっていくことばだ。まだ日本の中での具体的な事例の取材が難しく、先行事例はどうしてもヨーロッパの取り組みが中心となっている。とても重要なテーマと捉えているので、今後も取材を続けたい。

○　９月１９日(月)の「ＮＨＫニュース７」を見た。ニュースの冒頭からイギリスのエリザベス女王の国葬を中継していた。台風１４号が日本に接近する中で、どのニュースを中心に扱うかは悩ましかったと思うが、エリザベス女王の国葬を扱う時間がやや長過ぎたのではないかと感じた。扱う分量は天皇、皇后両陛下が即位後初めてイギリスを訪問されていることが理由かと思ったが、両陛下がご臨席されてい

ることにしばらく触れていなかったので、そのことにも違和感を覚えた。

（ＮＨＫ側）

ニュースで放送する内容はそのつど判断している。エリザベス女王の国葬は世界中が注目するニュースで、視聴者の関心が高かったことも踏まえて伝えた。一方、台風１４号についても数日間にわたりテレビ、ラジオ、インターネットなどで丁寧な情報提供に努めた。１９日(月)の「ＮＨＫニュース７」は、午後７時からエリザベス女王の国葬が始まったこともあり、ニュースの冒頭から伝えた。時間の配分についての指摘は教訓として今後に生かしたい。エリザベス女王の国葬のニュースはＮＨＫ独自の映像ではなく、国際映像を使用した。両陛下のご臨席については、両陛下が映し出されたタイミングに合わせて紹介する予定だったが、なかなか国際映像に両陛下が映らず、機会がなかった。映像に映らなくても両陛下がご臨席されているということを紹介する工夫が必要だった。いただいた意見は現場とも共有したい。

○　９月１９日(月)のニュースなるほどゼミ「待ったなし！どうする少子高齢化」(総合 後1:10～2:10）を見た。医療、介護、子育てについての課題を示し、安心して生活していくために何が必要か議論する番組だった。解説委員が課題について分かりやすく解説し、非常に勉強になったうえ、課題の指摘だけでなく、新たな取り組みを紹介していて、希望を持つことができる内容だった。少子高齢化の時代に自分たちがどのように生き抜いていくのかの知恵も得られる番組だった。この番組は少子高齢化の課題を分かりやすく学ぶ教育コンテンツにもなり得ると思う。オープンソース化して、大学のゼミや学校の授業などでも使えるコンテンツにできるとよい。

（ＮＨＫ側）

「ニュースなるほどゼミ」は、解説委員がゲストの素朴な質問に答え、自然なやりとりでニュースを解説することで、分かりやすく伝えることができるのではないかということで始めた番組だ。

○　１０月４日(火)のクローズアップ現代「値上げラッシュの秋　暮らしをどう守る

か」を家族で見た。世の中に関心を持ち始めた若い世代の興味にも応える番組だと感じた。景気の変動について、生活の実感を踏まえて説明していて、ゲストのみずほ証券チーフエコノミストの小林俊介さんの解説は子どもにも分かるような非常に分かりやすい説明だった。イェール大学助教授の成田悠輔さんもゲストで出演していたが、経済学の話に終始していたことは残念だった。成田さんは経済学者の枠にとどまらず日本の将来の構想の話もできる人なので、日本が将来に向けどうすればよいのかという提言を聞きたかった。

（ＮＨＫ側）

クローズアップ現代「値上げラッシュの秋　暮らしをどう守るか」は、スタジオでできるだけ分かりやすく伝えることを心がけた。成田悠輔さんの知見を生かし切れていなかったことは、次回に向けての課題としたい。

○　１０月１０日(月)の３分ドキュメンタリー　名作を３分で！「手塚治虫、鯨獲（と）り、ペット探偵ほか」（総合 後 6:05～6:43）を見た。過去の教養・ドキュメンタリー番組を３分間のダイジェストで紹介し、その名場面に対しゲストが語り合う番組だった。非常に貴重な映像をＮＨＫが保有していることを実感した。ダイジェストの内容も３分とは思えないほど見ごたえがあって、見ていて引き込まれた。紹介した番組の全編を、画面に表示されたＱＲコードから「ＮＨＫプラス」で見ることができるという仕組みもよいアイデアだと思った。ゲストが取り上げた番組をやや大げさに持ち上げるのが気になったが、司会の俳優が落ち着いて進行していてバランスがとれていた。ただ、司会にはわざわざ俳優を起用せず、この役割はアナウンサーが担当してもよかったのではないか。

○　１０月１０日(月)の３分ドキュメンタリー　名作を３分で！「手塚治虫、鯨獲（と）り、ペット探偵　ほか」を見た。３分で見どころを見せて、「ＮＨＫプラス」に誘導しようという取り組みはやや直接的だと感じたが、興味深い取り組みだと思う。インターネットでは情報を手短に見る、断片的に拾うことが常だが、ＮＨＫがそれに合わせる必要はないと思う。テレビならではの優良なコンテンツや過去の膨大な資産がＮＨＫの強みだと思う。インターネットだけではなかなかできないところをＮＨＫが補完することで、日本のメディア環境がよくなるような構図が描けるとよいと思う。

○　１０月１０日(月)のエマージェンシーコール～緊急通報司令室～「東京」（総合 後９：３０～１０：００）を見た。東京消防庁のオペレーターが膨大な緊急通報に対

して対応している様子を伝えていた。息をつく暇もないほど多く届く緊急通報に対し、非常に冷静に対応し的確に指示する姿に感動した。また、オペレーターが同僚に対し感謝の気持ちを示していた場面もよかった。一方で、非常に緊張感の高い現場なので、オペレーターたちがメンタルヘルスをどう保っているのか気になった。メンタルヘルスには社会的に関心が高まっているので、オペレーターのメンタルヘルス対策なども紹介すると、よりリアルさが伝わるのでないかと感じた。

（ＮＨＫ側）

エマージェンシーコール～緊急通報司令室～「東京」は、ストレスの高い環境の中で仕事を冷静にしているオペレーターを描いている。指摘のようにメンタルヘルスの面からも何か描けるものはないか、現場に投げかけたい。

○　１０月１０日(月)の時論公論「“農政の憲法”改正へ　なるか食料安全保障の強化」を見た。「食料・農業・農村基本法」改正の議論が始まったことについての解説だった。農地の減少や食料自給率の低迷に加え、新型コロナウイルスの影響や、ロシアによるウクライナ侵攻を契機に食料、肥料、原料の輸入依存が課題になっている。このような状況で時宜を得た内容だった。国内資源の有効活用、農業従事者の確保、生産者と消費者の相互理解という３つの論点を分かりやすく解説していたこともよかった。今後およそ１年をかけて「食料・農業・農村基本法」の改正議論が進んでいくので、折りに触れてこのテーマを取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

時論公論「“農政の憲法”改正へ　なるか食料安全保障の強化」を担当した解説委員は、解説委員の中ではまだ若手だが、農林分野に深い知見を持っている。食に関する話題は引き続き取り上げていきたい。

○　１０月１４日(金)の首都圏情報ネタドリ！「梅毒“感染拡大”迫るリスク　なぜ！？」を見た。梅毒の感染拡大について、コロナ禍で孤立した若者が不特定の相手と性的な接触を持っているという生々しい証言が紹介されていた。性感染症は正しい知識があれば大部分を防ぐことができるが、学校では体系立った知識を教えていない。若い世代が正しい知識を得て、性感染症の予防につなげられるように継続的にこのテーマを取り上げてほしい。

○　連続テレビ小説「ちむどんどん」について、本土復帰５０年という節目に沖縄を

取り上げて何を伝えたかったのか、そのねらいがどの程度達成できたのか、課題、教訓は残ったのか、ＮＨＫの考えを聞きたい。

（ＮＨＫ側）

連続テレビ小説「ちむどんどん」は沖縄本土復帰５０年という節目の年にあたり、沖縄の「食」を切り口として沖縄のある家族の物語を中心に描いた。孤独や孤立が問題となる現代に、遠く離れても心がつながり支え合う家族の姿、ふるさとの味などを全国に届けたいと考えた。戦後の沖縄の歴史、沖縄が抱える社会問題について踏み込んだ内容を期待した人もいるかもしれないが、これらのテーマにはさまざまなジャンルの番組が多様な切り口で取り組んでいるので、「ちむどんどん」は社会問題に正面から切り込むよりは、見た人が元気に１日を過ごせるような番組にしたいと考えた。ドラマで沖縄の歴史や社会問題について興味を持ち、ほかの番組などで深く知ろうとするきっかけになればとも考えた。脚本家、出演者、協力いただいた方々にはすばらしい貢献をしていただいたと感謝している。一方で、ＳＮＳの「＃ちむどんどん反省会」をはじめ、厳しい意見を多数いただいていることは承知している。いただいた意見を真摯（しんし）に受け止め、今後のドラマ制作に生かしたい。

○　連続テレビ小説「ちむどんどん」を見ていた。最終回で突然主人公の妹が生死をさまよい、それを案じた家族が海に向かって叫ぶという展開はむちゃくちゃだと感じてしまった。「連続テレビ小説」は王道の作品ばかり続くとマンネリ化するので挑戦は必要だと思うが、多くの人たちにとって１日の始まりの気分を左右するような影響力があるので、その重みを感じてほしい。１０月から始まった「舞いあがれ！」は、「連続テレビ小説」らしく非常に丁寧に作られている感じがするので期待したい。

（ＮＨＫ側）

ドラマにはさまざまな受け止め方があると思う。指摘のように厳しい意見もあるが、「とても好きだった」「勇気づけられた」という意見もいただいている。番組として成功だったのか、失敗だったのかは、視聴者個々の判断に委ねたい。

○　１０月１５日(土)のＥＴＶ特集「ステージで、輝くいのち～戦禍のウクライナ国立バレエ～」を見た。ロシアによる侵攻によって離ればなれになっていたウクライナのバレリーナが集結し、日本で公演するまでを追っていた。バレリーナやその家族のことばが心に響いた。公演演目の予定だった「白鳥の湖」がロシアのチャイコフスキーの作曲であることから演目変更を余儀なくされ、プリンシパルが「自分はもう“白鳥の湖”を踊ることはないかもしれない」と複雑な心情を吐露していたのには、戦争が芸術に負の影響を及ぼしていることを改めて感じた。ウクライナのバレリーナたちがこの先どうなるか分からない中、この瞬間を生きることに喜びを感じ、力強い輝きをはなって踊る姿は涙なくして見られなかった。その後それぞれがウクライナに帰国したが、トップダンサーが戦死したことが伝えられたると、まだ戦争は終わっていないことを突きつけられ、非常に考えさせられた。

○　１０月１日(土)の理想的本箱　君だけのブックガイド「もっとお金が欲しい時に読む本」を見た。１０代の悩みに答える１冊の本を提案する番組で、若い世代向けながら派手な感じがなく、最近の言い方だと“チル”ということばがぴったりくる、くつろいだ雰囲気が非常によかった。一方、本の紹介に終始してしまった印象で、せっかくブックディレクターが出演しているのならば、もう少しきめ細かく悩みに答えたほうがよいと感じた。この番組をＳＮＳで展開するのであれば、テーマごとにコンテンツをまとめて表示する機能のあるインスタグラムが向いていると思う。

○　１０月９日(日)と１６日(日)のこころの時代～宗教・人生～　シリーズ「問われる宗教と“カルト”」（前編・後編）を見た。安倍元首相銃撃事件をきっかけに問われている宗教と“カルト”をテーマに、専門家が合計２時間にわたり討論していた。日本では宗教に関するリテラシーを高める必要があるが、専門性を持った人材を各教育現場に配置するのには時間がかかるため、この番組のようにＮＨＫが公共メディアとして広く伝えることが重要だと感じた。さまざまな立場の出演者が多様な視点で議論し、論点を整理しながらまとめていく構成もよかった。一方、出演者が早口で議論していて、0.75 倍速で繰り返し見直さないとすべての内容を理解できなかった。また、出演者がすべて中高年の男性であることが気になった。

（ＮＨＫ側）

「こころの時代～宗教・人生～」は毎週日曜日の朝に精神、宗教を取り上げている番組だが、安倍元首相銃撃事件を受け、今回のテーマに取り組んだ。議論は白熱し、自然と早口での議論となってしまった。現在の宗教界、思想界を代表する専門家を集めた結果の人選だが、ジェンダーバランスの観点か

らの配慮については今後に生かしていきたい。

○　仕事終わりに「きょうの料理」のテキストを参考に料理を作ろうとしたが、時間のかかる料理ばかりで断念した。働いている読者も増えていると思うので、料理にかかる時間を見やすく掲載してほしい。初心者向けの「きょうの料理ビギナーズ」もあるが、働く人へ向けた短時間で作れる料理を紹介する「きょうの料理ワーカーズ」があってもよいと思う。

○　ＮＨＫの番組とネットの連携について、特にＳＮＳとの連携やアーカイブ性に課題があると感じている。「ＮＨＫオンライン」の番組表で番組を選んでツイートしようとすると、個別の番組ではなく、番組表全体へのリンクしかはれず、番組の話題の盛り上がりの起点としては少し使いづらいと感じる。また、過去１か月分しか番組表が見られないので、番組表から「ウクライナ」で検索しても過去３０日分の関連番組しか探せない。番組やメタデータの検索、アクセスがしやすい構造を作ることはインターネットを活用する上で非常に重要だと思う。ほかの委員から番組のオープンソース化の発言もあったが、番組へのアクセスのしやすさはそういった場合でも重要になると思う。

（ＮＨＫ側）

インターネット利用の基盤にある、放送前から放送後のアーカイブスまで管理するための構造を作ることが重要だという貴重な指摘をいただいた。「ＮＨＫプラス」も、現状では放送を上流として、放送した番組をそのあとでどのようにインターネット上に展開するかという流れになっているが、これからインターネット上でどのようにＮＨＫのコンテンツを展開するか考えるうえで、どのような構造を作るかという観点は非常に重要だと考える。

（ＮＨＫ側）

前回の番組審議会で「介護のニュースについて仕事の大変さばかりが目につくので、誇り、やりがい、希望になるような情報も伝えてほしい」という意見をいただいた。１０月１０日(月)の「ニュースウオッチ９」では、筋肉がたくましい“マッチョ介護士”を取り上げた。愛知県で介護施設を運営する企業がマッチョな人材に特化した採用を続けることで、若い人材が集まっているという内容だった。介護士の１人が

「誇れる仕事です」と話していたのが印象的だった。これからも多面的に伝えていきたい。

○　ＮＨＫ高校講座「芸術／美術 Ⅰ」を見ている。「ＮＨＫ高校講座」はいずれもとてもよくできており、目の前の時事問題に右往左往する前に確認すべき基礎知識として、参照されるべき番組だと考える。動画だけでなく、ホームページに「学習メモ」などが用意されているところも学習の定着に役立つ。１０月１４日(金)の「アートとジェンダー」は、現代的な問題を丁寧に扱ったよい構成だった。学習者役が男性、解説の音声が女性というのもステレオタイプを避ける配慮が感じ取れた。一方、ナレーションにいわゆる役割語の「てよだわ言葉」が混ざっていたことはいささかちぐはぐな感じがした。また、４月８日(金)の第１回「アートって何？」では、解説者の金沢２１世紀美術館館長の長谷川祐子さんがアートを知ること、学ぶことの効用として「もてる」ことを挙げていた。「もてる」「うける」で人間を評価することが現代の生きづらさの原因になっているので、結果として「アートとジェンダー」で解説者の美術史家の小勝禮子さんが伝えた「アートを通し、今まで気付かなかった社会の問題に目を開いてみることもできる」というメッセージと逆のメッセージとなってしまっていたことが気になった。

○　１０月９日(日)のＮＨＫスペシャル　混迷の世紀「第２回加速するパワーゲーム～激変・世界の安全保障」を見た。ロシアによるウクライナ侵攻で国防強化を余儀なくされているリトアニアとスウェーデン、ロシアの軍事援助が浸透しているアフリカ諸国、中国が触手を伸ばす南太平洋島しょ国の３か所に焦点を当て、アメリカがもはや世界の警察たりえない、これからの世界情勢の問題を歴史的背景も含め、分かりやすく読み解く番組だった。三つの地域それぞれについてさらに詳しく解説する番組を見たいと思った。特にアフリカ諸国は近い将来予測される人口爆発、食料危機、気候問題、健康危機など、多くの問題を抱えた地域であり、安全保障だけにとどまらず、多角的な観点からも取り上げてもらいたい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２２年９月ＮＨＫ中央放送番組審議会

９月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１２日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１５人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、２０２１年１２月２６日（日）に放送したＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」へのＢＰＯ意見について報告があり、議事に入った。

会議では、まず、２０２２年度後半期の国内放送番組の編成について説明があり、２０２３年度の番組改定とあわせて意見の交換を行った。続いて、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　員	秋田　正紀	（株式会社松屋代表取締役社長執行役員）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	磯崎　功典	（キリンホールディングス株式会社代表取締役社長）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	栗原　　友	（料理家）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本水泳連盟理事／シドニー五輪競泳日本代表）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜２０２２年度後半期の国内放送番組の編成について
２０２３年度の番組改定について＞

○　後半期の方針に「デジタルシフトへの加速」という項目があった。具体的な取り

組みを教えてほしい。「スマートフォンに最適化したコンテンツ」の取り組みとあわせて知りたい。

（ＮＨＫ側）

後半期の方針にあげた「デジタルシフト」は、放送番組の制作において、コンテンツをデジタルでも展開することも見据えたワークフローを構築する“作り方改革”を始めることが一つ。もう一つは、外部プラットフォームも含めたプロモーションを積極的に取り入れ、その結果を検証しながら取り組みを加速していくということだ。スマートフォンへの最適化は、縦長の画面にあわせた映像がどのようなコンテンツで効果的か試行して、それがどのように見られるのか分析をしている。８月１５日(月)の「セイコグラム」で、縦型の動画を配信したことが一例だ。

○　毎年８月、９月は若者や子どもの自殺が多いことも踏まえてか、不登校あるいは自殺予防を意識したニュースや番組が増える傾向にあるが、一定の期間に話題が集中しすぎることが当事者にとって苦痛に感じることがある。自殺予防や不登校については、年間を通して取り組んでほしい。

○　今後３年間は、衆議院解散がない限り、大きな国政選挙はない。政治をチェックするメディアの重要性が増す。中でも、公共メディアであるＮＨＫが果たす役割は大きく、期待したい。

○　コンテンツのデジタル展開は、ＮＨＫの業務範囲にかかわってくる。透明性を持って慎重に議論を進めていってほしい。

○　Ｚ世代では、「ＮＨＫプラス」や「ＮＨＫオンデマンド」を知らない人たちが多いので、ＳＮＳも活用しながら認知拡大を図ってほしい。「漫画家イエナガの複雑社会を超定義」や「義経のスマホ」など、この世代の共感を呼び、反響があった番組もある。Ｚ世代は興味関心が移り変わりやすく難しさもあるが、あきらめずに狙っていってほしい。

○　デジタルを使うことも含めて、より多くの人々に多様な情報を伝える役割をＮＨＫが担っていくことに期待している。

○　デジタルの活用を進めていく一方で、テレビならではの魅力、テレビでなければできないことを見つけて、コンテンツづくりに生かしてほしい。

○　ＮＨＫのアーカイブスには非常に多くの貴重なコンテンツがある。それをより有効に活用してほしい。「ＮＨＫオンデマンド」などの現在の取り組みだけでは不十分だと感じている。

＜放送番組一般について＞

○　ＢＳ１スペシャル「河瀬直美が見つめた東京五輪」へのＢＰＯ意見について、「重大な放送倫理違反があった」というＢＰＯ意見に対して、ＮＨＫとしての対応は、再発防止策を徹底するということか。

（ＮＨＫ側）

ＢＰＯからの指摘に対しては、再発防止策を着実に実行していくことで応えていく。取り組みの進捗状況はＢＰＯへ報告していく。

○　再発防止策の一つである「複眼的試写」を実施した回数が 900 回近くというのは非常に大きな数だと思う。すべての番組において実施しているということか。

（ＮＨＫ側）

従来、「複眼的試写」の実施は現場の判断にゆだねられていたが、今回の問題を受け、番組やコンテンツの内容の正確さやリスクについてチェックする「コンテンツ品質管理責任者」を各局に新たに配置し、責任者が「複眼的試写」の実施などを判断し、適正な実施をチェックする体制を整えた。品質管理の責任者の判断による形で、半年間で 900 回実施したことは、それなりの数だと受け止めている。

○　審議会の立場からも、引き続き再発防止に努めるようお願いしたい。

○　８月６日(土)のＮＨＫスペシャル「原爆が奪った“未来”～中学生８千人・生と死の記録～」を見た。8000 人もの中学生が原爆の犠牲となったことに衝撃を受けた。今の中学生にとっても同世代が無残な形で死を迎えたという事実は共感できる

と思う。戦争について、若い世代が共感し、自分ごとと捉えることができる番組を、今後も積極的に制作してほしい。

○　８月６日（土）のＮＨＫスペシャル「原爆が奪った“未来”～中学生８千人・生と死の記録～」を見た。涙なしでは見ることができない、心が揺さぶられる番組だった。原爆の犠牲となった中学生の日記の制服作りのエピソードから、1988 年放送のＮＨＫ特集「夏服の少女たち～ヒロシマ・昭和２０年８月６日～」を想起した。「夏服の少女たち」では、この番組の放送した当時７０代から９０代の、犠牲となった生徒の親たちが登場して思い出を語っていた。今回の番組では、９０歳前後となった生き残った同級生やきょうだいが証言していた。同じ悲劇を取り上げた２つの番組が、３４年の時を経て、親の視点、同級生の視点という形で対をなしているように感じた。戦争の時代を生きた人が高齢となり、証言を聞くことができる機会は年々少なく貴重になってきているので、このような番組を多く制作してほしい。

（ＮＨＫ側）

広島の原爆を取り上げた「ＮＨＫスペシャル」は毎年制作しているが、ロシアによるウクライナ侵攻により核兵器の使用が現実的な脅威となっていることで、広島から伝えるメッセージは特に重要さを増していると考えている。これからも引き続き原爆の悲惨さを伝えていきたい。

○　８月１３日(土)、１４日(日)のＮＨＫスペシャル　新・ドキュメント太平洋戦争「１９４２　大日本帝国の分岐点（前編・後編）」（総合１３日(土)後 10:00～10:54、14 日(日)後 9:00～9:54）を見た。個人の日記や手記、手紙など、「エゴドキュメント」といわれる資料を通して、太平洋戦争の分岐点となった１年を描いた。政治家や軍の指導者だけでなく、銃後の主婦や出征兵士の留守家族、経済人といった市井の人々、あるいは軍人でも一兵卒の証言を織り交ぜることで、当時の雰囲気や庶民の思いが立体的に再現されていた。250 人以上の日記、延べ１４万日分を調べたといい、取材にこれだけのリソースを割けるのは、ＮＨＫならではだ。インドネシアやフィリピンなどを舞台にした後編では、占領された５か国９０人分の「エゴドキュメント」が使われた。日本が掲げた大東亜共栄圏という「大義」への疑問や批判を含め、多様な視点が提示されており、見応えがあった。

（ＮＨＫ側）

表だって言えなかった“本音”を記した「エゴドキュメント」を通して、当時の人たちの体験や思いを、現代のわれわ

れが追体験することがこの番組の大きなねらいだ。こうした取材には時間と手間がかかるが、戦争の現実を明らかにすることはＮＨＫの公共メディアとしての役割の一つだと考えている。

○　８月２１日(日)、８月２８日(日)、９月４日(日)に放送されたＮＨＫスペシャル「命をつなぐ生きものたち　第１集～第３集」を見た。ＢＢＣとの３年にわたる共同制作ということだったが、とにかく「すごい」のひと言に尽きると感じた。予測不可能な野生の動物たちの決定的な瞬間を数多く撮影したことに感激し、映像を通じて改めて生命の尊さを知ることができたことに、感謝の気持ちすら湧いてきた。大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」で夫婦役を務めた大泉洋さんと小池栄子さんが案内役となる演出や、３回それぞれで別の人気声優を語りに起用したこともよかった。実にＮＨＫらしい秀逸な番組だった。

（ＮＨＫ側）

迫力のある映像で命の尊さを伝える番組も、ＮＨＫならではのものだと考えている。今後も「ＮＨＫスペシャル」の一つの柱としていきたい。

○　９月１１日(日)のＮＨＫスペシャル「“染紅”変貌する香港－『自由と民主』が消えるとき－」を見た。ＮＨＫが香港のジャーナリズムの状況について定期的に伝えていることは素晴らしいと思う。香港のジャーナリズムがどのように締め付けられていき、どのように自由や民主主義が奪われていくかを世界に伝えていくことは、アジアの放送局としてのＮＨＫの重要な役割だと思う。取材には困難もあるかと思うが、中国の本質に迫る重要なテーマだと思うので、今後もしっかりと伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

香港については、最近はニュースで取り上げられることも少なくなっているが、今回のような番組を定期的に制作することで、身近な国の動向をしっかりと伝え続けていきたい。

○　８月２９日(月)のクローズアップ現代「旧統一教会と政治　見過ごされてきた関係」と、９月５日(月)の「“宗教２世”旧統一教会・信者の子どもたち　知られざる現実」を見た。「旧統一教会と政治　見過ごされてきた関係」では、政治家への聞き取りの調査を行い、信者側の証言も交えて、選挙協力を中心に、旧統一教会と

政治家の緊密な関係を明らかにしていた。特に教会の関連団体の代表を初めて単独取材できたことは大きな成果だ。番組で取り上げた以外にも、９０分にわたるインタビューの全文をホームページで公表したのは、透明性という観点でもよい。「“宗教２世”旧統一教会・信者の子どもたち　知られざる現実」は、勇気を持って取材に応じた“宗教２世”の人たちの思いに寄り添った内容だと感じた。旧統一教会をめぐる問題に関する報道が、ＮＨＫは民放に比べて少ないという印象を持っていたが、今回の番組は独自の取材を重ねたものだった。岸田首相が「旧統一教会との関係を絶つ」と宣言し、旧統一教会関連団体トップも「あらためて自分たちの運動の在り方について検討をしなくてはいけない」と話していたが、本当に実行されるか注目している。この問題に対して、ＮＨＫが正面から向き合い、骨太な番組を制作していくことに大いに期待している。

（ＮＨＫ側）

旧統一教会と政治の関係や宗教２世の実態などについてはテレビやラジオのニュース、インターネットなどで多角的に報道し、「日曜討論」でも政党の幹部が出席する討論でテーマとして扱っている。引き続き、正確な情報を伝えるよう努めていきたい。

○　８月３０日(火)のクローズアップ現代「夫婦で臓器分け合う　新たな選択めぐる葛藤　あなたはどうする？」を見た。もともとは他人である夫婦間の生体臓器移植を取り上げ、臓器提供を夫婦でどのように受け止め、夫婦関係をどのように構築するかという葛藤を取り上げた秀逸な番組だった。臓器移植について、今までは臓器売買などの社会問題が取り上げられることが多かったが、それ以外の話題について取り上げられたことがよかった。一方、臓器移植は脳死体からの臓器提供が本来あるべき姿で、生体間の臓器提供というのは死体臓器提供の少ない日本ならではの問題であることにもう少し触れたほうがよかった。また、夫婦間の移植成績は悪いが免疫抑制剤の進歩で改善しているという説明があったが、臓器や血液型によって成績は異なるので、もう少し丁寧な説明が必要だ。

○　８月３１日(水)のクローズアップ現代「ジャニーズそしてＢＴＳ　アイドル新潮流　舞台裏を追う」を見た。子どもや若い人も興味のあるアイドルを取り上げたことで、若い視聴者にとっては社会について関心を持つきっかけとなったのではないか。９月７日(水)の「揺らぐ“中絶の権利”日本の現実は」も、日本では今まで議論されてこなかった重要なテーマを扱っていた。「クローズアップ現代」は、家族で社会について考えるきっかけになる話題を提供してほしい。

○　８月３１日(水)のクローズアップ現代「ジャニーズそしてＢＴＳ　アイドル新潮流　舞台裏を追う」を見た。日本の文化をけん引しているファンの熱量が伝わってきた。ＢＴＳのグローバルな成功について、“推し活”に代表される日本のファンの活動が重要な役割を果たしたと言えるほど、経済的な影響力があることが触れられずに終わっていたものの、非常に興味深い内容だった。

○　８月３１日(水)のクローズアップ現代「ジャニーズそしてＢＴＳ　アイドル新潮流　舞台裏を追う」を見た。ジャニーズのアイドルの改革の過程を見ることができて興味深かった。番組ホームページに掲載されていた関ジャニ∞の大倉忠義さんのインタビュー記事も読み応えがあった。一方、冒頭で「Ｚ世代の８割が“推し活”に夢中になっている」と前置きした上で、アイドルの活動についてリポートする展開に少し違和感を覚えた。今や“推し活”の対象は、動画配信者や企業など幅が広がっていて、アイドルに限ったものではない。また、“アイドル”についても、動画配信サービス発のアイドルやコロナ禍でのファンとの交流の変化など、話題は幅広く多彩になってきている。そのうちの一つを掘り下げて伝えてもよかったのではないか。

○　９月７日(水)のクローズアップ現代「揺らぐ“中絶の権利”日本の現実は」を見た。はじめにアメリカの混乱した実情を紹介した上で、日本でもさまざまな課題があることを伝えていた。日本では残念ながら「中絶の権利」についてそれほど活発に議論はされていないと思う。しかし、議論をしないまま放置しているとアメリカのように混乱した状況になりかねない。非常にセンシティブな話題だが、今後も取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）この番組のきっかけは、アメリカの最高裁で中絶は女性に認められた権利だという判例が覆されたことだったが、それだけに留まらず、日本における中絶の現状もきちんと取材して伝えることを狙った。今後も、家族で社会について考えるきっかけになるような幅広いテーマを取り上げていきたい。

○　ニュースの冒頭で、「節電のため照明を暗くしています」というテロップを表示しているが、画面の暗さはあまり気にならないので、何のために表示しているのか疑問に感じる。また、スタジオの照明を暗くすることがどれほど節電に有効なのか知りたい。

（ＮＨＫ側）

節電についてのテロップは、７月に政府の節電要請があったときから続けている。表示し続ける必要があるのかという意見は現場と共有して検討したい。スタジオの照明を暗くすることによって、電力の使用量はかなり減っていて、実際の節電の効果もある。

○　「笑わない数学」を見ている。数学者の王と言われたガウスと女性数学者の心温まるやり取りを紹介したり、数学はエッシャーのだまし絵や未来の気象予測とも関係することを紹介したりするなど、興味がわくような内容にしようという工夫が見られ、難解な数学をできるだけ理解してもらおうと努力していることがよく伝わってきた。ＭＣのパンサー尾形さんは、最初、お笑い芸人を安易に起用したのではないかという疑問を感じたが、ふざけずに、難解な数学を真剣に説明しようとしていることに好感を持った。

（ＮＨＫ側）

この番組は大学で数学を専攻していた数学の世界に精通したプロデューサーが担当している。一方で、少しでも多くの方に興味を持ってもらえるように、芸人のパンサー尾形さんを起用した。視聴者からの反響も大きく、番組への質問のほか、もっと深く知りたいという意見も多くいただいている。視聴者の関心の高さに制作現場も驚いている。

○　８月７日(日)の「サンデースポーツ」を見た。飛び込みの日本選手権の結果を伝えていた。テロップで「飛び込み」と表記していたが、競技団体では「飛込」という表記を正式な表記としている。視聴者に分かりやすく伝えるためあえて「飛び込み」と表記しているのか。競技の現場では、「飛び込み」という表記は自殺を想起させて印象がよくないという意見もある。今後見直す機会があれば、こうした意見も踏まえて検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

競技の表記は、オリンピックの際に大会組織委員会や通信社などと協議して決めている。「飛び込み」という表記も、視聴者の分かりやすさを考慮して、通信社などと協議して決めたものだ。

○　第２次岸田改造内閣発足に関する一連のニュースを見た。先月の安倍元首相銃撃事件に関するニュースの際にも指摘したが、記者の解説が物足りなく感じた。政治や社会の分野のニュースの解説では、出来事の繰り返しと要約にとどまっていると感じる。リスクを意識して踏み込んだ発言を避けているのかとも思えてしまう。ニュースの背景を意識して伝えるようにしてほしい。また、地域放送のニュースと全国放送のニュースで同じ内容が放送されることがあるのが気になる。一つのコンテンツをマルチユースすることは大事なことだと思うが、全く同じコメントや映像をそのまま使うのではなく、伝える切り口を変えるなどの工夫をしてほしい。

（ＮＨＫ側）

政治や社会の分野での記者解説について、厳しい指摘があった。リスクを気にして踏み込んだ発言はしないということはなく、ニュース原稿で触れていない情報やバックグラウンドの情報を盛り込んで解説をしているつもりだが、指摘のように見えていることは現場に伝え、取材に基づく深みのある解説を心がけたい。地域放送のニュースと全国放送のニュースで同じコメントや映像が使われているという指摘について、大きなニュースがあった場合、どうしても地域放送でも全国放送でも同じニュースを扱うことになる。一方で、全国的な関心と、地域としての関心は、切り口や課題意識が違うことがあると思うので、同じニュース項目を扱ったとしても、コメントのしかたを変えたり、使う映像を変えたりするなどの工夫をすべきだと考える。どう改善していくか、継続的に検討していきたい。

○　第２次岸田改造内閣発足に関する一連のニュースを見た。組閣の前から誰が閣僚になるか判明するたびにニュース速報で伝えていた。翌日になれば公式に発表される情報をいち早く伝えることに時間や労力を割くのではなく、公式情報だけでは分からない背景や影響の取材を追求したほうがよいのではないかと疑問を感じた。

（ＮＨＫ側）

誰が閣僚になるかということは、視聴者の関心もあり、その後の政治、経済、社会などに大きな影響があることなので、しっかりと報道している。指摘のように、閣僚が変わることで何が変わるのか、またその閣僚がどういう政策を進めて行くのかといったことも重要なので、そうしたことも含めて力

を入れて伝えていきたい。

○　８月１０日(水)の潜れ！さかなクン「ギョギョギョ　富山湾スペシャル！」（総合 後 7:33～8:45）と１７日(水)の「ギョギョギョ！！隠岐諸島スペシャル」（総合 後 7:30～8:42）を見た。さかなクンが海に実際に潜って、生物の生態を子どもたちにも分かるように見せていて、子どもも非常に喜ぶ内容だった。この番組をはじめ、ＮＨＫは子ども向けの自然に関するコンテンツが非常に豊かだと思う。昆虫をテーマにした番組で出演者の不祥事があったが、昆虫が好きな子どもたちにとってはとても大切な番組だったので、代わりとなるような番組をお願いしたい。

○　この夏、“戦争と平和”についてより多くの人に考えてもらえるよう、多彩な切り口の番組を放送していたと感じている。アバターも活用して戦時中の暮らしを体感させる８月１２日(金)の「＃あちこちのすずさん２０２２　今、戦争を見つめてみる」(総合 後 7:30～8:42)や、日記や手記などの「エゴドキュメント」を用いて個人の視点から戦争を追体験する８月１３日（土)、１４日（日）のＮＨＫスペシャル　新・ドキュメント太平洋戦争 「１９４２　大日本帝国の分岐点（前編・後編)」など、さまざまな切り口に挑戦していて感心した。

○　８月３０日(火)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の企画「どうする　子どもの親権」を見た。「共同親権」について、賛成、反対双方の立場を紹介していたのは意義があった。一方、「共同親権」のメリットとして面会、交流がしやすくなる、養育費の支払いが円滑になるという紹介には違和感を覚えた。親権と交流や養育費の支払いは別の問題だ。また、「共同親権」を主張する当事者の中にはＤＶの加害者も多く存在するので、報道する際には注意が必要だ。９月９日(金)の首都圏情報ネタドリ！「“私たちの声も聞いて”～離婚を経験する子どもたち～」は、子どもの視点に加えて、同居親や別居親の視点からも伝えていて、丁寧な番組だった。「子どもの視点」に立った報道が、子どもたちが守られ、子どもの意見が尊重される仕組みにつながることを期待している。これまで焦点が当たりづらかった養育費の確保は、最も改善が急がれる問題の一つなので、ぜひ報道してもらいたい。来年の４月に「こども家庭庁」が発足し、「こども基本法」が施行される。「子どもの視点」を重視したニュース・番組に期待をしている。

（ＮＨＫ側）

指摘のように、子どもの視点に立ち、子どもの意見を尊重する、子どもにとって何が一番よいのかと考えることが重要だと考える。ＤＶ加害者の問題等があることについては、取

材現場と共有したい。離婚後、親権をどうするか、交流や養育費がどうあるべきかという問題は、今後も丁寧に報道を続ける必要がある大事なテーマだと考えている。いただいた意見を現場と共有して、子どもの視点を大切にしながら多角的な報道に努めていきたい。

○　９月４日(日)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の企画「コロナで介護が受けられない　第７波“過去最大の介護危機”」を見た。介護現場の人員不足や、クラスターによって休業を余儀なくされ、倒産する介護施設が増えていることなど、介護を取り巻く問題の深刻さを伝えていた。一方で、介護人材が不足している状況の中、介護の仕事の大変さばかりが印象に残ってしまうように感じ、残念に思った。介護の仕事の実態や課題を伝えることも重要だが、専門職として人々の暮らしを支えていることに誇りややりがいを持って働いている姿や、地域と連携し工夫をしている現場など、前向きな情報もあわせて伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

仕事の大変さばかり目立つような形ではなく、働いている方たちの誇りややりがい、希望になるような情報も伝えてほしいという意見は現場と共有したい。

○　９月５日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「映像プロパガンダ戦　嘘（うそ）と嘘（うそ）の激突」を見た。ＮＨＫが得意とする豊富なアーカイブスや調査に基づいた秀逸な番組だと感じた。プロパガンダに利用されるようになった映像表現が、日本の漢字に着想を得たものだったというエピソードは興味深かった。ウォルト・ディズニーや円谷英二がプロパガンダに関わっていたことが紹介されていたが、彼らのようなクリエイターにとって、伝える内容自体には納得していなくても、映像表現の技術を追求できることの喜びが勝ってしまう側面があったのだと感じた。番組の最後に「戦争が終わった後、円谷は生涯に渡って子どもたちに平和の尊さと夢を与える作品を作り続けた」というコメントがあったが、円谷作品の主題は勧善懲悪で、「平和の尊さ」という表現には違和感も覚えた。また番組では、ＡＩを駆使したフェイク映像などについても触れられていた。何が真実か、見極めが非常に難しいときがあることや、後になってその真偽が覆ることも起こりうるという状況を伝えていたと思う。テレビやインターネットといった枠を超えて、フェイクを見極める知見を共有していくことが重要だと感じた。

○　ドラマ１０「プリズム」を見ている。登場人物がそれぞれのセクシャリティや

ジェンダーに悩んだり傷付いたりしながら、自分自身を見つめ、次第に相手も認めていくというストーリーのドラマだ。相手を傷付けないように本音にふたをして向き合っていくことが本当のやさしさなのか問いかける一方で、多少傷つけ合っても本音でぶつかり合って認め合えることが理想だとしてもすべての人がそうできるわけではないということが描かれていて、非常にリアルだと感じた。重いテーマを扱っているが、主人公が庭のリフォームのプロジェクトに参加し、植物とふれあう場面には癒やされた。家族で視聴してジェンダーなどについて考えることができる今の時代にふさわしいドラマだと思う。原由子さんが歌う主題歌もドラマの雰囲気にあっていた。

（ＮＨＫ側）

ジェンダーの問題を取り上げるドラマや番組が増えているが、話題づくりではなく、多様性の在り方について考えるきっかけになってほしいという思いで制作している。

○　８月１１日(木)の特集ドラマ「アイドル」（総合　後 7:33～8:45）を見た。戦争の中で、自由な活動が奪われ、芸術的な表現活動が制限されていく過程を描いていて、家族で見て非常に考えさせられる番組だった。

（ＮＨＫ側）

今までの「戦争と平和」を扱ったドラマと比べ、多くの若い世代の視聴者に見ていただけた。新しい切り口で「戦争と平和」を扱ったドラマとなったと思う。

○　夜ドラ「あなたのブツが、ここに」を見ている。新型コロナでキャバクラの仕事を失い、巣ごもり需要で活況を呈する宅配ドライバーに転身したシングルマザーが主人公。時短営業などによる飲食店の苦境や給付金詐欺、コロナを理由にした学校でのいじめなど、コロナ下の世相が数多く盛り込まれていた。今日的な社会問題を背景に、親子の絆や仕事への誇り、他者への思いやりが描かれ、明日への元気をもらった。宅配ドライバーに対する感謝の気持ちも増した。主演の仁村紗和さんは適役で、主題歌のウルフルズの「バカサバイバー」もドラマの雰囲気にぴったりだった。

○　夜ドラ「あなたのブツが、ここに」を見ている。ふだんはあまり注目されない宅配ドライバーという職業を取り上げ、そこで働く人の思いを描き出していたのがよかった。宅配ドライバーの主人公がアルコール消毒を直接かけられるというシーン

があったが、現実の宅配ドライバーも同じような扱いを受け、つらい思いをしたという話もある。このような現場の苦労を、ヒューマンドラマとして描いているところもよい。エンディングの主題歌「バカサバイバー」も格好がよい。今回、「ＮＨＫプラス」で視聴したが、第２話を見終わると第１話に戻ってしまった。視聴者としては次のエピソードに移ってほしいと思うので、改善をお願いしたい。

○　夜ドラ「あなたのブツが、ここに」を見ている。大阪局のツイッターアカウントが発信した「あなブツダンス」の動画を見て興味を持ったのがきっかけで、ＳＮＳの動画が番組視聴のきっかけにつながる体験になった。

（ＮＨＫ側）

夜ドラは今年度始まったばかりの枠なので、定着に向け、さまざまな広報の取り組みをしている。大阪局のアナウンサーたちがダンスを踊る動画をＳＮＳで発信したのも一環で、話題を呼んでいる。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫプラス」で続けて見ていて、話数が戻ってしまうという指摘があった。「ＮＨＫプラス」は、一番上の新しいものから順番に再生するのが標準の仕様になっている。ドラマなど複数話を一気に見たいという要望に応えるため、ユーザーが再生順を変えられるような改修を検討している。ドラマの「イッキ見！」の際にはＮＨＫ側で手動で並び順を調整することがあるが、「あなたのブツが、ここに」では対応していなかった。今後はきめ細かく対応していきたい。

○　８月２７日(土)のＥＴＶ特集「女たちの戦争画」を見た。戦争中、戦意を高揚する絵を描く女性画家の活動をリードしていた長谷川春子という画家に焦点を当てた番組だった。長谷川春子は、当時低かった女性画家の地位を何とかして向上させたいという意識が非常に強く、戦争協力者として一方的に断罪できないと感じた。戦争について、どうしても被害者と加害者に分けて考えがちだが、そのどちらにも分けられないこともあることを考えさせられた。また、番組では研究機関に属さず女性画家の戦争画について地道に研究を続けている研究者を取り上げていた。当人だけでなく、同じような研究者にとっても非常に励みになることだと思う。

○　９月３日(土)のＥＴＶ特集「消滅集落の家族」を見た。震災がきっかけで宮城県

から秋田県の山間部に移住した男性の１年を記録したドキュメンタリーだった。もともとは自給自足の生活を目指していた男性が、家族ができたことで、外に働きに出るなど生活が変わっていき、理想と現実との間で葛藤しながらあるべき人生を追い求めていく姿が描かれていた。“クオリティ・オブ・ライフ”とは何かを問いかけるような、心を揺さぶられる番組だった。

（ＮＨＫ側）

この番組は秋田局の入局４年目のディレクターが制作した。秋田県向けの地域放送番組「ニュースこまち」の中で、１年にわたって定期的に放送してきた企画を１本の番組にまとめたものだ。地域局のディレクターにとって学ぶべきことも多い番組で、他の局にも制作のノウハウを共有している。

○　８月１４日(日)の「ようこそ認知症世界へ」（Ｅテレ 後3:30～3:59）を見た。「認知症世界の歩き方」という本を元に、旅人が、顔が分からなくなる世界や方角が分からなくなる世界などで認知症当事者が経験することを学ぶ演出で、認知症の理解を深める番組だった。認知症について、当事者の声を伝えることでリアルさが増すとともに、専門家の解説で理解が深まり、悲観することなく前向きな気持ちになれる番組だった。特に認知症の症状がある漫画家の蛭子能収さんとマネージャーとのやり取りを紹介していて、蛭子さんがマネージャーの名前を覚えていないという現実を悲しいことではなく、面白いネタのように受け止める、ほっこりとしたやり取りが印象に残った。９月１９日(月)に「拡大号」が放送されるということで楽しみにしている。多くの人に見てもらいたい番組なので、周知にも力を入れてほしい。

○　９月９日(金)の新・にっぽんの芸能「能装束で幽玄なる美の世界」を見た。能装束に焦点を当てていて、じっくりその魅力を堪能できた。能装束を作る工房を訪ね、能「道成寺」のために装束を新調する過程を紹介していて、非常に興味深かった。装束をきっかけに能に興味を持つ人もいると思うので、翌週に能「道成寺」の演目を放送するなど、興味を持った人を作品にいざなう展開ができると思った。「新・にっぽんの芸能」の中だけでなく、「古典芸能への招待」などの番組と連携すればさらに効果的だと思う。番組の末尾にＱＲコードを表示して「ＮＨＫプラス」に誘導しているが、関連番組のサイトに誘導するなど、より有機的に連携するとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

「新・にっぽんの芸能」は古典芸能の入門的な番組と位置

付けている。この番組で装束などいろいろなものから古典芸能に興味を持っていただき、「古典芸能への招待」で演技の深さを堪能していただくという流れを作っていきたい。いただいた意見を現場に共有して、より視聴者に楽しんでいただける番組作りをしていきたい。

○　９月３日（土）の「コウケンテツの日本１００年ごはん紀行ミニ」（総合　前 11:42～11:52）と９月４日（日）のコウケンテツの日本１００年ごはん紀行「真夏の味覚を満喫！岩手」（ＢＳ１　後 7:00～7:49）を見た。「コウケンテツの日本１００年ごはん紀行ミニ」では、高知県でカツオのたたきを加工している水産会社が、稲作農家が廃業していく中でカツオをいぶす「わら」が足りなくなり、自ら稲作をしているという現実を伝えていて、驚くとともにやるせない気持ちになった。一方、脱サラをして「土佐あかうし」の畜産農家になった人の明るい表情には希望を感じた。「真夏の味覚を満喫！岩手」では、東日本大震災で減ったサケを養殖で復活させた「大槌サーモン」の取り組みや、一関のもち文化、遠野のホップ生産農家に弟子入りするために移住してきた新規就農者を取り上げ、地域の農林水産業の現場の様子を伝えていた。９月９日(金)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の中継「牛乳が飲めなくなる？！日本の酪農が危機」では、餌などの資材高騰で経営危機に陥っている酪農家が牛乳、乳製品の消費拡大を訴えていた。「うまいッ！」「朝ごはんＬａｂ.」「いいいじゅー！！」など農林水産業の現場や地域を紹介する番組を増やし、日本の農林水産業や地域の活性化につなげてほしい。

○　８月２６日(金)の“いけず”な京都旅「イケてるお坊さんに、会いに行こう！」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 10:00～10:59)を見た。楽しい番組で笑いながら見た。お坊さんが若い世代に興味を持ってもらうため、ドローンを飛ばすなど様々な工夫を凝らしていることを知ることができた。魅力的な寺や会いにいきたくなるお坊さんが紹介されていたので、ＱＲコードから彼らのＳＮＳや寺の地図などが確認できるような工夫があるとよいと感じた。

○　「ＮＨＫプラス」で地域放送番組が見られるようになったことはとてもよい。去年亡くなった作家・那須正幹さんを取り上げた中国地方向けのラウンドちゅうごく「子どもが夢中!ズッコケ三人組 ～作家・那須正幹のメッセージ～」を「ＮＨＫプラス」で偶然見つけ、興味深く見た。移動時間などに「ＮＨＫプラス」を見ることも、豊かな時間の使い方になると思う。

○　「全国高校野球選手権大会」について、「ＮＨＫプラス」で配信されていないこ

とが非常に残念だ。

（ＮＨＫ側）

「全国高校野球選手権大会」は、主催者から権利の許諾が得られていないため、「ＮＨＫプラス」での配信はしていない。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２２年７月ＮＨＫ中央放送番組審議会

７月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２５日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２０２２年度第１四半期・４～６月）について説明があった。続いて、ＮＨＫデジタルサービスについて説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋代表取締役社長執行役員）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	磯崎　功典	（キリンホールディングス株式会社代表取締役社長）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本水泳連盟理事／シドニー五輪競泳日本代表）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２０２２年度第１四半期・４～６月）について＞

○　今年度の番組改定は大規模なものとなったが、総合テレビの夜１０時台の番組がよく見られていることは、一定の成果だと思う。夜７時台や８時台の番組についても、「ＮＨＫプラス」などデジタルサービスと連動して見てもらう取り組みを進めるなどし、さらに多くの人々に見られるようになることを期待したい。「クローズ

アップ現代」は、視聴率は伸び悩んでいるが、インターネットではよく見られているということか。

（ＮＨＫ側）

「クローズアップ現代」は、社会の中核層をターゲットに決めて視聴率の推移をみている。ネット配信の視聴数やホームページのアクセス数では非常によく見られている。

＜ＮＨＫのデジタルサービスについて＞

○　社会実証ではいろいろな新しい試みを提示していたが、その中の一部はいずれ実装されるものなのか。

（ＮＨＫ側）

今回はあくまでも社会実証という仮の枠組みの中で、テレビをまったく、あるいはほとんど見ない方々に提示したものだ。得られた知見をじっくりと分析して、今後に役立てていきたい。

○　「ＮＨＫプラス」や「ＮＨＫオンデマンド」は異なるデバイスで続けて見ることが出来るようにしないのか。「ＮＨＫプラス」のテレビ用のアプリがリリースされたが、若い世代はテレビで操作して見るよりも、途中までスマートフォンで見ていたものを、そのままテレビで続けて見るのに慣れていると感じる。番組中にＱＲコードを表示してホームページや「ＮＨＫプラス」に誘導するという話があった。それと併せてＳＮＳのＩＤや使ってほしいハッシュタグも併記すると視聴者同士のコミュニティー形成や盛り上がりに寄与するのではないかと感じた。「ＮＨＫプラス」の見逃し配信期間は７日間だが、地方向け放送番組は１４日間となっている。理由が知りたい。「ＮＨＫオンデマンド」については、過去の作品が見られるというだけでは、数多くあるサブスクリプション動画サービスの中で訴求力が少ないのではと感じている。「ＮＨＫオンデマンド」でしか見ることのできないコンテンツなど、独自のサービスを拡充するとよいのではないか。 最近、ＮＨＫを装った不審なメールが非常に多く、自分にも届いている。ＮＨＫオンラインでも、不審な電話やメールの文面の事例を紹介して注意喚起しているが、自分のところに届いた不審メールは掲載されている文例とは異なる文面だった。実際の不審メールの発信元のメールアドレスを一覧で公開したほうが、不審なメールが届いた人にとっては安

心できるのではないかと感じた。社会実証で提示していたサービスの一つの「フェイクアラート」の中で、「意見の分断に注意」という表現があった。この表現では、意見が分かれていること自体が悪いことであるように誤解されてしまうと感じた。「意見が分かれています」、「意見が割れています」というような表現にした方がよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

「ＮＨＫプラス」の異なるデバイス間での連続再生機能への対応について、指摘のような利用方法が一般的になっていると思うので、将来的な検討課題としたい。放送画面上で、ハッシュタグの使用を呼びかけてはどうかという提案があった。ツイッターアカウントや放送の中で、できる範囲内で呼びかけている番組もある。いただいた意見は現場にも共有したい。「ＮＨＫプラス」は総務大臣の認可を受けた「ＮＨＫインターネット活用業務実施基準」に沿ってサービスを提供している。見逃し番組配信７日間、地方向け放送番組については最大１４日間というのは、この基準の範囲内ということになる。参考までに、民放各社がネット配信をしているＴＶｅｒなども放送後１週間の配信となっている。地方向け放送番組の提供期間が長いのは、システムの都合で放送が終わってから配信の開始までに少し時間がかかることを踏まえたものである。ＮＨＫを装った不審なメールについて、高齢者などデジタルツールに不慣れな方のことも踏まえ、夕方６時台の地域のニュースや平日夜８時４２分から放送している広報番組「＃ＮＨＫ」の中でも繰り返し注意喚起している。また、ＮＨＫオンラインのトップページや地域放送局のホームページなどでも注意喚起している。発信元のメールアドレスについて、＠以下がこうであれば危険という注意のしかたも考えられるが、アドレスは次々と変わっていて、不慣れな人にとってはかえって混乱してしまうリスクがあるので、現時点では実施していない。

○　社会実証の結果はとても興味深かった。「社会にとって有用か」については、７割程度が肯定している一方、「自分自身にとって有用か」についての評価は５割強だった。視聴者にとっての有用性をどう高めていこうと考えているのか。「フェイクアラート」は、偏ったレコメンドを改善できる有用な機能だと思った。

（ＮＨＫ側）

社会実証の参加者からは「ＮＨＫが丁寧な情報提供をしてくれるのは、情報を探すのが上手ではない方々に特に有用であり、社会にとっては意味がある」という反応があったと感じている。このようなことから指摘のような評価になったと思う。自分自身でも使ってもらえるようなコンテンツを充実させ、より使いやすいユーザーインターフェースにすることが課題と考えている。

○　ＮＨＫの価値はコンテンツにあり、そのコンテンツを多くの人々に見てもらうことが重要だと思う。デジタル上での機能の是非よりもユーザーに軸足を置いた調査、実証を行ったほうがよい。社会実証の中に位置情報とアーカイブスを結びつけ、旅行先でその土地に関連する動画を見ることができるサービスが提示されていたが、実際に旅行へ行ったとき、その場で何十分も動画を見ることはせず、むしろ行く前や行った後に関連する動画を見たいと思うものではないか。このようなユーザーの行動や感情から物事を見ることが重要だと思う。また、社会課題について能動的な気づきを促すことが必要だという点には同意するが、デジタルの世界に限ったことではなく放送においても同じことがいえると思う。「フェイクアラート」など有用な仕組みがあれば、デジタルだけで展開するのではなく、放送にも反映させ多くの人々に届けることで効果が上がると思う。自宅でのテレビ視聴が減っているという話があったが、テレビモニターでのインターネット配信動画の視聴数は伸びている。昨春の段階で 2000 万人がテレビモニターを通じて動画配信サイトを見ていた。ネット動画を見ている人たちはいろいろな配信者の動画を巡るので、その中でＮＨＫの存在をどのように大きくしていくのかを意識する必要があると感じる。ＮＨＫだからできること、ＮＨＫにしかできないことが多くあると思う。若い層、テレビを見なくなった層にどうアプローチできるのかというＮＨＫの課題を解決するために、ユーザーに視点をおいた調査を実施するとよいと思う。

○　ＮＨＫがインターネット活用業務をどこまでやるべきかという議論をせずに、サービスの話だけをするのはよくないと思う。ネット業務は放送の補完と定められているが、それを取り払ってサービスを拡充したいというニュアンスを感じた。強力な取材力と資金力、過去の膨大なアーカイブを持つＮＨＫが、ネットサービスに本格的に取り組めば相当便利なこと、有用なことができると思う。それを社会実証で示して、便利と思うか否か、意義があると思うか否かと聞いたら、多くの人が「便利だと思う」、「意義があると思う」と答えるのは当然だ。一方でＮＨＫは、それら

のサービスを受信料を原資として展開するのだから、ほかの事業者との競争の公正性の議論は避けられないと思う。「フェイクアラート」のようなサービスはＮＨＫがやる価値があると思うが、位置情報をもとに観光情報やアーカイブスをレコメンドするサービスなどは、民間のネットビジネス企業が開発し、産業として成り立たせていく可能性もある。公正な競争が成り立つのか考慮したうえで、ＮＨＫがネット業務をどこまでやるかを考えなければいけないと思う。

○　「ＮＨＫプラス」について、仮登録の段階でサービスを利用できるように改善したのはよいと思う。社会実証サービスのうち「フェイクアラート」は期待できる機能だと感じた。　　最近、番組内でＱＲコードを表示し、ネットコンテンツに誘導するよう取り組んでいるが、スマートフォンで「ＮＨＫプラス」を見ているときには、スクリーンショットを撮ると画面が真っ暗になってしまうためＱＲコードを読み込めず、ネットコンテンツにたどり着けない。例えば「ＮＨＫプラス」では番組の概要欄に文字情報のリンクやＱＲコードを貼るというような設計にして、スマートフォンの「ＮＨＫプラス」からもネットコンテンツに遷移できるようにほしい。「ＮＨＫオンデマンド」について、「連続テレビ小説」の検索は分かりやすいのだが、「ＮＨＫスペシャル」は見たい回が非常に探しづらい。「社会」や「科学」といったカテゴリーで整理されてしまっていて、最新の放送回がどこにあるのか探しづらいし、自分の見たい回がどのカテゴリーなのかも分からない。「ＮＨＫスペシャル」は良質なコンテンツの宝庫だと思うので、番組を探しやすいようにインターフェイスを改善してほしい。

○　社会実証の結果は大変興味深いものだった。ネットから放送にどう誘導するか、放送からどうネットに展開するかという話だけではなく、放送があり、ネットがあり、ネットにもスマートフォンやパソコンなどさまざまな媒体がある中、ＮＨＫとしてどう全体をデザインしながらコンテンツを展開していくかが問われていると感じた。制約とやりたいこと、やるべきことのせめぎ合いもあると思うが、トータルデザインを示すべき時期が来ていると感じる。社会実証で提示されたサービスにあった主要ニュースとアーカイブスなどのコンテンツを組み合わせる取り組みは興味深かった。「フェイクアラート」も情報の信頼性を担保する、ＮＨＫがまさにやるべき取り組みだと思った。今回の社会実証はテレビを見ていない層を対象としていたが、テレビを見ている層を対象にした調査も必要だと思う。

○　ＮＨＫオンラインの「災害列島　命を守る情報サイト」で提供している「ＮＨＫ全国ハザードマップ」がすばらしい。自分が住んでいる住所、郵便番号等を入れるとすぐに検索できる便利さがあり、旅行先であっても、出張先であっても、災害に

あったときにすぐに調べられる。社会実証で提示しているサービスに、旅行先でその場所の映像をレコメンドするものがあったが、その仕組みを災害情報にも活用するとよいと思った。ＮＨＫオンラインのトップページには「新型コロナウイルス特設サイト」へのリンクがはられているが、このハザードマップも大々的に展開していくことが大事だと思う。ハザードマップは各自治体等で冊子が配られ、自治体のホームページにも載っているが、ここまで詳細な分析をしていることは貴重で、どんどん共有してほしい。

（ＮＨＫ側）

今回の社会実証は総務省からの要請も踏まえ、ＮＨＫがインターネットを通じて番組や情報を届ける意義、役割について検証することが目的だった。この秋には第二期の実証を行う予定だ。社会の求めに応じて、あるいはＮＨＫの役割が果たせる範囲において、放送とインターネットの両方を活用してその役割を果たすことが一番だと考える。

＜放送番組一般について＞

○　６月２６日(日)のＮＨＫスペシャル「追跡・謎の中国船～“ 海底覇権”をめぐる攻防～ 」を見た。海難事故を防ぐ目的で公開されている船舶の位置情報に着目し、中国船の過去１０年分、2000 万点のデータを集め、徹底的に分析したデータジャーナリズムの模範のような番組だった。浚渫（しゅんせつ）船の活動に焦点をあてた点も興味深く、中国が「世界一の浚渫（しゅんせつ）大国」といわれることは初めて知った。一方、公海の海底資源は誰のもので、利活用の国際ルールはどうなっているのかなど、基本情報をもう少し知りたかった。北極海でのロシアの動向も注目されている。海洋をめぐる各国のせめぎ合いを、さらに深く取材し報道してほしい。

（ＮＨＫ側）

この番組は公開されている情報を収集して分析する手法で制作した番組の一つだ。最初は中国船のデータでどの程度のことが明らかになるのか分からなかったが、時間をかけて航跡をトレースすることで興味深いことが分かってきた。海洋資源の争いは中国、ロシアを含めて複雑な構図となっているようなので、今後も取材を続け、新たな番組を展開したいと

思う。

○　７月９日(土)のＮＨＫスペシャル「安倍元首相　銃撃事件の衝撃」(総合 後8:00～8:45) を見た。衝撃的な事件の翌日に番組を放送するというスピード感に大変感心した。一方で、事件直後では、容疑者の動機など番組では明らかにされなかった点もあった。その後の供述によって容疑者が特定の宗教団体に恨みを持っていたことも分かってきたようなので、今後も事件の深層の解明に向けて伝えてもらいたい。銃撃の瞬間の映像が何度も放送されたが、見るたびに心が痛くなった。番組でも事前に「銃撃音が流れます」と注意する配慮があったが、そもそも情報そのものから離れることも選択肢として示すなど、もう一歩踏み込んだ配慮があってもよいと思った。

（ＮＨＫ側）

今回の事件は、選挙期間中、投票日の２日前に、総理大臣経験者が銃撃され死亡するという、民主主義の根幹を揺るがしかねない、重大な出来事だった。こうした重大な事件について、事実を正確・迅速に視聴者・国民の皆様に提供することは、公共メディアの重要な役割の一つと考え放送した。選挙期間中であることから、投票行動に影響がないように、正確な事実に基づいて、公平・公正、不偏不党の立場を堅持して伝えた。その後、容疑者の動機については７月１１日(月)のクローズアップ現代「安倍元首相銃撃　事件の“背景”に何が」で、容疑者と宗教団体との関係も含め詳しく伝えた。今後も新しい事実が分かれば伝えていきたい。

（ＮＨＫ側）

視聴者の関心、知りたいことに応えるためにリアルな情報を伝えることは重要だが、その一方で今回のような衝撃的な事件では、指摘のとおり、映像を見る、音声を聞く方の心理的な影響などにも配慮しなければいけない。今後もどのような伝え方が適切なのか、不断に考えていきたい。

○　「阿佐ヶ谷アパートメント」を見ていた。さまざまな世代の感じ方、感覚を、ゆるやかに押しつけがましくなく伝えるＮＨＫならではのよい番組だった。新しい試みの番組だったようだが、視聴者にも好評だったようなので、今後の展開に注目したい。

○　６月２７日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「キューバ危機　世界が最も核戦争に近づいた日」を見た。世界中に保存されている過去の映像を基にした内容の濃いドキュメンタリーだった。核戦争の一歩手前という緊迫した状況の中、アメリカのケネディ大統領は若い部下の意見に丁寧に耳を傾け、結果として危機を回避することに成功した。ロシアによるウクライナ侵攻の現状を考えると、歴史から学ぶべきことは多いと感じた。

○　参議院議員選挙を前にした一連のニュースや「日曜討論」を見た。各政党の代表者が限られた時間で自党の主張について語るだけでは有権者に届かないと思う。公平・公正の観点を保ちながら、専門家が主要政党の公約を分析し特徴づけて伝えるようなことがあってもよいのではないかと思う。政治離れを防ぐためにも、選挙前の報道についてさらに積極的な姿勢で取り組むことが民主主義国家の公共放送として求められていると思う。公平性・公正性を担保するために、報道のプロセスも含めて可視化して取り組んでほしい。投票率の低迷が続き民主主義は危機的な状況で、こうした状態から前に進むためにも大事なことではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

投票前にどれだけ有権者の判断材料を提供できるのか、そのことによって投票率の上昇にどれだけつなげられるのか、ということが公共メディアとしての重要な役割であると考える。今回、候補者と自分の考え方の一致度を測ることができる「ボートマッチ」というインターネット上のサービスも実施した。さらに積極的にどのようなことに取り組めるのか、今後の課題として検討したい。

○　７月６日(水)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の企画「農業ができなくなる？隠れた“食料ショック”肥料争奪戦の行方」を見た。輸入に依存していた肥料が、価格高騰によって調達が難しくなるおそれがあり、国内で自給できている米や野菜の生産ですら不安定になりかねない現状を消費者に伝える時宜を得た内容だった。７月１３日(水)の企画「肉が食べられなくなる？家畜のエサ高騰の衝撃」も見た。飼料の価格高騰に苦しむ畜産農家の悲痛な声を丹念に取材していて、ＮＨＫの取材力の高さを感じた。「将来、お金を出しても肉が食べられないという事態に陥ることにならないのか」と、消費者が自分ごととしてとらえることのできる問いかけをしていた。どちらの企画も、番組で紹介されたＱＲコードを読み取ると「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」で詳しい記事も読むことができた。放送とデジタルの両分野にお

いて、公共放送として、時代の要請を踏まえた正しい情報を伝えてもらいたい。

○　安倍元首相銃撃事件に関する一連のニュースを見た。ニュースを伝えたアナウンサーの進行がすばらしかった。現場からの中継とスタジオとの切り替え、必要な事柄の聞き返し、コメントの仕切り方など非常に落ち着いて対応していた。一方で、記者の解説は物足りなく感じた。

○　安倍元首相銃撃事件に関する一連のニュースを見た。銃撃の瞬間の動画を放送したことについて、どのような判断でその映像を使用したのか、今振り返ってそのことをどう評価しているのか知りたい。

○　安倍元首相銃撃事件に関する一連のニュースを見た。現場にいた記者が撮影した映像が流れていたが、衝撃的な瞬間をまのあたりにしていたにも関わらず、冷静に状況を伝えていたことに感心した。ただ、撮影した記者の名前が繰り返して伝えられていたのには違和感を覚えた。

（ＮＨＫ側）

銃撃の瞬間の動画を放送したことについて、参議院議員選挙投票日の２日前に元首相が銃撃されたという事件の重大性を鑑み、何がその場で起きたのかを伝えるために使用した。指摘にあった視聴者に与える影響なども踏まえ、衝撃的な事件のニュースをどう伝えるのかについては今後の課題として検討したい。現場で撮影した記者の名前が繰り返し紹介されたという指摘について、誰が現場にいて撮影したのかを紹介するため必要に応じて伝えたが、繰り返し強調する意図はない。

○　７月９日(土)に再放送されたドキュメント７２時間「東京・練馬　野菜の自動販売機」を見た。東京・練馬区の住宅街にある野菜の無人販売所を訪れる客の人間模様をかいま見ることができた。生産農家の様子も描かれていて、都会の癒やしとして機能する農業の風景を見ることができた。

○　７月１１日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「太平洋戦争　“言葉”で戦った男たち」を見た。アメリカ軍が暗号解読、捕虜の尋問に当たらせるために急きょ１年で養成した日本語情報士官のうちの４人のエピソードを紹介していた。「ことば」が日米の架け橋となり、日本の復興に大きな貢献を果たした人々の存在を知り、

当時のアメリカ人の懐の深さとことばの重要性を改めて認識した。一方、タイトルの「“言葉”で戦った」という表現には違和感を覚えた。確かに４人は戦争に従軍したが、彼らの活動は戦いではなく、ことばで日本を救ってくれたことではないかと感じた。

○　７月１１日(月)の「朝ごはんＬａｂ.」を見た。夜の時間帯に朝ごはんを紹介することに違和感を覚えたが、明日の朝食のメニューを考える時間帯という意図なのだろうか。蒸しパンなどいろいろなメニューが出てきたが、朝食には米のごはんを食べることも意識してほしい。

（ＮＨＫ側）

夜１１時台に朝ごはんというのは時間にそぐわないのでないかという指摘があった。そういった意見があるだろうことも踏まえて、「おいしい料理は何時でも受け入れられるのではないか」というねらいで制作している。番組を通じ各地の朝の様子、生産者の様子も併せて伝えたい。

○　７月１２日(火)のクローズアップ現代「日本政治はどこへ　独自分析　参院選」を見た。労働組合の選挙活動やフリーランスで働いている人の状況を丁寧に取材していた。連合の幹部の方向性の違いにより労働組合の現場が混乱しているような描写があったが、もう少し丁寧に伝えてほしかった。労働組合の活動が伝えられることは少ないので、今後も取り上げるとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

いままで労働組合を取材する機会があまりなかったが、今回の参議院議員選挙に合わせ、労働組合と政治との関係の現状を取材できたのではないかと思う。

○　７月１７日(日)の「夜のテレビ体操」（総合 後 10:55～11:00）を見た。肩の力を抜いて、寝たままでもできる体操を紹介していてとてもよかった。ゲストの阿佐ヶ谷姉妹のゆったりしたトークも絶妙で、非常に癒やされた。

（ＮＨＫ側）

１日使った体の筋肉を緩め、リラックスし、よい眠りに導くことを狙っている。阿佐ヶ谷姉妹の対話のリズムも相乗効果があった。

○　７月１８日(月)の３分ドキュメンタリー「名作を３分で！アントニオ猪木、ミアタリ、他」（総合 後 6:05～6:43）を見た。過去の名作ドキュメンタリー４編と新作１編を取り上げ、スタジオゲストとのトークも交え、３分でそれぞれのエッセンスを紹介する番組だった。ＮＨＫのドキュメンタリーはどれもすばらしいが、すべての番組を全編視聴するのは大変なので、短時間でエッセンスを紹介することは有用だと思った。この番組で紹介していたＮＨＫ特集「鶴になった男～釧路湿原・タンチョウふれあい日記～」に登場した飼育係はその後どうしているのか、ノーナレ「ミアタリ」では指名手配犯の顔写真をにらんで捜査する捜査官を紹介していたが、現在のＡＩ顔認証技術と比較するとどのような差があるのかなど気になった。紹介されたドキュメンタリーのうち全編を視聴したくなったら「ＮＨＫプラス」で視聴できるサービスはよいアイデアだと思った。「ＮＨＫプラス」や「ＮＨＫオンデマンド」では、見たい、見せたい番組にどう導くかが課題だが、この番組のように「ちょい見せ」をすることが、自然と「ＮＨＫプラス」や「ＮＨＫオンデマンド」にいざなう入り口になるのではないかと思った。

○　７月２０日(水)のクローズアップ現代「徹底検証・新型コロナ“第７波”」を見た。スタジオを会議室に見立て、換気の入り口と出口を作る、会話は風下で、パーティションは空気の流れと並行して置くなど、最新の知見に基づいた具体的な対策を紹介していてとても参考になった。これからも最新の新型コロナウイルス対策を積極的に紹介していってほしい。多くの人が集まるエンターテインメントの世界で気をつけるべき新型コロナウイルス対策も具体的に知りたいと思った。

○　「笑わない数学」を見ている。深く難しい数学の問題を分かりやすく説明していると感じた。ＭＣのパンサー尾形さんがおそらく内容を理解できていないであろう台本を真剣に読む姿が番組の魅力の一つだと理解しているが、繰り返し見るとそのシュールさに慣れてしまい、あまり集中して見ることができなくなった。番組を長く続けるのであれば、多様な演出を検討したほうがよいと思う。

○　「笑わない数学」を見ている。最近はノウハウが蓄積されたのか、難解な数学を分かりやすく取り上げる番組が増えていると感じている。数学を積極的に取り上げることはよいことだと思う。ＭＣのパンサー尾形さんには、普段と違う魅力が出ている一方、同じ演出が続くと視聴者があざとさを感じてしまう懸念もある。

○　連続テレビ小説「ちむどんどん」を見ている。今年は沖縄本土復帰５０周年の節目の年なので、奮起を促したい。

○　６月２８日(火)のＮＨＫアカデミア「村山斉（宇宙物理学者)」を見た。宇宙物理学者の村山斉さんが宇宙の謎を解き明かす数学や数式の魅力を、自身の経験をもとに分かりやすく語っていた。「自分の思うように行かないときもあるが、決して振り返らずに前に向かって進んでほしい」という人生の指針になるようなメッセージもあってすばらしい番組だった。

○　６月２８日(火)のＮＨＫアカデミア「村山斉（宇宙物理学者)」を見た。若い世代に科学の魅力を伝えるという意味でも、このような番組を今後も制作してほしい。

○　７月１２日(火)のハートネットＴＶ「戦争が聴こえる」を見た。太平洋戦争における勤労動員の話は知っていたが、目の見えない視覚障害者までもが、戦意高揚、軍事動員に利用されていた事実に驚いた。健常者より聴覚がいいことを生かし、敵機の音を聞いて機種や高度をいち早く伝える聴音兵として防空監視にあたっていたことなど、初めて知ることばかりだった。若いディレクターが１年以上かけ、当時を知る盲学校の元生徒や、その子孫を訪ねて証言を積み重ねていった。戦争を知らない世代の視聴者に、戦争を身近なものに感じてもらううえで、効果的な手法だったと思う。

○　７月２３日(土)のモンモンＺ「伊沢さん、自分の好きなもの自信を持って好きって言えますか？」（Ｅテレ 後 10:30～10:59）を見た。Ｚ世代が悩みを打ち明ける番組だったが、番組では悩みを打ち明ける人が顔を明かして出演していた。Ｚ世代は動画共有サイトの投げ銭機能を利用して顔を出さずに悩み相談をしていたりするので、顔を出しての相談に違和感を覚えた。また、悩みを打ち明けた人に対し、決めつけるような強めのことばでアドバイスしていたのが、個人攻撃のように見えてしまい、見ていて苦しくなった。

○　７月２日(土)の伝説のコンサート　オフコース「１９８２．６．３０日本武道館」（ＢＳプレミアム 後 9:00～10:40）を見た。1981 年に放送した「若い広場～オフコースの世界」も併せて再放送していて、ファンにとっては感激で涙するほどの編成だった。一方で、見る人を選ぶマニアックなコンテンツとも言えると思うので、放送ではさわりだけ見せて、詳しい中身はネットで展開するという方法もあるのではないかと思った。

（ＮＨＫ側）

前回の番組審議会でアナウンサーのネット発信について意

見を頂いたので、それに関連する取り組みを紹介する。アナウンサーが高校に行って話し方を講義したり、各地域で防災、避難の呼びかけ方について講習したりすることに取り組んでいるが、このような活動の模様を、今月からＮＨＫオンラインの「ＮＨＫラーニング」サイトに、記事や写真を添えて公開することを始めた。今後もアナウンサーの思いやアナウンサーが日ごろどういう活動をしているのかネットを通じて発信していきたい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２２年６月ＮＨＫ中央放送番組審議会

６月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、２０日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、趣味・実用ジャンルの番組について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　　員	秋田　正紀	（株式会社松屋代表取締役社長執行役員）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	木村たま代	（主婦連合会事務局長）
	栗原　　友	（料理家）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	萩原　智子	（日本水泳連盟理事／シドニー五輪競泳日本代表）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜趣味・実用ジャンルの番組について＞

○　「趣味の園芸　やさいの時間」は、畑とプランターそれぞれで野菜を栽培する例を紹介していてとてもよい。庭や畑のない視聴者にも参考になる内容になっていて、誰でも楽しむことができる。出演者も一生懸命でよいと思う。「趣味の園芸」はナビゲーターが替わり、女性を中心により幅広い視聴者に向けた内容になったのがすばらしいと感じている。

○　「１００分ｄｅ名著」は司会の伊集院光さんの柔らかな雰囲気と明快な解説がすばらしい。難解な作品も取り上げられているが、丁寧に分かりやすく読み解いている。朗読も多様なゲストが行っていて、それぞれの作品に味わいをもたらしている。１冊の名著を２５分×４回で伝えているのも適切だと思う。解説者として専門家が出演しているが、たまに解説の内容が難しいことがある。司会者がかみ砕いて伝え、フォローする場面もあるが、誰にでも理解できるように伝えることを心がけてほしい。

○　「趣味・実用ジャンル」について改めて調べてみるとさまざまな切り口の番組を放送していると感じている。サービスを展開するうえでの課題は、改めて調べるまでさまざまな番組があることが視聴者に伝わっていないことだろう。良質な番組を数多く制作したとしても、それを多くの人に知ってもらえなければ意味がない。このことをしっかりと意識して、若い世代にも受け入れられるＮＨＫになってほしいと思う。趣味・実用ジャンルの番組のテーマとなる“ハウツー”は、動画投稿サイトでも最も視聴され、検索されているジャンルの一つだ。デジタル技術を活用した多くのソーシャルメディアの動向は、ＮＨＫの趣味・実用番組の認知度アップや視聴者拡大に参考になるのではないか。見逃し配信だけでなく、放送後のフォローアップとして講師との交流をオンラインで行うなど、次回の放送に視聴者が帰ってきたくなるような広報活動が効果的だと思う。趣味・実用番組は主にＥテレで放送していると思うが、ＮＨＫはＹｏｕＴｕｂｅに国内放送コンテンツを主軸としたチャンネルは一つしか持っていない。デジタルが生活の多くを占めるようになった昨今の視聴者は、自分のためのチャンネルや動画を探しているので、ＮＨＫはその声にもっと応えてほしい。コンテンツは良質なので、多くの人たちが簡単にアクセスできる環境を整えることが重要だ。

（ＮＨＫ側）

動画投稿サイトの活用についてだが、ＮＨＫの公式チャンネル以外にも「ＮＨＫ　ＷＯＲＬＤ―ＪＡＰＡＮ」のほか、若い世代を意識した「ＮＡＢＥ」というチャンネルを試行的に開設している。公式チャンネルではさまざまな動画を掲載していて、番組ごとのチャンネルは開設していない。頂いた意見を参考に、ＮＨＫのコンテンツを視聴者にしっかりと届けることを意識して、外部プラットフォームの活用のしかたを考えていきたい。

○　以前、百貨店などを会場に「ＮＨＫ趣味の園芸フェスティバル」や「ＮＨＫ婦人百科手芸フェスティバル」などのイベントが開催されていた。どちらも１週間で５

万人以上の来場者があるイベントで、インターネットが普及する前には視聴者との貴重なタッチポイントだった。オンラインで番組の講師と双方向の交流の場が持てるとよいと思う。「趣味どきっ！」でアーバンスポーツなどの若い世代に向けたテーマを特集するのはよいが、趣味についてはあらゆる世代の人たちが動画投稿サイトなどで自発的に調べるので、よほど特徴のある内容でないとあまり見てもらえないと思う。例えば、「趣味の園芸」では、バラや洋ランなど栽培にのめり込む人が多くいる植物については季節ごとに特集するなど、コアなファンに訴求する番組作りをしてもよいと思う。

○　ＮＨＫに限らず、趣味に関連した番組をテレビで見ようという意識がそもそもなく、スキンケアやメーク、筋トレなどを扱ったインターネット上の動画コンテンツを、自分の見たいタイミングで動画投稿サイトなどを通して見ている。ＳＮＳで情報が流れてくることが、それらのコンテンツを見ようと思うきっかけになっている。若い世代に向けた番組を作るのであれば、ＳＮＳなどの広報戦略とセットで考える必要があると思う。ただ、ＮＨＫがスキンケアの番組を制作したとして、見るかと考えると、おそらく見ない。趣味を広げたいという思いはあるが、その視点でＮＨＫの趣味・実用ジャンルの番組を考えると俳句や将棋などカテゴリーがしっかりしていて、興味が無いとなかなか見ない番組が多いと感じた。短歌など、日本の文化に触れられることに関心がないこともないが、いざ番組を見るかといえばハードルがある。その意味では、気軽に見てみようと思える敷居の低い番組があるとよい。民放に「プレバト！！」という番組があるが、俳句に興味がなくてもおもしろく見ることができ、俳句について学ぶこともできる。ＳＮＳでも話題になっていて、若い世代にも訴求している。俳句だけを扱う番組はなかなか見ないが、バラエティー番組などで趣味に関するテーマを扱うことで、さまざまな人に届けることができるのではないか。

○　ＮＨＫの趣味・実用ジャンルの番組は以前からよく見ている。今は動画が全盛の時代になったが、かつては映像で手芸を教えてもらえるのは画期的だった。この時代に、インターネットにあふれている動画とどのように差別化するのかは難しい問題だが、「すてきにハンドメイド」は楽しみにしている人が多いと感じている。「趣味どきっ！」は曜日ごとに同時期に３つのテーマを放送しているが、３つあると少なくとも一つは関心のあるテーマがあるのでよい編成だと思う。この番組のテーマをどのように選んでいるのか興味がある。「趣味どきっ！」は、趣味の入り口の役割も果たしているが、深く知りたいと思ったときにより踏み込んだ内容の番組があるとよいと思う。囲碁や将棋は詳しくないものの、家族が見ていることもあり親しみがある。さまざまな形で趣味を扱う番組は続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

「趣味どきっ！」で扱うテーマは、制作チームが時間をかけて議論を重ねたうえで決めている。さまざまな趣味がある中で、どのようなジャンルに関心が高まっているかなども調べて参考にしている。趣味・実用番組はテキストとも連動しており、その点も踏まえて総合的に決めている。

○　次のようなテーマで番組を作ったらおもしろいと考えている。たとえば、「ウーマペディア」と題し、女性の偉人たちを紹介するのはどうか。女性の偉人を知ってもらい、視聴者に自分にとってのロールモデルを見つけてもらうことは意義があると考えている。また、若者向けに日本の伝統文化を紹介するような番組もよいと思う。「エンタディショナル教室」と題し、茶道や歌舞伎、和歌や浮世絵など、日本の伝統文化を理解するきっかけになるような番組が必要なのではないか。「１００分ｄｅ名著」の「百人一首」のシリーズはとてもよかった。「漫画家イエナガの複雑社会を超定義」のように、アニメ、イラスト、テロップを多用して情報を詰め込み、スピーディーに展開して若者を飽きさせないことが重要だ。動画配信サイトなどで番組の一部を配信し、「続きはＮＨＫプラスでご覧になれます」というようなＰＲも効果的だと思う。このほか、「みんなのモーニングルーティン」というような企画はどうだろうか。動画投稿サイトなどでは、日常生活の一部を公開するコンテンツに人気がある。ある人の生活や価値観が分かるのがそうした動画の魅力だと考えている。多様な人たちのさまざまな朝の過ごし方を伝えてみると視聴者の共感を得られるし、おもしろいのではないか。

○　ＮＨＫの番組を長い間にわたって見ているが、「きょうの料理」のような料理専門番組ではなく、料理を取り入れたエンターテインメント番組では、ややレシピなどの詰めが甘いと感じることがあった。

○　「みんなで筋肉体操」を見ているが、この番組のように、ユーモアを取り入れた趣味の番組はとてもよいと感じている。くだけた雰囲気でクスッと笑える一方で、トレーニングの内容は大真面目というギャップがおもしろく、大ファンだ。

○　「ヒャダ×体育のワンルーム☆ミュージック」を見ている。音楽制作にはこれまであまり関心がなかったが、司会のヒャダインさんと岡崎体育さんがゲストのミュージシャンと即興で楽しそうに音楽を作っていて、引き込まれた。このような雰囲気のよい番組を制作していることがすばらしい。

（ＮＨＫ側）

「みんなで筋肉体操」は好評の声が多く、「ＮＨＫニュースおはよう日本」の月曜日７時台にも「おはＳＰＯ×筋肉体操」というコーナーを設けている。

○　「テレビ体操」を見ている。この番組を見ながら体操をしている人は多く、高齢層を中心にさまざまな視聴者がいるだろう。一方で、出演者は元気のある比較的若い人ばかりのようだ。立ち上がることが難しい人に向けて、いすに座ったままで体操をしている場面もあるが、高齢者や障害のある人など、もう少し多様な出演者がいてもよいと思う。趣味・実用ジャンルの番組は、リアルタイムで見ている人は比較的少ないと思われるので、見たい番組を検索し見られるようにすることが、今の時代に合ったサービスだと思う。

○　ＳＮＳを頻繁に利用しているが、最近はＮＨＫの記者がＳＮＳでの発信に力を入れていると感じている。一方で、アナウンサーの情報発信は少ないのではないか。番組で目にする機会の多いアナウンサーが発信をすることで、多くの人が関心を持ち、若い世代の視聴者もＮＨＫのコンテンツに触れるきっかけになると思う。アナウンス室のＳＮＳアカウントはあると思うが、個別のアカウントがあるとよい。ＮＨＫにはアナウンサーが数多くいるので、例えば、美しい話し方や日本語、発音方法などの技術を、ＳＮＳなどを通して伝えてほしいと思う。

○　ｉＤｅＣｏやＮＩＳＡなどが話題になっているが、身近にはこのような制度を利用したり、資産運用をしたりしている人は少ないと感じている。自分で調べるのが難しかったり、資産運用になじみがないことなどが理由に挙げられる。金融リテラシーを高めるような情報も伝えてくれるとありがたい。また、子どもがあるテーマについて疑問に思った際に、関連する書籍を専門家やアナウンサーが紹介するインターネットサービスなどがあるとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

「テレビ体操」について、頂いた意見は今後の番組制作に生かしていきたい。

インターネットやＳＮＳでの記者やアナウンサーの発信を強化している。「ＮＨＫ　ＮＥＷＳ　ＷＥＢ」では、「ＮＨＫニュース　おはよう日本」でスポーツを担当している堀菜保子アナウンサーがデフリンピックについてリポートした際、

ＳＮＳでも紹介記事を掲載した。引き続きしっかりと取り組んでいきたい。

○　趣味・実用ジャンルとして扱われる番組が意外と限られていると感じた。例えば「きょうの料理」はこのジャンルの番組ではないのだろうか。「趣味の園芸」を親子で毎週見ているが、さまざまな世代が楽しめる番組づくりをしていると思う。

○　ほかの委員から指摘のあった女性のロールモデルについてだが、日本は欧米と比較して活躍している女性に注目する報道が少ないと感じている。女性に限らずだが、社会を変革しようと努力している人たちに焦点を当てるような報道や番組を期待したい。

○　語学番組をよく見ているが、このジャンルの番組ではないようだ。短歌や俳句はあるが、美術や音楽はないなど、趣味・実用ジャンルの番組の範囲がどこまでなのかがよく分からない。趣味については、欲したときに必要な情報を得られることが重要だろう。その意味では、ＮＨＫオンデマンドやそのほかのネット動画など、情報を自分で取りにいくスタイルのコンテンツが適していると感じている。また、短歌や俳句だけに特化した番組だけではなく、それぞれの趣味を別の趣味やエンターテインメントと結びつけるような切り口の番組を制作してもよいと思う。

○　ＮＨＫ杯将棋トーナメントなど、将棋番組をときどき見ている。かつては民放でも早指しの将棋トーナメントを放送していたが、現在は地上波で唯一の将棋番組となっていてとても貴重だと感じている。有名な棋士たちが必死に考えている姿をスポーツに近い感覚で楽しんでいるので、今後も続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

１３の番組を趣味・実用ジャンルとして位置づけているが、どれもＥテレで長い間にわたり放送してきた番組だ。“ジャンル”はある意味便宜的に決めているもので、料理やスポーツ、歴史なども趣味に含まれることもあるだろう。趣味は日常生活と密接に関わっているので、多くの番組が連携し、さまざまな趣味の魅力を感じてもらうことが重要だと考えている。将棋などでは特集番組を制作するなどの取り組みを始めているので期待してほしい。また、これまでに放送した番組を活用したデジタル展開なども重要になると考えている。今回頂いた意見や提言は今後の取り組みに生かしていきたい。

○　ＮＨＫオンデマンドが趣味・実用ジャンルの番組と相性がよいという意見があったが、このような番組はサンプル的に無料で公開するものがあってもよいと思う。

（ＮＨＫ側）

これまで、趣味・実用ジャンルの番組はＤＶＤやテキストなどで展開してきた。一方で、見たいときにいつでも見ることができるコンテンツが求められる時代であるので、そのようなニーズにどのように応えていくのかが、今後の課題だと考えている。

○　楽しいと感じたり、おもしろさや美しさを感じたりするものが趣味であると考えている。自己紹介などでもよく話題に上るが、趣味があると会話の助けや仲間づくりにもつながる。ＮＨＫが長年続けてきた趣味を後押しするような取り組みは今後も継続してほしい。また、週末農業について特集してもおもしろいのではないか。農作業をしていると思考の幅も広がるし、環境や地域に対する思い入れも育まれると感じている。畑を借りる方法や農業ボランティアについてなど、これから農業を始めたい人に向けた指南書となる番組があってもよいのではないか。

＜放送番組一般について＞

○　５月２０日(金)の首都圏ネットワーク「小麦粉値上げの中…人気！家庭でも簡単“生米パン”」を見た。生米からパンやお菓子を作る料理家が、「米の消費が減って生産者が困っている。米をずっと作り続けてもらいたくて、おいしく食べる工夫をしている」とコメントしていた。この企画は食料安全保障を身近な問題として意識してもらうためのメッセージとして意義深いものであったと思う。

○　５月２８日（土）に再放送されたＮＨＫスペシャル「揺れる大国　プーチンのロシア（１）、（２）」（総合前 1:55～3:32）と２９日（日）に再放送された「揺れる大国　プーチンのロシア（３）、（４）」（総合 前 2:32～4:09）を見た。2009 年に放送された番組の再放送で、オリガルヒ、ロシア正教、ジョージア侵攻、軍事教育を取り上げていた。現在のウクライナの状況を１３年前にＮＨＫが警告していた内容ですばらしかった。このタイミングで再放送したことはとても意義がある。このような良質なドキュメンタリーを制作し続け、時代の節目で再放送をするという取り組みを今後も続けてほしい。

（ＮＨＫ側）

2009 年に制作、放送した番組だ。もともとは４９分番組で４回シリーズだったが、現在では放送できない映像が多くあり、若干短縮して放送した。ウクライナ侵攻という現在の情勢を踏まえ、再放送する必要があると考えた。放送だけでなく、ＮＨＫオンデマンドでも多くの方に見ていただくことができた。

○　６月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「夢見た国で～技能実習生が見たニッポン～」を見た。過酷な労働環境に加え、賃金の未払い、ヤミ金融による搾取など、信じがたいような環境に追い込まれている技能実習生のリアルな実態を伝えていた。３年半にわたる丁寧な取材で、なぜこのような状況が起きているかという制度の問題に踏み込み、関係者の見解も交えて伝えていた。心が痛むシーンも多く、状況が変わってほしいと感じた。行政の担当者にもこの番組を見てほしいと感じた。「ＮＨＫスペシャル」は毎回すばらしく、課題意識を持たせる番組だと思う。今後もこれまであまり光が当たっていなかった課題について掘り下げて伝えてほしい。

○　６月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「夢見た国で～技能実習生が見たニッポン～」を見た。３年半という長い時間をかけ、じっくりと取材したＮＨＫならではの番組だと思う。私たちがふだん、あまり意識していない社会問題を鋭く提示することはＮＨＫの重要な使命の一つだ。このような番組を通して、１人でも多くの国民が実態を知ることで、状況が少しでも改善に向かってくれればと感じた。

○　６月１２日(日)のＮＨＫスペシャル「夢見た国で～技能実習生が見たニッポン～」を見た。技能実習制度は５年ごとに見直されることになっており、今年がその年だ。この問題については今後も多角的に取り上げてほしい。

（ＮＨＫ側）

３年半ほど前から担当のディレクターがずっと粘り強く取材を重ねてきた。これまでも「ＥＴＶ特集」などで放送し、今回は「ＮＨＫスペシャル」で伝えた。技能実習生の制度はコロナ禍前からさまざまな問題があると指摘されていたが、コロナ禍になってからはより一層問題が深刻になり、実態が見えづらくなっている。社会が少しでもよい方向になるための一助になればという思いで制作した番組だ。

○　６月１８日(土)のＮＨＫスペシャル「なぜ一線を越えるのか　無差別巻き込み事件の深層」を見た。今年１月に東京の焼肉店で立てこもり事件を起こした犯人を、粘り強く取材していた。犯人は死にたいが１人で死にきれずに他者を巻き込み、それが無差別殺人へとつながったとのことだった。ふとしたきっかけで事件が起きてしまうということで、考えさせられた。今はコミュニケーションが取りにくい時代だが、他者とのつながりを大切にしなければならないと感じた。去年８月の小田急線車内の切りつけ事件も紹介されていたが、これを遺族が見ていたらと思うと複雑な気持ちになった。重要な問題提起をした意義のある番組だった。

（ＮＨＫ側）

驚くほどちょっとしたきっかけで事件が起きてしまうことを、取材した担当者も実感したと聞いている。このような事件は全国的に起きているので、地域局とも連携して取材した。被害者の人たちの感情は最も配慮すべきことで、慎重に制作にあたった。

○　５月２０日(金)の「チコちゃんに叱られる！」を見た。ＳＮＳなどでも話題になっていたが、「フォークの歯はなぜ４本？」のコーナーに出演したマナー講師のことば遣いが気になった。演出だったのかもしれないが、相手をののしるような物言いで、敏感に反応する人もいると思う。「チコちゃんに叱られる！」はいろいろな世代の人が視聴しているので、演出は改めて検討してほしい。

（ＮＨＫ側）

視聴者に不快な思いをさせてしまったことは重く受け止めている。今後このようなことがないよう、制作現場全体で勉強会をするなどしっかりと考えていきたい。

○　「ＮＨＫニュース　おはよう日本」の「おはＳＰＯ×筋肉体操」のコーナーを見ている。６月のゲストはパラ水泳選手の木村敬一さんで、「パラ競泳世界選手権２０２２」のタイミングと合わせたよい取り組みだと感じた。引き続き健常者も障害者も分け隔てなく紹介してほしい。「サンデースポーツ」に出演しているパラ陸上選手の谷真海さんなど、パラリンピアンが番組のゲストやナビゲーターとして活躍していることはすばらしく、東京２０２０パラリンピックの一つのレガシーでもあると思う。パラリンピックのリポーターだった後藤佑季アナウンサーが大阪局に配属されたが、能力のある人がしっかりと活躍できる機会をこれからも作ってほしい

と思う。

（ＮＨＫ側）

東京２０２０パラリンピックのリポーターを務めていた後藤さんがＮＨＫのアナウンサーとなった。頂いた意見を参考に、東京大会のレガシーをパリ大会につなげていきたいと思う。

○　６月１２日(日)の「どーも、ＮＨＫ」を見た。今年入局した新人アナウンサー１１人を紹介していた。大阪局に配属された後藤佑季アナウンサーは小さいころから先天性の聴覚障害で、現在も人工内耳を使いながら生活している。彼女の個性が生きるような活躍を期待している。

（ＮＨＫ側）

聴覚障害のある後藤佑季アナウンサーに仲間に加わってもらった。地域局では、アナウンサーも取材や提案をする機会がより多い。後藤アナウンサーもラジオのリポート制作から始めている。個々のアナウンサーが発信力を高められるようにしていければと考えている。

○　６月１４日(火)の１００カメ「鎌倉殿の１３人」を見た。６月１２日(日)に放送された大河ドラマ「鎌倉殿の１３人」の中の巻狩のシーンのロケに、準備段階から密着して伝えていた。改めてドラマづくりの大変さやスタッフがプロの仕事をしていることがよく伝わってきた。コロナ禍の厳しい環境下でもさまざまな工夫をして良質なドラマを制作し続けていることに感動した。引き続き「鎌倉殿の１３人」に期待している。

○　６月１４日(火)の１００カメ「鎌倉殿の１３人」を見た。大河ドラマには想像を超える多くの人が関わっていて、手間と時間をかけて制作されていることがよく分かり感銘を受けた。ふだんいろいろな番組を見ていても、その背後にどれほどの労力や時間がかかっているかについてはなかなか想像の及ばないところがある。このように番組の裏側を見る機会があると、質のよい番組を作るために相応の原資が必要であることに多くの人が気づくのではないか。この番組にはそれほど説得力があった。「鎌倉殿の１３人」のホームページを見ているが、略年譜をクリックすると「ネタバレ注意」と出るが、歴史年表のことをネタバレというのには違和感がある。

（ＮＨＫ側）

「鎌倉殿の１３人」の舞台裏を「１００カメ」で取り上げた。今回のように番組制作の舞台裏を紹介する番組は、関係者の理解が得られたときに可能な範囲で制作している。俳優やスタッフの中には作り手としての苦労を視聴者に感じさせないことを大事にしている人もいる。そのようなことも踏まえて取り組んでいきたい。「鎌倉殿の１３人」のホームページについての指摘だが、歴史年表は公知の事実なので隠す必要がないものだということは理解している。一方で、歴史とは関係なく、単純にドラマとして楽しんでいる視聴者もいる。そうした視聴者には先の展開を知りたくないという意見も多いので、しっかりとバランスをとっていきたい。

○　６月１５日(水)のクローズアップ現代「崖っぷち！？“投票率”は上がるのか」を見た。参議院選挙は盛り上がりに欠けてしまいがちだが、比例代表では候補者の個人名を投票できるなど衆議院選挙とは異なるユニークなルールがあり興味深い。投票に行きましょうということだけでなく、投票を一つのゲームとして捉え、意外とおもしろいルールがあると伝えると、多くの人が興味を持ち、投票率アップにつながるのではないか。

（ＮＨＫ側）

参議院選挙の特設サイト上で参議院選挙の仕組みを紹介している。参議院選挙に関心を持ってもらうためにも、指摘のような点についてもしっかりと伝えていきたい。

○　６月１５日(水)のクローズアップ現代「崖っぷち！？“投票率”は上がるのか」を見た。投票率の低さが際立つ若い世代に焦点を当て、独自のアンケートを行って本音を探っていた。投票率が全国よりも１０ポイント程度も高い町では、少年議会が作られ、少年の議長がいることが紹介されていた。全国で行われているさまざまな取り組みを、参議院選挙の前に改めて紹介することはとてもよいと感じた。ただ、ゲストで俳優の鈴木福さんに、司会者が子どもに対してするような質問のしかたをしていたのは失礼に感じた。投票率が下がると若年層としての損失があると伝えていたが、特定の年層への影響だけではなく、社会全体での損失も考えるほうが適切だと思うので、違和感を覚えた。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫとして少しでも投票率アップに貢献できればと考えて制作した番組だ。鈴木福さんは「ガチポリ！若者×政治１０ｍｉｎ.」という番組に出演してもらい、評判がよかったこともあって、この番組にも出演いただいた。司会者のことば遣いについては、もちろん本人にそのような意図はなかったと思うが、頂いた指摘は現場にも伝えたい。

○　６月１６日(木)の１ミリ革命「投票率　１ミリアップ作戦！」（総合 後 7:57～8:42）を見た。選挙の投票率を上げるにはどうしたらよいかをテーマに、多様なゲストを迎えて考えるというコンセプトがとてもよかった。一方で、ＶＴＲのテンションの高さとスタジオの雰囲気が合っていないと感じた。白色の字幕がとても小さく、見にくいこともったいないと感じた。また、出演者の革命アイデアしか取り上げないと、視聴者が置いてきぼりになってしまう懸念があるので、例えば前編と後編という形にし、後編では視聴者の柔軟なアイデアを募集し、それを実践するような流れを作るとより深みが出るのではないか。

○　「漫画家イエナガの複雑社会を超定義」を見ている。新しいサービスや社会情勢を１５分でテンポよく解説していて、とても役に立つ。スマートな印象の俳優・町田啓太さんが、くだけた雰囲気で出演しているのも親近感があってよい。とてもチャレンジングな番組で評価している。

（ＮＨＫ側）

「漫画家イエナガの複雑社会を超定義」については、前回の番組審議会で番組のＳＮＳ展開やインターネットでの動画展開の課題について意見を頂いたが、各回４分強の動画を動画投稿サイトで公開したり、番組のインスタグラムを開設してほぼ毎日投稿を続けたりしている。インスタグラムでは、数枚の静止画で番組の概要を復習できるような投稿も行うなど、先月頂いた意見も踏まえ、さまざまなデジタル展開に取り組んでいる。

○　ウクライナ情勢に関する一連のニュースを見ている。中東、アフリカなどでの食料危機問題や、食料安全保障に関する報道に注目している。日本の食卓への影響について、価格に関しては頻繁に取り上げられているが、食料の「量」の確保の重要性についてはあまり報道されていないと思う。いたずらに不安をあおることは慎む

べきだが、もう少し食料安全保障の重要性を訴える番組が必要ではないか。日本の食料、農業に関する課題、食料安定供給に対するリスクの高まりについて継続的に発信をしてほしい。

（ＮＨＫ側）

中東やアフリカの状況については、食料危機で飢餓の危険があるという形で取り上げた。日本についてそこまでの切迫感を持って伝えていないという指摘を踏まえ、食料安全保障の問題や農業の課題について掘り下げて伝えていきたい。

○　「キャッチ！世界のトップニュース」を見ている。日本の国内でのニュースの伝え方とそれぞれの国が伝えるニュースの視点は全く異なるので勉強になる。同時通訳もとても聞きやすく、よい番組だ。今後はより多くの国のニュースを紹介してほしい。

（ＮＨＫ側）

この番組は、ＢＳ１で午前８時から放送しているが、ウクライナ侵攻が起こり、ウクライナ情勢も含めて世界のニュースをより多くの人に見てもらいたいということで、総合テレビでも午前１０時５分から放送している。この番組では、ウクライナ公共放送のニュースも取り上げている。総合テレビでも放送するようになったことで初めてこの番組の存在を知った視聴者も多くいるので、引き続き多くの人にこの番組の意義を伝えていければと考えている。頂いた指摘については、現場とも共有したい。

○　「筋肉アワー」を見た。「みんなで筋肉体操」でおなじみの筋生理学者の谷本道哉さんとトップアスリートが筋肉について語り合う５分番組だ。リラックスして見ることができ、ユーモアもあるよい番組だと感じている。対談場所の設定もユニークで、谷本さんの語り口もすばらしいと思う。アスリートや舞踊家の鍛え抜かれた肉体から特に特徴のある部位を選んで、分かりやすくその働きを解説していることもよい。加齢による衰え防止のために筋肉強化を考えている中高年の視点を取り入れてもよいと感じた。筋肉の部位を紹介するシーンでは、正確な解剖図を示したほうが分かりやすいと思う。

（ＮＨＫ側）

谷本さんとトップアスリートの対話が興味深く、好評を得ている。頂いた意見は今後の番組制作に生かしていきたい。

○　「義経のスマホ」を見た。「〇〇のスマホ」シリーズは毎回楽しんでいたが、「義経のスマホ」はシリーズの中で一番おもしろかった。バーチャルユーチューバーなど最新の話題をふんだんに盛り込んでおり、ツイッターと連動している点もよかった。ただ、画面の文字が小さすぎるので、もう少し工夫したほうがよいと思う。また、牛若丸として映っていた指にささくれがあり、どうしても少年の指には見えず気になった。

○　「星新一の不思議な不思議な短編ドラマ」を見ている。１５分で１話完結なのがとてもよく、隙間時間に見ることができる。このほかにも短編小説は数多くあるので、このようなドラマを今後も続けてほしい。

○　６月４日(土)の「ワルイコあつまれ」を見た。「昭和歌謡合唱団」のコーナーでは、歌は歌詞の意味をよく理解したほうがうまく歌えるとして、ゲストの湯川れい子さんが作詞した「恋におちて-Ｆａｌｌ　ｉｎ　ｌｏｖｅ-」を歌詞の意味を説明したうえで、少年少女たちに歌ってもらっていた。子どもたちは一生懸命に取り組んでいたが、不倫の歌と言われている「恋におちて」を子どもたちに歌ってもらうことに違和感を覚えた。翌週の番組も見たが、全体的につまらないギャグや踊りが多く、正直なところ最後まで見ているのがつらかった。元ＳＭＡＰの３人が出ているので人気はあるのかもしれないが、「ＮＧだらけの時代をポジティブに生き抜くための学びの時間になってほしい」という番組のコンセプトが伝わってこなかった。小さな子どもと一緒に見れば感じ方も違うのかもしれないが、この３人の人気だけに頼らない番組にしてほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

大人も子どもも楽しめる、新しい時代の教養バラエティー番組を目指し、この４月から定時で放送している。頂いた指摘を現場とも共有し、楽しく見ていただける番組になるよう取り組んでいきたい。

○　６月１１日(土)に再放送された令和ネット論（１）「ＮＦＴ＆メタバース」（Ｅテレ 後 9:30～10:00)を見た。あまりなじみがなかったＮＦＴ(非代替性トークン)とメタバースということばを紹介していた。最新のテーマについて分かりやすく解説

する番組で、これからの時代を理解する意味でも見続けたいと感じた。

（ＮＨＫ側）

趣味・実用ジャンルの番組を今後どのように展開していくかということを意識し、トライアルの意味合いも含めて制作している番組だ。番組をきっかけにして、視聴者とのタッチポイントを創出できればと考えている。

○　「ＮＨＫ杯テレビ将棋トーナメント」を見ている。６月１９日(日)の阿久津主税八段と佐々木大地七段の対局はとても勉強になった。今後も将棋番組を続けてほしい。

○　「新・にっぽんの芸能」を見ている。４月に、これまでの５４分番組から３５分番組に刷新された。若い世代にも見てもらうためにリニューアルをしたのだと思うが、民放のトーク番組のようになってきており、以前からこの番組を楽しんできた人からするともの足りなく感じる面もある。３５分という時間でトークや解説に時間を割くと、肝心の芸を見せる場面が短くなってしまう。日本の伝統芸能を毎週じっくりと楽しませてくれるのは、この番組だけだ。試行錯誤しながら番組を制作していると思うが、日本の伝統芸能を楽しく見られるような番組になるとよいと思う。この番組を若い世代に向けて発信したいのであれば、ＳＮＳは欠かせないと思う。若い人たちが日本の伝統芸能に興味を持つきっかけになるようなデジタル展開を期待したい。

（ＮＨＫ側）

今年度から３５分番組にリニューアルした。これまでにない多彩な切り口で古典芸能初心者の方にも楽しんでいただけるように工夫している。トーク部分が少し多いのではないかと指摘があったが、６月１７日(金)の「踊りの魂を伝える　尾上松緑・左近“連獅子”」は、トーク部分は最小限にして、本編をたっぷりと伝えた。若い世代に見てもらうためのＳＮＳの活用については、関係部署と協力して取り組んでいきたい。

○　５月１９日(木)のいいいじゅー！！「和歌山・田辺市」を見た。全員が移住者のサッカークラブが、農業を初め多様な形で地域とかかわっている姿が映し出されていた。今後もさまざまな事例を取り上げ、移住する側と受け入れる側、双方の役立つような番組を制作してほしい。

（ＮＨＫ側）

先月の審議会で、報道の自由度に関するニュースについて意見をいただいた。国境なき記者団の報告書をもとにしたニュースで、日本政府ということばが出てこないことについて指摘いただいたものだ。この報告書は地域と国別の概況などに分かれている。ＮＨＫでは日本をはじめ、注目すべき国に対する分析や世界的な傾向や潮流を紹介するため、この報告書のうちアジア太平洋地域の概況や国際社会全体の説明を参考に原稿を書いた。改めて確認したところ、報告書のうち日本に関する国別概況では指摘のように日本政府についての言及があったが、アジア太平洋地域に関する概況では、強まる大企業の影響がメディアに自己規制を促している例として日本と並んで韓国やオーストラリアが挙げられていた。これをもとに、ニュースではこれら３か国のメディアの共通の特徴として大企業の影響があるという分析を紹介した。

○　５月３０日(月)のクローズアップ現代「から揚げ店“急増”の秘密～令和の食と幸福論～」を見た。この１０年で１０倍規模までから揚げ店の店舗が急増している背景をわかりやすく伝えていた。から揚げ店の急増を肯定的に捉えた構成だったが、から揚げ需要が高まっていることは食生活向上においては懸念される事象だと思う。健康寿命の延伸に貢献する取り組みがこれからますます重要になるので、情報番組などで取り上げてほしい。

○　６月６日(月)のドキュメント２０ｍｉｎ.「チルアウトふるさと」を見た。全国の若手制作者が温めてきた数々の企画が、全国放送に採用されるという新たな取り組みということで視聴した。音楽や映像が斬新だと感じたが、その土地の人に興味を持ち、人柄に焦点を当てているからこその演出だったと思う。若手のアイデアをプロデューサーが実現に導き、一つのコンテンツを作り上げていくこのような取り組みに期待している。視聴者の声などを分析し、その結果によっては全国放送で看板番組にするというようなゴールを設定すると、若手のモチベーションが上がるうえ、地域の取材にも力が入ると思う。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２２年５月ＮＨＫ中央放送番組審議会

５月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１６日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１３人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、経営計画における「達成状況の評価・管理」（２０２１年度第４四半期・１～３月）について説明があり、続いて、放送番組の種別および種別ごとの放送時間(２０２１年１０月～２０２２年３月分)について説明があった。続いて、プロジェクト「君の声が聴きたい」について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　員	秋田　正紀（株式会社松屋代表取締役社長執行役員）
	秋本　可愛（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	磯崎　功典（キリンホールディングス株式会社代表取締役社長）
	小沢　秀行（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫（日本舞踊家、女優）
	木村たま代（主婦連合会事務局長）
	栗原　　友（料理家）
	椎木　里佳（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	末冨　　芳（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	安河内賢弘（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜経営計画における「達成状況の評価・管理」
（２０２１年度第４四半期・１～３月）について＞

○　ＮＨＫプラスに注目している。アカウント数の伸びなど、進捗はどうなっているのか。

（ＮＨＫ側）

有料のＮＨＫオンデマンドと異なり受信契約があれば無料で利用できることなど、視聴者にサービスの内容が浸透しきれていない部分もある。さまざまな機会をとらえて、ＮＨＫプラスのユーザー数増に取り組んでいきたい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫプラスは３月末時点のＩＤ登録がおよそ 243 万件、４月末時点ではおよそ 257 万件で、着実に増えていると考えている。ＮＨＫプラスをさらに活用してもらえるよう、さまざまな工夫を重ねていきたい。

○　ＮＨＫプラスをより活用してもらうためには、認知度を高めることに加え、スマートフォンやタブレット端末、パソコンなどデバイスごとの利用状況や、どのようなコンテンツの利用が伸びているのかなど、その視聴のされ方を詳しく分析して施策に生かすとよいのではないか。

＜プロジェクト「君の声が聴きたい」について＞

○　５月６日(金)の若者だけの討論会、「真剣１０代しゃべり場リターンズ！！」(総合後 10:45～11:28)を見た。かつて「真剣１０代しゃべり場」という番組が放送されていたことは知らなかったが、司会者なし、台本なし、結論なしでトークバトルを繰り広げる点は興味深く、若者たちがしっかりと自分のことばで意見を述べていて、そのレベルの高さに感心した。ＮＨＫが、テレビを見る習慣があまりない若い世代に向けた番組制作に挑戦していることがよく理解できた。大人にとっても、若者の現状を知り、考えるきっかけとなる番組だった。５月８日(日)の日曜討論「子ども・若者の声社会や政治にどう届ける？」も見た。世代も立場も異なる５人が、ＮＨＫが行った１万人アンケートの結果について議論していて参考になった。野田聖子こども政策担当大臣は意見や要望をしっかりと受け止めると話していたが、大人である私たちも若い世代の声を聞き流すことは許されないと感じる内容で考えさせられた。５月７日(土)のＮＨＫスペシャル「君の声が聴きたい～若者が願う　幸せのカタチ～」(総合 後 7:30～8:35)を見た。ＳＮＳの普及や新型コロナウイルスの感染拡大など、今の若い世代は多感な時期に厳しい時代を生きていることがよく理解できた。近藤卓日本ウェルネススポーツ大学教授の「子どもたちは大人に向き合ってもらうのではなく、横に並んで一緒に感じて、考えて、ともに悩んでくれることを望んでいる」というコメン

トが印象に残った。「若い人たちの意見を聞いたという事実に大人たちは満足しがちだ」という若い世代の意見はもっともで、大人たちが実際にどのような行動を起こすのかが求められていることを痛感する番組だった。

○　「君の声が聴きたい」はＮＨＫが若い世代と向き合うという決意が感じられるタイトルで、この企画をきっかけに、若い人たちが大人たちにどんどん声をあげるようになるとよいと思う。５月７日(土)のＮＨＫスペシャル「君の声が聴きたい～若者が願う　幸せのカタチ～」は、若い世代の声を丁寧に分析していて考えさせられた。若い世代の意見というより、一人一人の声にしっかりと耳を傾けられる大人でありたいと改めて感じた。お金がほしいという願いを持っている若い世代が多いようだが、これは大人たちの所得の低さが影響している可能性があるという指摘があった。大人たちに余裕がなく、幸せを感じられていない社会だとすれば、若者たちのために大人が努力することで若者たちが幸せになれるわけではないと感じた。その意味では結論がなく、もやもやした気持ちになった。若い世代に向き合い、ともに考える番組を今後も期待している。５月１３日(金)のドキュメント７２時間「プリントシール機　彼女たちの春」も見た。中高生の声に耳を傾け、彼女たちの日常をありのままに伝えた番組で興味深かった。コロナ禍で友達の作り方やコミュニケーションのあり方が変化していることなど、この時代ならではの様子もよく伝わってきた。最先端の若者文化にも触れることができ、「君の声が聴きたい」プロジェクトの趣旨にも合致した番組でとても楽しめた。番組スタッフが自分たちで撮ったプリントシールをＳＮＳで公開していたのは、視聴者が親近感を持てるよい取り組みだと思う。この番組はＮＨＫオンデマンドで見たが、倍速再生の機能があるとよいのではないかと感じた。

○　「君の声が聴きたい」プロジェクトに関連して、５月７日(土)のＢＳ世界のドキュメンタリー「グレタ　ひとりぼっちの挑戦(前編)(後編)」(総合 後3:15～4:00、4:05～4:50)と５月８日(日)のＮＨＫスペシャル「ヤングケアラー　ＳＯＳなき若者の叫び」を見た。このプロジェクトは若い世代の声を大人たちが受け止め、深く考え、行動することを促す取り組みで、有意義で興味深いものだと感じている。主な視聴者の年齢が比較的高いＮＨＫが、若者の将来に危機感を持ち、世の中の意識を変えていこうとすることは大歓迎だ。日本の若い世代の精神的幸福度が先進国３８か国中３７位というのはとてもショックだった。いじめなどの困難に直面している子どもたちには社会全体でサポートすることが必要だ。コロナ禍でコミュニケーションの機会が減少していることも精神的な不安を助長しているのではないか。今年度のＮＨＫの編集方針の一つである、「多様性を尊重して共生する社会の実現を後押しする」という考え方を反映したよい企画だと感じた。大型連休後の５月６日(土)と７日(日)に集中して編成していたが、外出している人も多い時期にどの程度視聴者に見られたのかなど、

しっかりと分析して次に生かしてほしい。いわゆるＺ世代と呼ばれる１０代はグレタさんのように、さまざまな問題を自分のこととして受け止め、社会課題に対しても敏感だ。そのような若い世代の考え方の特徴なども大人たちに向けて紹介したほうが、若い世代の実態がよく伝わったと思う。５月８日(日)のＮＨＫスペシャル「ヤングケアラー　ＳＯＳなき若者の叫び」は、自治体などが取り組むセーフティーネットなど、実例をもっと紹介するなど、社会がよりよい方向に進むためのメッセージがあるとなおよかった。価値のある、中身の濃いプロジェクトであると評価したい。

○　５月７日(土)のＮＨＫスペシャル「君の声が聴きたい～若者が願う　幸せのカタチ～」を見た。個々の願いがどうだという以前に、スタジオに集まった大人たちが、若者の声に耳を傾け、真剣に考えるということ自体に意義を感じた。国連が毎年発表している「世界幸福度ランキング」で日本の順位が低いことはしばしば話題になり、ことしは１４９カ国・地域中５４位、Ｇ７で最下位だった。大人を含めた日本社会全体のありようを変えていかなければ、若者の幸福度も上がらないと思う。最も多かった若者の願いは「お金がほしい」だった。未来ある若者にそう言わせる社会の病理に目を向けなければならないと思う。若い頃の自分なら、まず「自由がほしい」と答えたと思うが、そんな声もあったのだろうか。

（ＮＨＫ側）

自由がほしいという意見もあったが、目立っていたのはお金の不安や戦争と平和について、またそれにつながる政治の問題などへの関心だった。若者たちはＳＮＳなどの普及で過剰なコミュニケーションの中にさらされている。ルッキズムなど、昔とは違う悩みを抱えていることは確かだ。また、大人たちは若者以上に希望を感じていない。若者たちはその背中を見ているという事実があるし、学生のときに抱いていた理想や希望が社会に出て急速にしぼんでしまう傾向もある。ＮＨＫには多様な番組制作の現場があり、それぞれ何ができるのか日々模索している。頂いた意見をしっかりと伝え、この取り組みが次につながるよう努力を続けたい。また、このような取り組みを放送しても、若者はテレビをあまり見ていない現実もある反面、若い世代をテーマにすると年配の視聴者が見なくなってしまう場合もある。ただ、若者の話題になったとたんに関心を失う社会そのものにも課題があると考えているので、一歩ずつでも、よりよい社会の実現に寄与できるよう工夫を重ねたい。

○　５月７日(土)のＮＨＫスペシャル「君の声が聴きたい～若者が願う　幸せのカタチ～」を見た。日本の若者の幸福度の低さに驚かされた。そもそも「幸せ」とはどのようなものなのか、実感がないというのも一因なのではないかと感じた。また、親や学校の先生など、身近な大人たちの不安が子どもたちの気持ちにも表れているのではないかとも感じた。大人である私たちが、若い世代とどのように向き合っていくのかについて考えさせられる番組だった。幸せを感じるためには自己肯定感を高めることが重要だということがよく理解できた。自尊感情には社会的自尊感情と基本的自尊感情があり、基本的自尊感情は身近な人との共通の経験から生み出されるという紹介に驚かされた。「君の声が聴きたい」というプロジェクト名の通り、一過性の企画とせず今後も継続してたくさんの声を届けてほしい。また、若い人たちが自分から声を上げることができ、幸福を感じられる社会の実現に寄与してほしい。

○　若い世代は生まれたときから景気の悪い時代が続いていて、冷めた雰囲気の中で育ってきたと思う。また、インターネットを通してさまざまな情報が入ってくるため、よいか悪いかは別として将来の先行きが見えてしまっている部分もあるだろう。平和が脅かされるような状況では、心が満たされないなどと言っている場合ではなくなるだろうと考えると、データで示されていた、健康ではあるものの心が満たされないという若者たちの現状は、ある意味では幸せなのかもしれないと個人的には思う。他者と比較するあまり自分自身を大切にできないという日本の若者たちの現状を克服するには、経験によって自尊感情を高めるしかないと思う。また、現在の大人たちの感情が子どもたちの心の持ちように大きく影響していると思うので、幸福度が低い現状を改善させるためには、私たち大人が変わる必要があると感じた。その意味では、大人たちがどのように行動すべきか示してくれるとなおよかった。

○　５月７日(土)のＮＨＫスペシャル「君の声が聴きたい～若者が願う　幸せのカタチ～」を見た。自分たちの主張を聞き流さないでほしいと考えている若者たちが主役の番組だと思うが、スタジオのゲストは５０歳前後の大人たちばかりなのが気になった。ただＶＴＲを見て感想を述べていただけという印象だ。２０代のスタジオゲストはモデルの女性だけだったので、若い世代を代表するような論客にも出演してほしかった。若者の気持ちを分かりたい大人と正論をぶつけたい若者の討論が見たかった。また、５月１２日(木)の「あさイチ」も見た。経済的な理由で塾に通うことができない子どもたちが対象の、無料の学習会を紹介していた。子どもたちが家族や学校の先生以外の人と話すことでコミュニケーションが上手になる効果があることも紹介していて、興味深い企画だった。これからも視聴者の役に立つ取り

組みを詳しく紹介してほしい。

○　「君の声が聴きたい」はすばらしいプロジェクトだと思う。ＮＨＫが若者に向けたコンテンツを提供していることを若い世代に伝えることはとても重要で、よい取り組みだ。若者からも大きな反響があったのではないか。このような企画は単発だと浸透しないので、継続することが重要だと思う。番組だけではなくＳＮＳを通した展開を重視し、若者の視聴者を大幅に増やす気概で取り組み、この機運をさらに盛り上げていってほしい。今回のプロジェクトのツイッターの公式アカウント名は「君の声が聴きたい　ｆｅａｔ．ラジラー！＆ｍｏｒｅ」となっているが、長すぎて分かりづらい。「ＮＨＫ 君の声が聴きたいプロジェクト」のように、シンプルな形で発信したほうがよいと思う。ＮＨＫとして、これから若者にどのようにアプローチしていくのかについて改めて考える絶好の機会だと考えているので、ＳＮＳの積極的な活用はもちろん、動画の倍速再生など、若者の視聴スタイルに応えるサービスの充実について検討してもらいたい。５月７日(土)のＮＨＫスペシャル「君の声が聴きたい～若者が願う　幸せのカタチ～」は、夜景をイメージしたセットで、リラックスして見られる雰囲気でよかったと思う。一方で内容は、土曜ドラマ「１７才の帝国」と比べるとインパクトに欠ける印象だった。若者の声を聴くという趣旨に沿ってはいるが、現代の若者像を画一化してしまいかねないことが気になった。若い世代の中には環境問題や政治に興味を持ち精力的に声を上げている人もいるので、そのような若者も取り上げてほしかった。放送中にＳＮＳでの投稿を呼び掛けていたが、その案内がやや不足していたと思う。画面にずっと表示するなど、もっと参加を促すべきではなかったか。また、若者に寄り添うという意味では、スタジオやロケＶＴＲの出演者の人選がやや気になった。土曜ドラマ「１７才の帝国」も見ているが、現代の政治を痛烈に皮肉っており、全員が主役であるという考え方を持つ若い世代と、旧来的な考え方を持つ大人たちが対比されていて興味深い。ＳＮＳなどでも話題になっていると思うが、それだけに、ＳＮＳでの発信がＮＨＫドラマ公式アカウントだけなのはもったいない。ドラマごとにアカウントを作るのは難しいかも知れないが、例えば「土曜ドラマ」だけのアカウントを作ってＰＲしてもよいのではないか。最近はドラマの主人公が劇中の役でＳＮＳを使うという試みもトレンドになっている。このドラマはテクノロジーを駆使して社会を変革しようという物語なので、実際にテクノロジーを使ったＰＲをすることで、よりリアルさが増して盛り上がるのではないか。

（ＮＨＫ側）

スタジオのゲストの世代を含めた人選についての指摘など、改善できる点は数多くあると思う。どのような形がよいのか議論を重ね、今後もさまざまな番組に挑戦したいと考えてい

る。頂いた意見については現場でしっかりと共有し、議論をしていきたい。若者の声を聴くだけではなく、声を受け止めてレスポンスすることや、その姿勢を伝えることも重要だと考えているので引き続き努力や工夫を続けていきたい。

○　このプロジェクトの意味は、大人たちが今の若者が置かれている状況や本音を知ることにあると思う。全体的によく考えられた番組が多いと感じた。さらに小中学生が見ているＥテレの番組も連動するとより盛り上がったのではないか。５月７日(土)のＮＨＫスペシャル「君の声が聴きたい～若者が願う　幸せのカタチ～」を見た。日本の若者の幸福度が先進国の中でとても低いことが一般的にあまり知られていないことに驚いたが、その事実を広く伝えたことに意義があると感じた。５月８日(日)の日曜討論「子ども・若者の声　社会や政治にどう届ける？」も、野田聖子こども政策担当大臣だけでなく、さまざまな世代の出演者が討論していたことがよい。何より行政の担当者がよく見ていると言われている番組という意味でも意義があると感じた。若者はＳＮＳを通して情報を得ることが多いことを踏まえ、今後はＳＮＳと連動した番組を期待したい。2023 年はこども家庭庁が創設され、こども基本法が施行される予定だ。この機会を逃さず、ＮＨＫは若者に向けてさまざまなアプローチをしてほしい。日本の若者の幸福度が低いのは、先進国の中でも突出して若者が社会に参画できていないからだ。この点を踏まえて取り組みを進めてほしい。５月１０日(火)のクローズアップ現代「女らしく…って言わないで！声を上げ始めた若者たち」も見た。男性の側の意識改革について、言及が不足しているように感じた。男性がこの問題について学び、変わらなければならないという考え方を広めなければ、女性だけが差別を受けないよう努力をし続けるという構図は変わらないだろう。問題提起をする番組と考えればよい内容だが、さらに掘り下げて伝えるべきテーマだと考えている。また、５月１１日(水)のハートネットＴＶ「“こども宅食”でつながろう」も見た。地域の取り組みや関係者を丁寧に取材して伝えていた。地域のつながりやＮＨＫの取材力を生かした番組で、多くの人が勇気づけられたように思う。引き続きこのような番組作りをお願いしたい。

○ 多くの委員からさまざまな意見があるのは、よい取り組みだからだと考えている。さまざまな番組が相互に乗り入れて取り組んだことを高く評価したい。ＮＨＫという大きな組織の中で、縦割りを取り払う効果もあったと思う。ＮＨＫスペシャル「君の声が聴きたい～若者が願う　幸せのカタチ～」を見たが、番組の冒頭で若者のお金に関する希望や悩みを伝えたことは、大人たちにとっては警告だったのではないか。声を聴くというスタンスがとてもよいと感じた。次のステップとしては、社会全体が抱えている課題を解決する手がかりを提示したり、検証したりする番組が必

要だろう。番組ではコロナやＳＮＳの時代を理由にしているが、そもそも日本はどのようなことに幸福を感じるかについて、教育面などにも課題があったのではないだろうか。自分自身の個性を自覚し、思ったことを発言できるような環境が必要だろう。これからの子育てや教育など、子どもたちの成長の現場に向き合うコンテンツを楽しみにしたい。このプロジェクトの課題や成果をしっかりと検証し、次の展開に生かしてほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「君の声が聴きたい～若者が願う　幸せのカタチ～」を見た。お金の問題やＳＮＳに絡んだルッキズムの問題など、大人たちが若者の声をしっかり聴くことをコンセプトにした番組で興味深かった。このプロジェクトのプロローグ的な内容だったと感じた。幸福度を上げるためにはまず閉塞感（へいそくかん）を打破することが重要で、若者の社会への関与をいかに高めるのかが鍵になる。一方で、現在でも社会への関与を積極的に行っている若者も数多くいるので、そのような人たちの活動を伝えることも重要だろう。自分の近しい人たちと同じような経験をすることが自尊心の醸成につながるという話があったが、確かに日本の子どもたちはそのような経験が少ない傾向にあると感じた。このプロジェクトをきっかけにして、引き続きさまざまな取り組みを行ってほしい。

○　ＮＨＫスペシャル「君の声が聴きたい～若者が願う　幸せのカタチ～」を見た。自分たちの声を聴いてくれる大人たちが少ないと考えている若者が多いという事実はショックだったが、その点も含めてさまざまな気づきを与えてくれるよい番組だった。おそらく、かつての日本は共同体がしっかりと形成されていて、近隣の住民や親戚が若者たちの声を拾い上げる役割を果たしていたのだと思うが、現在はそれがなくなってしまった。家族関係がうまくいっていればよいが、そこがうまくいかなくなると、途端に破綻してしまう傾向があると感じた。心理学では、人間は他者との違いに敏感に反応するという研究結果がある。つまり、衣食住が満ち足りただけでは幸福は実感できず、他者が自分よりも豊かであれば不幸だと感じてしまうということを意味している。日本社会特有の同調圧力や世間体などの問題はもちろんあるが、大人も含めてもう少し広い視野で物事をとらえる必要があることが示されるとさらによかったと思う。テレビというメディアが、若者の声を拾い上げる取り組みをすることは意義があると思う。ただ、さまざまな素材をもとに番組制作のプロが編集して仕立てた番組で、若者の生の声をどこまで正確に伝えることができたのか気になった。ＳＮＳとの連動など、戦略的にさまざまアプローチでこの取り組みを続けてほしい。

○　このプロジェクトの番組を誰に見せたいかと考えたとき、若い世代に見てもらう

ことはもちろん大事だが、同時に大人たちにこの問題を考えてもらうことも重要だと思う。その意味では、一定の役割を果たした取り組みだったのではないか。ＮＨＫスペシャル「ヤングケアラー　ＳＯＳなき若者の叫び」を見た。ショッキングな内容だったが、長期間にわたり継続して現場に密着したＮＨＫの取材力と努力に敬意を表したい。印象に残ることばも数多く紹介されていた。「子どもの１年と大人の１年は価値が違う。そのときに経験できなかったことは一生経験できない。大人は今年の祭りを経験できなくても、来年や数年後がある」というコメントから、コロナ禍が子どもたちに与えた影響は計り知れないと感じた。高齢者の命を守ろうとする裏で、若い世代の精神的な犠牲があることを改めて感じた。このプロジェクトは今後も継続してほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

さまざまな指摘や期待の声をいただき、身が引き締まる思いだ。頂いた意見を踏まえて、社会が少しでもよい方向に進むような取り組みを行っていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　５月８日(日)のＮＨＫスペシャル「ヤングケアラー　ＳＯＳなき若者の叫び」を見た。ヤングケアラーの問題について継続的に取材して伝えていることを評価したい。学生時代に修学旅行や運動会に参加できず、進学も就職もあきらめ、３０年間母親の介護に専念してきた方が、母親が亡くなったあとに生きがいを失い、摂食障害になったものの、そこから社会と接点を持ち、少しずつ前に進んでいく様子が丁寧に伝えられていた。長い時間をかけて取材をし、当事者たちと関係を築き、番組で伝えたことが本当にすばらしい。ヤングケアラーということばが広がり、若くして介護を担っている人たちが実はたくさんいるということは広く知られるようになってきたと思うが、支援はまだ限られている。ヤングケアラーの過酷さや、支援の難しさがよく分かる内容で、多くの人に見てほしい番組だった。ヤングケアラーの問題は社会全体で考え、手を差し伸べる必要があるので、今後も継続して取り上げ、人々の行動をうながすような報道をお願いしたい。

（ＮＨＫ側）

それぞれの家庭ごとに事情は異なっているうえ、デリケートな問題でもあり難しい取材だった。３０年もの間介護を続

け、喪失感を持っていた人が、同じような境遇の人と触れ合って周囲に支えられることで、「明日が来るのが楽しみになってきた」と語った場面は、多くの視聴者が心を動かされたのではないかと思う。ヤングケアラーの人たちに光を当て、少しでも役に立てるよう引き続き努力したい。

○　５月８日(日)のＮＨＫスペシャル「ヤングケアラー　ＳＯＳなき若者の叫び」を見た。行政が機能していない部分をＮＰＯ団体がフォローしているとのことで、それ自体はすばらしい活動だが、社会としてそれでよいのか深く考えさせられた。当事者たちは労働を通じて居場所や存在意義を感じ、心の再生につながっていた。その意味でも示唆に富んだすばらしい番組だった。

○　沖縄の本土復帰５０年に関連する一連の番組に注目した。５月１５日(日)のＮＨＫスペシャル「証言ドキュメント　“沖縄返還史”」(総合 後 9:00～9:59)を見た。限られた放送時間の中で、交渉の流れがわかる労作だった。ただ、「糸で縄を買った」といわれた日米繊維交渉との関連や、沖縄問題懇談会の果たした役割にも触れてほしかったし、密約についてはさらに深く知りたかった。５月１４日(土)のＢＳ１スペシャル「５０年目の告白　“安保の裏方”が見た沖縄」も見た。米軍基地の用地借り換え交渉や、米軍に関連した事件・事故対応にあたった、当時の防衛施設庁職員の証言を集めたものだった。政治家や外交官、学者らとは異なり、葛藤の多い沖縄の現場の最前線に立ちながら、これまであまり注目されてこなかった存在に光を当て、記録に残したことは、意義深いことだと思う。

○　４月２５日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「スペインかぜ　恐怖の連鎖」を見た。100 年ほど前のスペインかぜ流行時の映像や、その後の生物兵器開発の映像など、貴重な映像が数多く紹介されていて感銘を受けた。アメリカのカンザス州の陸軍基地から世界中に感染が拡大した経緯がよく理解できた。芥川龍之介や、アメリカのウイルソン大統領がり患していたことも初めて知った。一方で、現在の新型コロナウイルスワクチンの開発へとつながる壮大な歴史絵巻のように描こうとしたのは、やや無理があると感じた。スペインかぜがなぜ終息したのかについて詳しく伝えると、現在のコロナ禍においてより参考になる番組になったと思う。世界中で集団免疫が獲得されたために終息したと簡単に伝えていたが、専門家の解説がほしかった。

○　４月２７日(水)のあさイチ「信頼していた大人が…　子どもの性暴力被害」を見た。性暴力の危険について子どもたちが学ぶための教育を行っている学校の取り組

みを紹介していた。「水着で隠れている部分はプライベートゾーン」など、子どもたちにも分かるよう伝えていた。子どもを性暴力から守るために、それぞれの学校が性教育のあり方を考えるきっかけとなるとてもよい内容だったと思う。この番組は朝の放送で、主な視聴者層は主婦だと思うが、大人たちの軽率な行動が子どもたちの心に大きな影響を及ぼすことに気づいてもらうためには、この内容は夜の時間帯にも放送してほしい。このようなことを啓発することで防げる犯罪も多いのではないか。

（ＮＨＫ側）

指摘のように、扱うテーマによって見てほしい視聴者は異なってくる。「あさイチ」だから朝の時間帯にしか放送しないなどと決めつけず、見てほしい視聴者にしっかりと届く柔軟な編成を考えていきたい。

○　４月２９日(金)の歴史発掘ミステリー　京都　千年蔵「幕末奇譚　知を武器にかく闘えり」(総合 後 10:00～11:29)を見た。江戸時代後期の本草学者である山本亡羊らが主催し、さながら「オタクの楽園」ともいうべき学び舎「山本読書室」に残る 7512 点もの文化財を徹底調査する内容で興味深かった。山本読書室は幕末の時代に銃や刀ではなく、知を武器に戦っていた。この番組ではその活動内容を再現ドラマも交えて丁寧に伝えていて見応えがあった。もともとはＢＳプレミアムで放送された番組だが、ややマニアックなテーマを総合テレビでも放送したことを評価したい。有名な人物や事件だけではなく、このようなテーマについても引き続き取り上げてほしい。

○　５月２日(月)のクローズアップ現代「アスリートの“心のＳＯＳ”トップ選手に何が？」を見た。アスリートに強さを求める社会の目や、結果を出せない選手に対するメディアのバッシングなどをテーマにした番組だった。出演していたアスリートは有名な方々で、自らの思いをしっかりと語っていた。この問題について私たちの理解を助ける重要な役割を果たしていたと思う。アスリートだけでなく、多くの著名人に共通する悩みだと思うので、よい特集だったと思う。海外の取り組みを詳しく紹介するなど、もう少し示唆的な内容があるとなおよかった。この番組をＮＨＫプラスで見たが、途中何度か「この映像は配信しておりません」という断りが表示され、映像が配信されない場面があった。権利上難しいことは重々理解しているが、さまざまな視聴者に見てもらうためのデジタルサービスなので、新たな視聴者の獲得に向け、デジタル戦略を考えるうえでも改善してもらいたい。

（ＮＨＫ側）

現状のルールでは、どうしても配信できない映像があり、心苦しく思っている。少しでも多くの映像を届けることができるよう努力を続けたい。デジタルに関連したさまざまな指摘についてはしっかりと受け止め、現場と話し合いながら改善していきたい。

○　５月１３日(金)の「ＮＨＫニュース　おはよう日本」を見た。権利表明が困難な子どもなどの代弁者である「アドボケイト」について伝えていて、意義のある特集だと感じた。子どもの声を聴くとき、専門的な知識を持ち合わせて接することができる人材を増やすことが日本の課題だ。これまで日本社会では若者の声を聴くことがあまり重要視されてこなかったが、世の中が少しずつ変わろうとしている。今後もそのようなことに焦点を当て、掘り下げて伝えてほしい。このような企画は「ＮＨＫ　ｆｏｒ　Ｓｃｈｏｏｌ」と連動して展開するとよいのではないか。ＮＨＫには良質なコンテンツが数多くあるので、日常の業務に追われている学校の先生たちがそのまま役立てることができるよう、整備を進めてほしい。性教育のコンテンツなどは子を持つ親にとっても有用なので期待したい。また、中高生向けの「ＮＨＫ　ｆｏｒ　Ｓｃｈｏｏｌ」のコンテンツをもう少し充実させてほしい。この春から高校の学習指導要領が大きく変わったが、現場は迷走している。「１００分ｄｅ名著」のような番組を短く編集し、インターネットなどで公開すると高校などで活用され状況の改善に役立つだけでなく、結果として若い世代のリーチにもつながるのではないか。

（ＮＨＫ側）

指摘のように、教育現場でのデジタルの活用はここ数年で大きく進んだ。頂いた意見は現場に伝え、ＮＨＫが持つコンテンツを教育現場などでよりよい形で活用してもらえるよう、取り組みを続けていきたい。

○　５月１３日(金)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「沖縄返還～祖国復帰運命の１日～」を見た。１ドル＝３６０円の固定レートが変動為替になり、沖縄の人たちのドル資産が減価する可能性がある中で、特別給付等の措置が取られたことは知っていたが、沖縄の人がどの程度ドル資産を持っているのかを把握し、届け出のあった紙幣には特別な印を押すいわゆるＸデー作戦については知らなかった。沖縄の歴史について新たな知見が得られるよい番組だった。

○　５月１３日(金)のドキュメント７２時間「プリントシール機　彼女たちの春」を見た。プリントシール機自体はいまでもとても人気があり、女子中高生たちはよく皆で撮影している。彼女たちのリアルな姿をしっかりと伝えたよい番組だった。「君の声が聴きたい」プロジェクトを通して、このような番組の重要性を改めて感じた。ルッキズムについては議論があるが、自信を失う子どもたちがいる一方で、「カワイイを追求する」という文化は普遍的だとも思う。批判だけではなく、このような彼女たちのリアルを受け止める寛容な番組を今後も制作してほしい。ＳＮＳでは、制作スタッフが写ったプリントシールや、撮影の工夫などが投稿されていて親近感がわいた。視聴者の需要もあると思うので、これからも定期的に投稿してほしい。

（ＮＨＫ側）

この番組では、デジタル専門のチームを作りＳＮＳでの展開を進めている。意見は現場にも伝えたい。

○　「漫画家イエナガの複雑社会を超定義」を見ている。１５分の短い番組だが、イエナガ役の俳優・町田啓太さんがよい意味で早口で、倍速で見ているような感覚になった。若者にも受け入れられる番組だと感じ、感心した。新しい視聴者を獲得するためにも、ＳＮＳなどで短く編集した番組の動画を公開し、本編へいざなうとよいのではないか。

（ＮＨＫ側）

「新しいＮＨＫらしさ」とはどのようなものであるか議論する中で、新しく開発した番組だ。特に２０代に見てほしいという思いで制作している。指摘のように、インターネットを活用した展開があまりできていないことは課題で、迅速に対応を検討したい。

○　連続テレビ小説「ちむどんどん」を見ている。前作が良作でテンポがよかったこともあるのかもしれないが、妙に間が長かったり、あまり意味の感じられない演出があったりと、ややフラストレーションがたまってしまう。脚本にもつじつまが合わない部分や安易な点があるように感じる。今後の展開に期待したい。

○　連続テレビ小説「ちむどんどん」を見ている。沖縄返還５０年のタイミングのドラマであるが、あまり沖縄返還について描かれていないのが残念だ。

（ＮＨＫ側）

頂いた意見は現場に伝えるとともに、今後のドラマ制作に生かしていきたい。

○　ドラマ１０「正直不動産」を見ている。不動産をテーマにしたドラマだ。不動産や住宅に関連したトラブルは耳にすることが多い。俳優の山下智久さんが演じる、たたりのために嘘がつけなくなったという設定の不動産の営業マンを中心に展開するストーリーがおもしろい。ペアローンのデメリットなど、知っているようで意外と知らない不動産の知識を楽しみながら得ることができる役に立つドラマだと感じている。今後の展開も楽しみにしたい。成人年齢の引き下げによって１８歳でも自分の意思で家を買えるようになった。今後この分野でトラブルが増える可能性もあるので、ドラマで取り上げるのはよい取り組みだ。

（ＮＨＫ側）

漫画が原作のドラマだ。原作の漫画でも、不動産に関する知識が紹介されている。さまざまな関係者に取材をしたうえで、ドラマでも伝えている。ドラマを通して役に立つ知識を増やしてもらえればうれしく思う。

○　更年期障害について、「ＮＨＫニュース　おはよう日本」のコーナーで発信するだけではなく、「ＮＨＫスペシャル」やＮＨＫプラスでもしっかりとまとめて伝えるなど、放送にとどまらずさまざまな媒体を通して多角的に伝えていて評価したい。日本社会が抱えている大きな課題の一つをしっかりと示したと考えている。人口のおよそ半数の女性に影響することであるにも関わらず、一般に更年期について他人と相談しづらいという現状がある。この取り組みは現に多くの女性たちを勇気づけている。ＮＨＫの役割を果たす企画ですばらしい。

○　４月８日(金)の新・にっぽんの芸能「鮮やか！片岡愛之助の“蜘蛛絲梓弦”前編」を見た。昨年度までの「にっぽんの芸能」がリニューアルし、放送時間も変更になった。３５分に短縮され、どのような構成になるのか注目していた。初回は片岡愛之助さんが一人５役を演じ分ける新しい歌舞伎である「蜘蛛絲梓弦」を取り上げていた。作品をたっぷりと伝えていて、分かりやすいという印象を持った。副音声で見たが、初心者も楽しめるような解説や裏話などを交えて伝えていて工夫されていると感じた。一方で、副音声は二人が掛け合う形で進行していたが、セリフに掛け合いのコメントが重なっている場面が多かったのは残念だ。まず芝居を楽しんでもら

うことを大事にしたうえで、要所で解説をするほうが歌舞伎の魅力がより伝わったのではないか。若い世代に見てもらうことも意識しているようなので、番組公式のＳＮＳアカウントの立ち上げを期待したい。

（ＮＨＫ側）

新年度から放送時間を少し短くして、伝統芸能になじみがない人にも楽しんで見てもらうことを意識して番組を制作している。その一つの取り組みが解説放送だ。指摘のように、バランスはとても大事だと考えている。頂いた意見は現場と共有し、今後の番組制作に生かしていきたい。

○　４月２６日(火)のＮＨＫアカデミア（１）「山中伸弥（生命科学者)」（Ｅテレ 後10:45～11:14)を見た。各界の第一線で活躍している人がさまざまな困難や挫折を乗り越えて偉業を成し遂げた過程や、その人を突き動かす動機などを知ることができる学びの多い番組だ。ホームページ「ＮＨＫラーニング」でウェブ講座としても展開しているが、とてもよい企画だと感じた。成功した人の共通点として、挫折や変化への適応、異文化からの学びなどがあると感じた。視聴者がそれぞれの立場で考えられる学びの多い番組だと思う。若者からさまざまな質問が寄せられていたが、山中教授は率直かつ分かりやすく答えていて好感を持った。一方で、番組をきっかけに「ＮＨＫラーニング」に誘導するのであればもう少しＰＲが必要だろう。山中教授の講義を手軽に見るようにできるのはＮＨＫの大きな強みなので、ＱＲコードを示すだけではなく、もう少し工夫があったほうがよいと思う。

○　５月２日(月)の「ふたりのウルトラマン　沖縄本土復帰５０年　ドキュメンタリードラマ」（ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 9:00～10:29)を見た。ウルトラマンシリーズを支えた沖縄出身の二人の脚本家を主人公にしたドキュメンタリードラマですばらしかった。ドラマ前半の熱気あふれる群像劇と、後半の悲しい内容が見事に対比されていて、とてもよくできたドラマだった。当時の関係者のインタビューも伝えられていて、ドキュメンタリーとしても秀逸だったと思う。ただ、沖縄本土復帰５０年と銘打たれていたので、主人公の仕事がうまくいかなくなった文化的な背景などをもう少し掘り下げるとなおよかったのではないか。いずれにしても、エンターテインメントとドキュメンタリーという２つの要素を高い水準で融合させた質の高い番組だった。

（ＮＨＫ側）

ドキュメンタリーやドラマに精通した担当チームが制作し

た番組だ。この番組は、再編集をして沖縄県向けに放送するなど、さまざまな展開をする予定だ。

○　新年度の番組改定では、午後７時３０分に「クローズアップ現代」を編成したことがすばらしい。民放の番組と差別化ができていてよいと思う。

○　国境なき記者団が発表した報道の自由のランキングについて、「報道の自由度日本　世界７１位“大企業の影響力　自己検閲促す”」というタイトルでニュースを伝えていた。「国境なき記者団」のホームページを見ると、日本政府と企業が常に圧力をかけていると書かれている。他社の報道でも政府に言及していなかったので少し心配になった。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫは「強まっている大企業の影響力がメディアに自己検閲を促している」という原稿で伝えた。他の報道機関も大企業の影響力にしか言及していないので、どのような根拠に基づいて原稿を書いたのか確認したい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局

２０２２年４月ＮＨＫ中央放送番組審議会

４月のＮＨＫ中央放送番組審議会は、１８日(月)、ＮＨＫ放送センターにおいて、１４人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、「サタデーウオッチ９」などニュースジャンル等の番組について説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	國土　典宏	（国立国際医療研究センター理事長）
副委員長	佐倉　　統	（東京大学大学院情報学環教授／理化学研究所革新知能統合研究センターチームリーダー）
委　員	秋田　正紀	（株式会社松屋代表取締役社長執行役員）
	秋本　可愛	（株式会社Ｂｌａｎｋｅｔ代表取締役）
	磯崎　功典	（キリンホールディングス株式会社代表取締役社長）
	小沢　秀行	（朝日新聞社論説副主幹）
	尾上　　紫	（日本舞踊家、女優）
	木村たま代	（主婦連合会事務局長）
	椎木　里佳	（株式会社ＡＭＦ代表取締役社長）
	柴田　　岳	（読売新聞大阪本社代表取締役社長）
	末冨　　芳	（日本大学文理学部教授）
	仲條　亮子	（グーグル合同会社執行役員／ＹｏｕＴｕｂｅ日本代表）
	馬場　利彦	（全国農業協同組合中央会専務理事）
	安河内賢弘	（ＪＡＭ会長）

（主な発言）

＜「ニュースジャンル等の番組」について＞

○　４月２日(土)の「サタデーウオッチ９」を見た。タレントのゲストが、一般の視聴者の立場でコメントをしていた。ウクライナ関連の話題については、避難先で新たな命が生まれたというような、やや情緒的な内容のコメントで、この状況であれば、今後の見通しや各国の動きなどについて詳しく伝えるべきではなかったか。また、民放も含めてすでに伝えられたニュースが多かったように思う。経済特集なども含めてだが、個人的にはもう少し硬派な内容にしたほうがよいと思う。

○　４月２日(土)にスタートした「サタデーウオッチ９」を見ている。毎回ゲストのコメンテーターを招いているが、肩ひじ張らずに率直な意見を語っていてとてもよいと思う。ウクライナについても、専門家が分かりやすく解説していたし、赤木野々花アナウンサーとの掛け合いも演出が工夫されていたと感じた。ロシアに住む日本人へのインタビューでは、情報統制の状況を知ることができ参考になった。ＮＨＫが独自にさまざまな取材をしていることもよく分かった。「Ｂｉｚトレ」のコーナーは、物価高の要因などを分かりやすく解説していた。さらにスポーツコーナーもあって、やや詰め込みすぎだと感じたが、テンポがよく６５分飽きずに見ることができた。番組で使われていたＢＧＭも効果的だったと思う。週末にくつろぎながら見ることができる、有用なニュース番組だと感じた。

○　４月２日(土)の「サタデーウオッチ９」を見た。新しいニュースや映像がなく、６５分という時間をどのように過ごしたらよいか個人的には戸惑ったが、週末にゆったりとこの１週間を振り返りたいという視聴者をターゲットにしているのであれば、この形でよいと思う。４月に入り、ニュース番組を担当するアナウンサーの女性比率が上がったように感じている。ジェンダーバランスについて意識的に取り組んでいると聞いていたが、ＮＨＫが時代に合わせて進化する姿を目の当たりにした思いで評価したい。この取り組みが定着しさらに進展するよう、今後の展開にも注視していきたい。

○　４月２日(土)の「サタデーウオッチ９」を見た。２月に放送されたトライアル版と比較して、大きくは変わっていないという印象だった。扱うテーマについてやや掘り下げている気はしたが、全体の構成やターゲットの視聴者層が変わっていないので、個人的には先月も意見したようにもの足りなさを感じている。タレントのゲストは誠実にコメントしていると感じられたが、専門家ではないゲストが情緒めいた感想を述べることがＮＨＫのニュース番組に必要なのか、その点には注意してほしい。

（ＮＨＫ側）

ゲストの選定については視聴者からも賛否の声を頂いている。土曜日の夜は一般的にくつろいでテレビを見る人が多い時間帯であることから、その週のニュースを分かりやすく読み解き、視聴者と共有することをねらいにしている。そのため、お茶の間に近い感覚を持っているゲストと、その日扱うテーマの専門家をスタジオに招いている。今後も視聴者の声

に耳を傾け、最適な形を検討していきたい。

（ＮＨＫ側）

視聴者からもさまざまな声を頂いている。評価は分かれると思うが、土曜日の夜に放送するニュース番組なので、リラックスできる雰囲気の番組にしたいと考えている。一方で、硬派な内容については、しっかりと掘り下げて伝えることを意識したい。先月の審議会で頂いた指摘も重く受け止めているので、よりよい番組になるよう検討を重ねたい。音楽はピアニストの角野隼斗さんに作曲していただいたが、評価いただきありがたく思う。ニュース番組でのキャスターの起用については、引き続きジェンダーバランスをしっかりと考えていきたい。頂いた意見は今後に生かしていきたい。

○　「サタデーウオッチ９」を見ている。ゲストが少し浮いてしまっているように感じている。ニュース番組なので、ニュースに対してもコメントを求めるのであれば、そこは専門家に求めるか、テーマに合わせたゲストを選定するべきだと感じた。一方で、明るい雰囲気でニュースを伝える取り組みはＮＨＫの夜のニュース番組としてとても新鮮でよいと感じている。ＳＮＳの使い方については「サタデーウオッチ９」と「ニュースウオッチ９」は番組のテイストが異なっているので、アカウントは分けたほうがよい。「サタデーウオッチ９」のコアな視聴者をこれから育てていくのに、ＳＮＳを効果的に活用し、身近なニュース番組というイメージを浸透させてもらいたい。また、インターネットサイトの「みんなでプラス」の「“性暴力”裁判　被害女性が語った１５分のことば」という記事を読んだ。女性への性暴力の話題はネット上でいわゆる“炎上”をしやすく、批判を受けることがあるが、この記事に対してはそのような反応があまり見られず、取材班の丁寧な文章と取材力のたまものだと感じた。報道の形は映像によるだけでなく、ことばも大事なのだと改めて感じた。今後も番組に限らず、ウェブ記事やＳＮＳの発信なども報道の一環として力を入れてほしい。

（ＮＨＫ側）

「ニュースウオッチ９」のアカウントはフォロワーが多く、それを生かしたいと考えた。一方で、平日と土曜日の番組はテイストが異なっているので、別々のアカウントにしたほうがよいという意見もある。現在は同じアカウントにしているが、指摘の点はまさに課題であり、検討を続けたい。

○　「サタデーウオッチ９」を見ている。やや冗長なニュース番組だという印象だが、毎日ニュース番組を見ることができない人もいるので、１週間の出来事をまとめて振り返ることができるという意味ではよいと思う。ただ、スポーツコーナーの時間は長すぎるように感じた。ターゲットとする視聴者を明確にし、よりよい番組構成を考えつづけてほしい。

○　「サタデーウオッチ９」を見ている。視聴者が週末のニュース番組に何を求めるかによって、評価は分かれるだろう。個人的には、ややもの足りなさを感じた。週末でじっくりと見られる時間帯なので、平日のニュース番組の延長ではない、新しい発見やニュースの深掘りがほしい。番組の構成は平日と大きく変わらない印象で、１週間のニュースのまとめや翌週の展望といったものもなく、週１回の放送という特別感が薄い。最大の課題はゲストの選定だろう。視聴者と番組をつなぐ役割に重点を置いているのかもしれないが、コメントの内容には、ややもの足りなさを感じた。ニュース解説のコーナーは、回を重ねるたびに安定感が増しているように思う。

○　４月２日(土)の「サタデーウオッチ９」を見た。ゲストのコメントも分かりやすく、見やすい番組だと感じた。土曜日に家族でゆったりと見られるニュース番組というコンセプトを考えると、ゲストの選定もとてもよかったと思う。政治や経済にあまり興味がない人も関心を持って見ることができたのではないか。ただ、内容が盛りだくさんで、やや焦点がぼやけていたという印象を受けた。ウクライナ情勢についても、もう少しゲストのコメントを聞いてみたかった。「推しプレ！」のコーナーがとてもよく、ゲストのことばが心に響いた。６５分間の番組だが、内容が盛りだくさんであっという間に見ることができた。ただ、スポーツコーナーがやや長すぎる印象を受けた。

（ＮＨＫ側）

「サタデーウオッチ９」の時間は、これまで「サタデースポーツ」という２０分のスポーツニュース番組を放送していたことを踏まえて、スポーツコーナーにある程度の放送時間をとっている。一般のニュースを見た流れでスポーツニュースを見ることになるので、多くの人に親近感を持ってもらえるようなコーナーになるよう意識している。今後も多くの視聴者に楽しんでもらえるよう工夫を重ねたい。

（ＮＨＫ側）

「サタデーウオッチ９」ならではの発見や深掘りをという指摘については、まさにＮＨＫが目指しているところであり、改善を続けていきたい。ゲストについては指摘のように視聴者と番組をつないでいただくことを意識している。ただ、意図が視聴者に伝わりきらない部分もあり、ゲストの選定はこの番組の重要な課題だと捉えている。頂いた意見を踏まえ、ブラッシュアップを続けたい。

○　ＮＨＫに期待するのは公平・公正で、国民の生活を大切にし、社会の課題を追及し、警鐘を鳴らすような番組を放送することだ。特に世界情勢については、私たちの生活にも直接影響を及ぼす時代になっているので、視聴者が自分の頭で物事を考える助けになる番組を放送してほしいと思う。「サタデーウオッチ９」は興味深い取り組みだが、まだコンセプトが明確になっていないと感じている。視聴者の代表としてのゲストを招き、ニュースを分かりやすく伝え、コメントをしてもらうという建て付けだが、ゲストによっては適切なコメントが難しいケースもあり、その点が課題だと思う。「Ｂｉｚトレ」も「あさイチ」のコーナーと似ていて新鮮さを感じなかった。生活環境の変化を先読みし、少し先の未来をテーマにして伝えるとよいのではないか。

○　４月２日(土)の「サタデーウオッチ９」を見た。番組のコンセプトはより深く分かりやすくということで、コーナーごとに解説が入り、勉強になるニュース番組だと感じた。ただ、その日取り上げる話題を番組の中で適宜紹介するなど、視聴者が関心を持って見続けることができる工夫があるとよいと思う。この先に紹介される話題が分からないまま、６５分の番組を見続けることはかなり難しいと感じる。ほかのニュース番組はテンポよくさまざまなニュースを伝える印象だが、それとは差別化し、じっくりとこの１週間のニュースを伝える設計だと感じた。その意味では、番組開始から長時間ウクライナ情勢について伝えていたが、このコーナーがどの程度続き、どのような内容を扱うのかなど、見続けるモチベーションを提示してほしかった。

○　「サタデーウオッチ９」は流れのよいニュース番組だと感じた。ＮＨＫは平日に硬派なニュース番組を放送しているし、テーマを絞って特集番組で掘り下げて伝えてもいるので、土曜日の夜にこのような新しいニュース番組を立ち上げたことは理解できる。「推しプレ！」のコーナーはとてもよかったと思う。ゲストがアートについて話していたが、もう少し聞きたいと感じた。全体の構成は今後調整されていくと思うが、二条城からの中継とお天気コーナーは重複感があった。もう少しメリ

ハリをつけると視聴者の関心が途切れないのではないか。視聴者の関心が薄いテーマについても興味を広げるという意味では、よい作りになっていると思う。戦争の報道が長く続くことで、見るのがつらくなる視聴者も増えてくる。そんなときにはテレビを消すのも一つの手段であることは教育の世界では当たり前になっている。そのような点についても、親世代に向けてしっかりと伝えてほしい。

○　「サタデーウオッチ９」については、委員の意見も賛否さまざまで、それを受け止めるＮＨＫも大変だと感じている。それぞれの意見は正しい、正しくないということではなく受け止め方の問題であり、国民全体となるとさらに多様な受け止めがあって、視聴者が満足する番組を目指すＮＨＫがいかに大変な局面に直面しているのかが理解できた。ほかのニュース番組との兼ね合いで、このような構成になっていると理解した。ただ、やや詰め込みすぎているという印象を受けた。ゲストの扱いは難しいが、民放も含めたテレビ番組全体の中でのＮＨＫや土曜日の夜のニュース番組の役割を考えて改善を重ねるとよいのではないか。視聴者と番組の橋渡し役としてゲストを配置することは民放でよく見られるが、それをＮＨＫでもやる必要があるのかは疑問だと感じた。また、ＶＴＲが流れているときにゲストの顔を小窓で映す演出は不要だと感じている。視聴者とつながるということならば、ウェブなどと連携し、視聴者の声を聞くコーナーを作るなどの取り組みをするとよいのではないか。

○　４月２日(土)の「サタデーウオッチ９」を見た。ウクライナ情勢について時間を取って伝えていた。１週間をまとめて振り返る意味では、このような番組があってもよいと感じている。ただ、専門家のゲストは頻繁にテレビで目にする方であり、もう少し違う視点のコメントを聞きたいと感じた。民放も含めて、ニュース番組が放送されていない時間帯がある。例えば土曜日の午後６時台などにニュース番組を放送するとよいのではないか。

○　４月４日(月)のクローズアップ現代「最前線ウクライナ▽戦火の下の映像記録▽市民たちの闘い」を見た。ウクライナで起きている情報戦の実態に迫った、ウクライナの公共放送の取り組みがよく分かる興味深い番組だった。公正・公平かどうかは後の検証で決まるというウクライナの公共放送の会長の発言が印象に残った。公共放送として、戦時下にどのようなことをするべきか考えさせられた。４月７日(木)に「ウクライナのテレビ局で考えた“公共放送”のこと」という記事をウェブに掲載していたが、これと併せて見るとより理解が深まると感じた。ＮＨＫが世界に先駆けてウクライナの公共放送を取材できた理由もよく分かった。戦時下においてＮＨＫがどのような役割を果たすべきか、戦争が起こらないようにするにはどう

しらたらよいのかなど、さまざまなことを考えさせられる意義のある番組だった。「クローズアップ現代」には現代社会の矛盾を厳しく突くことが求められていると思うので、今後にも期待したい。

○　４月４日(月)の「クローズアップ現代」を見た。放送局と社会がともに戦う姿が印象に残った。これまで、いわゆるフェイクニュースはＳＮＳなどを通して発信、拡散することが共通認識としてあったように思うが、この番組では嘘の情報が放送の電波にのせられる可能性があることが示唆されていた。ウクライナの市民が自分たちの手で正しい情報を伝えようとしていることがよく理解できた。ウクライナの公共放送の会長は、戦時下で公正・公平でいることは難しいのかという質問に対し、評価は後からするべきだという発言をしていた。極めて緊迫した状況で発せられたことばで重みがあり、貴重なシーンだと感じた。一方で、伝え方はやや気になった。ウクライナ情勢が深刻で切迫した状況であることを伝えるあまり、視聴者としてはウクライナを応援したい感情が先立ってしまう内容になっていてバランスが悪かったように思う。また、視聴者も救いを求めているわけではないので、番組最後の誕生日を祝うシーンにも違和感を覚えた。

○　４月４日(月)にスタートした「クローズアップ現代」を見ている。初回から３回目にわたり、ウクライナ情勢や外交、経済などさまざまなテーマを取り上げていてよいと思う。キャスターの桑子真帆アナウンサーは自然体なようすで、専門家のコメントをじっくりと聞いていて好感を持った。持ち味がよく出ていたと思う。ニュース番組はどうしてもメインのキャスターのキャラクターをクローズアップしてしまいがちだが、この番組は真摯（しんし）に自然体を貫くとよいと思う。

（ＮＨＫ側）

先月の番組審議会では３月６日(日)に放送したウクライナ関連のＮＨＫスペシャル「攻撃は止められるのか～最新報告 ロシア軍事侵攻～」についてさまざまな意見を頂いた。これらの意見も踏まえ、ウクライナ情勢については、日々のニュース番組とは異なる切り口で番組を展開していきたいと考えている。今回の「クローズアップ現代」では、ウクライナの公共放送について伝えた。どの程度取材ができ、映像が撮れるのか分からなかったが、戦時下でもニュースや真実を伝え続けるウクライナ公共放送の努力が伝わる番組になったと思う。頂いた意見は今後の番組制作の参考にしたい。

（ＮＨＫ側）

「ウクライナのテレビ局で考えた“公共放送”のこと」という記事については、ＮＨＫのＯＢがウクライナの公共放送を支援する取り組みに長年携わっていたことから執筆を依頼した。「クローズアップ現代」の放送とタイミングが合い、多くの方に読んでいただくことができた。番組や公共放送への理解が深まったとの評価をいただきありがたく思う。

○　４月４日(月)のクローズアップ現代を見た。ウクライナの公共放送にカメラが入るというＮＨＫにしかできない内容で、独自に撮影した映像も多くとてもよかった。広報局の記事も、番組だけでは伝わらないＮＨＫの思いが伝わってきた。ＳＮＳでも拡散されていたので、多くの反響があったものと認識している。ウクライナの国民への支援先などを画面左上のＱＲコードで案内していたこともよかった。一方、背景の映像とテロップの色みが同化して見づらい部分があったのが気になった。若い世代は戦争と遠く、ロシアのウクライナ侵攻がどうしてもひと事のように感じてしまうことがある。この侵攻を現実として認識してもらうには、ウクライナの人たちが突然日常を奪われているという事実を伝えることが重要だと考えている。ＳＮＳなどでは戦争前のウクライナの日常の光景を投稿する若い世代が増えている。その動画と現在の状況のギャップは衝撃的で恐怖を感じる。このような映像を伝えることが、若い世代を中心にさまざまな人の心を動かすことにつながるのではないか。

○　４月４日(月)の「クローズアップ現代」を見た。内容が濃くあっという間に見ることができた。２７分という番組サイズも適切だと感じた。「クローズアップ現代」は４月から午後７時３０分の放送になり、私のライフスタイルだとオンタイムで見られなくなったことを残念に感じている。この番組がターゲットとする視聴者層はどこにあるのだろうか。かなり込み入った深刻な内容も扱う番組だが、この時間帯は子どもたちを含め家族そろってテレビを見ている人も多い時間なので気になった。

（ＮＨＫ側）

ウクライナの人たちへの支援方法についてＱＲコードで案内した。先月の審議会で頂いた指摘を、今回の番組ではこのような形で取り入れた。頂いた指摘は現場に伝え、今後の番組制作に生かしていきたい。番組の放送時間については、逆に見やすくなったという反響も多く頂いている。この番組は２０代から５０代のいわゆる現役世代に、これまで以上に見

てもらうことを想定しているが、引き続き視聴者からの見られ方などを分析して、デジタル展開も含めて積極的に取り組んでいきたい。

○　４月４日(月)のクローズアップ現代を見た。午後７時３０分の放送に戻したことを踏まえ、新年度のＮＨＫの目玉番組だと認識している。番組の冒頭で大役を任された桑子真帆アナウンサーが意気込みを語ってもよかったのではないか。情報戦をテーマに、民主主義国家の公共放送が生命の危険を顧みず、国民に事実を伝えるという使命を全うしようとする様子が伝えられていて、興味深かった。命をかけ、真実を伝えようとする姿勢に感動した。ロシア側とウクライナ側の発信する情報のどちらが正しいのかなど極めて混沌（こんとん）とした状況において、民主主義国家の公共放送がどのようにあるべきかについて深く考えさせられた。今後もさまざまなことを深く追求して伝えてほしい。

○　４月４日(月)のクローズアップ現代を見た。ウェブ記事「ウクライナのテレビ局で考えた“公共放送”のこと」を読んだうえで番組を見たため、取材の許可が下りた背景などについてあらかじめ分かっていたので、理解が進んだ。ウェブ記事はとても興味深い内容で、番組では伝えきれない情報をウェブやＳＮＳで伝えることは価値があると思った。番組の放送前に関連する情報をある程度を伝えることで、視聴者が増えたり、番組の受け取り方が変わったりする場合があると感じた。今回のウェブの取り組みには可能性を感じたので、今後もさまざまな工夫を重ねてほしい。

（ＮＨＫ側）

番組が放送される前にウェブなどで情報を伝え、関心を高めてもらえるような取り組みを行っている。今後も工夫を重ねていきたい。

○　「クローズアップ現代」を見ている。以前、国谷裕子さんがキャスターを務めていた頃は意識して見ていたが、その後はあまり積極的に視聴していなかった。４月から午後７時３０分の放送となり、初回からウクライナ情勢について独自の映像で伝えていて、ＮＨＫの気合いを感じた。現地の状況が極めて厳しく、戦時下で放送を維持する難しさがよく伝わってきた。４月５日(火)の「体の不調　天気のせいかも！？最新研究で分かる対処法」はあまり参考になる情報が得られなかった。一方で、６日(水)の「どこまで上がる！？物価高騰～値上げラッシュｖｓ．家計の行方」は解説も分かりやすくてとてもよかった。桑子アナウンサーの落ち着いた語り口も好印象だった。幅広いテーマを扱うこの番組は、視聴者の関心によってどうしても

当たり外れは出てしまうと思うが、ターゲットとする視聴者層を明確化し、さらなる発展を期待したい。

○　４月４日(月)のクローズアップ現代を見た。午後７時３０分からの放送となり、比較的早い時間に帰宅する人をメインのターゲットにしているのかと思う。改めて、ウクライナにおける事態の深刻さを実感するとともに、戦争が継続する状況で市民の動画の投稿が大きな意味を持つことがよく理解できた。家族でテレビを見る時間帯なので、死体などのショッキングな映像については、その必要性や子どもたちに与える影響を十分考慮に入れて番組を制作してほしい。６日(水)の「どこまで上がる！？物価高騰～値上げラッシュｖｓ．家計の行方」はとても分かりやすく、役に立つものだった。エコノミストの酒井才介さんの解説もとても興味深かった。「クローズアップ現代」は午後７時３０分の放送になったので、若い世代の声を伝えるなど、これまで以上にさまざまな世代の視聴者が見ることを意識して番組を制作してほしい。

（ＮＨＫ側）

今後も幅広いテーマを取り上げていきたい。視聴者の関心が高いテーマは何かを調査する取り組みも行っていて、物価の上昇は特に関心が高いテーマだった。評価をいただきありがたく思う。

○　４月４日(月)のクローズアップ現代は興味深い内容ですばらしかった。また、１２日(火)の「藤子不二雄Ａさん▽未公開映像で迫る“漫画人生”」も見たが、さまざまなテーマを扱いながらも、ＮＨＫらしく深い取材で切り込んでいてとてもよいと思う。スタジオの専門家と桑子アナウンサーのトークもバランスがよいと思う。ＮＨＫの看板番組になると感じているので、引き続き期待したい。

○　４月４日(月)のクローズアップ現代を見た。このような映像が撮れるものなのかと驚かされた。戦時下のウクライナで全国ネットのテレビ放送が維持されていることに加え、そこにＮＨＫの取材チームが入ったことにも驚かされた。放送拠点は機密情報であるにも関わらず、ＮＨＫが取材を許され、しっかりと放送したことに感動した。

＜放送番組一般について＞

○　４月１０日(日)のＮＨＫスペシャル「数学者は宇宙をつなげるか？　ａｂｃ予想証明をめぐる数奇な物語」(総合 後 9:00～9:59)を見た。ａｂｃ予想とは何かについて、結局のところ理解はできなかったが、一般の人が絶対に理解できないものをいかにして伝えるかという工夫の凝らされた番組だと感じた。望月新一京都大学教授の出演はなかったが、「数学者でも理解できないのに、一般の方に理解はできないと思うので取材は受けられない」という教授のメッセージにすごみを感じた。望月教授をよく知る関係者が出演して教授について語っていたが、教授に関するエピソードだけではなく、自分自身の思いなどについても伝えてほしかった。致し方ないのだとは思うが、やはり望月教授の映像がなかったのは残念だった。

○　４月１５日(金)の「数学者は宇宙をつなげるか？　完全版　ａｂｃ予想証明をめぐる数奇な物語」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 11:00～16 日(土)前 0:29)を見た。極めて難解なａｂｃ予想を証明した望月教授の論文は 700 ページ以上に及び、世界中の数学者がその証明が正しいのかについて、いまだに論争を続けている。このテーマで「ＮＨＫスペシャル」を制作し、放送したことを賞賛したい。専門家の間ですら決着していない難問であり、一般の視聴者が理解できるはずもないのだが、それでも直感的になんとなく問題の本質が分かった気になるような工夫が凝らされていて感心した。科学についてテレビで伝える際は、絵になる映像があるかどうかがポイントとなるが、数学という絵にならない分野を、ＣＧなどを駆使して伝えていてとてもよかった。この番組については専門家の間ではさまざまな意見があるようだが、極めて難解で取り上げにくいテーマを、見応えのある番組で伝えたことを評価したい。

○　４月１６日(土)のＮＨＫスペシャル「＃みんなの更年期」を見た。以前に比べていわゆる専業主婦が少なくなり、女性の体の問題がより深刻になっていることは想像に難くない。また、更年期や生理の問題などは個人差があるので一般的な対処法を伝えることが難しく、これまではつらいと思ってもなかなか言いづらい雰囲気が世の中にあったと思うが、それを払拭(ふっしょく)するような番組ですばらしかった。更年期だけでなく、生理の問題やＬＧＢＴについてなど、これまで言いづらかったことをＮＨＫが取り上げることは意義がある。このような問題に悩んでいるのは自分だけではないということが伝わるだけでも生きる希望を持てる人が増え、ひいては多様性のある社会にもつながっていくと思う。

（ＮＨＫ側）

更年期世代の女性は、仕事や日常生活で多くの不利益を被っている。それが社会的損失になっていることを伝え、議

論のきっかけになる番組にしたいと考えた。今後もよりよい社会の実現に資する番組を放送していきたい。

○　４月１７日(日)のＮＨＫスペシャル「忘れられゆく戦場～ミャンマー　泥沼の内戦～」を見た。ウクライナ情勢の報道はもちろん重要だが、ミャンマーでも同じような悲劇が起こっていることを忘れてはならない。現地の人たちも「ミャンマーのことを忘れないでほしい」と語っている。ミャンマーは内戦状態になりつつあるということで、現地に入って報道することは難しいかもしれないが、戦闘の映像を使用しなくても伝えられることはあるだろう。その意味でもとてもよい番組だった。ミャンマー情勢については今後もしっかりと伝えてほしい。

（ＮＨＫ側）

制作者が持っている危機感を「忘れられゆく戦場」というタイトルに込めた。ウクライナ情勢は極めて重要だが、アジアにある公共放送としてミャンマー情勢についても引き続き取り上げていきたい。

○　「あしたが変わるトリセツショー」を見ている。去年放送されたトライアル版に比べ、落ち着いた番組になったという印象を受けた。石原さとみさんの司会もよく、興味深く見た。４月７日(木)はトマトをテーマにしていたが、日本のトマトの特徴や栄養素の吸収を高める食べ方について紹介していた。実践したいと思うような内容で、効果的だったと思う。トマトの産地である熊本県八代市の農家に焦点を当て、トマトを栽培する様子を丁寧に紹介したこともよかった。一方で、広く流通しているトマトが、甘くて水分が多い特徴を持つよう品種改良されてきた背景についても触れるとなおよかったのではないか。１４日(木)の「アンチエイジング！病を遠ざける３０秒血管ケア」は、南米の人たちの血管が柔らかいことを紹介していたが、その理由まで掘り下げて伝えてほしかった。ショー仕立てのナレーションの語り口やＢＧＭは、やや過剰だと思う。

（ＮＨＫ側）

長年「ガッテン！」を担当してきたチームが制作している番組だ。新しいＮＨＫらしさを意識し、より若い世代にも見てもらうことを意識して番組を制作している。頂いた指摘を受け止め、よりよい番組にしていきたい。

○　３月２７日(日)の日曜討論「ウクライナ侵攻１か月　揺れる国際秩序　日本は」

と時論公論スペシャル「ウクライナ侵攻１か月　世界はどう変わる」(総合 後2:00～3:00)を見た。どちらも内容がよくまとまっていてよい番組だった。ＳＮＳの反響も好評だったようで、ＮＨＫに求められている番組だと感じた。若い世代もこのような番組に価値を感じる時代なのではないか。

（ＮＨＫ側）

ウクライナ情勢についてはさまざまなニュースや番組で伝えているが、「時論公論スペシャル」はより俯瞰（ふかん）して世界を見つめることを重視した。解説委員室にはさまざまな分野の専門家がいるので、専門家の見立てをしっかりと伝えることを意識した。ＳＮＳでは若い世代からも評価の声を頂いた。頂いた意見も踏まえ、今後もしっかりと取り組んでいきたい。

○　３月３１日(木)、４月１日(金)、３日(日)に放送されたガチポリ！若者×政治１０ｍｉｎ「若者の政治参加って必要なの？（１）～（３)」を見た。俳優の鈴木福さんと政治に関わる著名人が対談する番組で、政治についてとても分かりやすく伝えていた。政治離れが進む若い世代が、政治を身近なものと感じられるよい番組だった。ことしは参議院議員選挙がある。ＮＨＫは去年、若い世代の投票率向上に取り組んでいたと思うが、若い世代が投票によって未来を変えていくことができることを伝え続けることは重要だ。この番組のようなコンテンツを、若い世代に向けてＳＮＳなどで戦略的に発信するとよいのではないか。子どもたちに向けたコンテンツとしては、「ＮＨＫ　ｆｏｒ　Ｓｃｈｏｏｌ」がとても充実していて、学校でも活用されている。一方で、高校生から２０代に向けた発信には課題があると思うので、さまざまなＳＮＳのプラットフォームを活用して、良質なコンテンツを届けてほしい。若い世代の政治への関心が薄い背景には、若い世代が興味を持つテーマを政治が扱っていないからだと考えている。そのことも踏まえて、若い世代の政治参加が進むことにつながる取り組みを行ってほしいと思う。

（ＮＨＫ側）

若い世代の投票率は低く、少しでも政治に関心を持ってもらいたいという思いで試行的に制作した１０分間の番組だ。ＳＮＳの活用など、頂いた意見は現場にも伝え、今後の参考にしたい。

○　４月６日(水)のヒューマニエンスＱ(クエスト)「“死”　生命最大の謎」を見た。

小林武彦東京大学教授の解説が興味深かった。人間は死にあらがえない運命であるということが理論的に解説されていて納得感があった。人間は加齢によって生殖機能が失われても、ほかの動物と異なり死ぬまでの時間が圧倒的に長いが、残された時間は社会に貢献する役割を担っているという解釈に納得した。高齢化社会の中で、希望の持てる内容だったと思う。３０分の番組だが、忙しい視聴者も手軽に見られる良質な番組だと思う。

○　４月１５日(金)のアナザーストーリーズ　運命の分岐点「山一破たん　たった１つの記事から始まった」を見た。俳優の松嶋菜々子さんの司会で歴史の真実に迫る番組で興味深かった。山一証券が自主廃業を決め、グループの社員が仕事を失うことになった経緯などが詳しく紹介されていた。当時の関係者の証言や、元社員のその後の活躍なども紹介されていて興味を引かれた。会社の社長の役割や責任についても深く考えさせられる番組だった。

（ＮＨＫ側）

「アナザーストーリーズ　運命の分岐点」は、新作に加えてＢＳプレミアムで放送した回を再編集したものも含めて総合テレビで放送している。有名な事件や人物などを独自の視点で切り取り、新たな着眼点で考える番組だ。しっかりとファクトチェックを行い、良質な番組を制作していきたい。

○　連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」を見ていた。自分の家族の歴史とドラマの設定に重なる部分を感じ、共感をもって興味深く視聴した。それぞれの時代ならではのテーマも含めてさまざまな情報が散りばめられていて、純粋に楽しめるドラマだった。先祖からつながる命への感謝や、次の世代にしっかりとつなげていく大切さを改めて教えてもらった。制作チームの努力を評価したい。

○　連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」を見ていた。よく考えられたテンポのよい脚本で、市井の人たちの喜怒哀楽を描いたいわゆる“朝ドラ”であるにも関わらず、古さを感じさせない新しいスタイルがとてもよかった。若い世代の視聴者に受け入れられる内容だと感じ、ＮＨＫの実力を示したドラマだったと思う。

（ＮＨＫ側）

３代にわたるヒロインというこれまでにない挑戦をしたドラマだ。頂いた意見は現場に伝えたい。

○　連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」を見ていた。終わってしまい、喪失感を覚えている。連続テレビ小説「ちむどんどん」も見ている。料理が中心の話で、レシピを公開してほしいと思っていたところ、ＳＮＳで「＃ちむどんめし」と投稿されているのを見て感心した。また、沖縄角力（ずもう）など、初めて知る沖縄の文化をドラマの中で分かりやすく紹介しているので、ドラマの枠を超え、沖縄の文化を学ぶ意味でも有用だと感じている。ドラマだけでは覚えきれないことや、聞き取れない内容もあるので、「＃ちむどんめし」のようにＳＮＳで番組を振り返ることができるコンテンツをもっと制作してほしい。ＳＮＳでは「図解」というイラストの投稿がトレンドになっている。沖縄角力の歴史やシークワーサーのおいしい食べ方などは図解と相性がよいと思うので、新たな視聴者層にリーチする意味でも、さまざまな取り組みを積極的に行ってほしい。

○　連続テレビ小説「カムカムエヴリバディ」を見ていた。３代にわたる 100 年の物語を５か月余りで放送するので、慌ただしい展開になると思っていたが、話が進むにつれどんどん引き込まれていき、見事な出来栄えに感動した。後半になるにしたがい、さながらミステリー作品のように張られたさまざまな伏線について家族や友人と語り合うなど、改めてテレビドラマを見ることの楽しさを実感した。しっかりと計算された内容がすばらしく、ドラマにおいて脚本の力が重要であることがよく理解できた。３人のヒロインごとに展開にめりはりをつけ、飽きさせない工夫があったこともよかった。

（ＮＨＫ側）

「カムカムエヴリバディ」は 100 年の物語の中でさまざまな伏線を張り、視聴者の興味を引くことを意識したドラマだ。「ちむどんどん」について、食に代表される沖縄文化の情報を分かりやすく発信すべきという意見は現場と共有し、参考にしたい。

○　４月５日(火)の先人たちの底力　知恵泉（ちえいず）「明治維新　大奥の再出発　幕府崩壊　失職女性のたくましい生き方」を見た。個人経営の居酒屋という設定で、店主がお勧めするテーマについて客であるゲストとトークをする番組だ。明治維新で幕府が崩壊し、大奥の女性たちが数多く失職したものの、その後たくましく生き抜いた人がいたことを紹介していた。内容は興味深かったが、ゲストのコメントはやや強引で的外れだと感じた。４月１２日(火)の「明治維新　大山捨松　敗者の再出発　日本初の女子留学生の格闘」も見たが、解説役以外のゲストは不要だと感じた。また、居酒屋という設定にも無理があると思った。

○　４月８日(金)と１５日(金)の「言葉にできない、そんな夜」を見た。ことばにできない気持ちをことばで表現してみようという企画で、１回目のテーマは「懐かしい音楽を聴いたときの気持ち」「春から一人暮らしを始めたときの気持ち」、２回目のテーマは「恋をしたときの気持ち」「好きな人にメッセージを送って待つ間の気持ち」だった。俳優、作家、ミュージシャンなど、ゲストの選定がよく、それぞれの個性が回答によく表れていたと思う。夏目漱石から現在活躍しているアーティストまで、古今東西の小説や楽曲から集められたことばの紹介も興味深かった。ＳＮＳが普及し、誰もが詩や小説を書き、音楽を作り、発表できる時代になった。若い世代の中には、自分の内にとどめず、他人に受け取ってもらえることばや表現への渇望みたいなものがある人も多いのではないか。そうした若い世代にも訴求し、人と人とをつなぐことばの魅力を伝えてくれる番組だと感じた。

（ＮＨＫ側）

趣のある表現をあまり知らない若い世代から、ことばについてふだんから深く考えている人まで、幅広い視聴者に向けた番組だ。去年秋にトライアル版を放送し、４月から定時となった。頂いた意見を参考にし、よりよい番組にしていきたい。

○　３月１９日(土)のザ・ヒューマン「“異彩”が変える～起業家　松田崇弥・文登～」を見た。障害のある作家のアート作品についてライセンス契約し、ブランド化して展開している双子の起業家を特集していた。彼らの取り組みによって、障害のある人が収入を得られるようになり、本人や家族の人生が色彩豊かになっていく様子がよく分かる内容でとてもよかった。この取り組みによってつながりができて障害者雇用が生まれていることなど、さまざまなストーリーを多角的に伝えていて興味深かった。介護など福祉の分野は、いまだに制度や枠組みにとらわれた考えをしがちであると感じているが、この番組からは、もっと自由に楽しんでよいのだということがよく伝わってきた。福祉の分野については、課題を取り上げることはもちろん重要だが、今回のように希望を持てる番組がもっと増えるとよいと思う。

○　４月は番組改定にともなう放送時間変更で、見たいと思っている番組を見逃しやすい時期だ。ＮＨＫオンラインでは、終了した番組や放送時間が変更になった番組を一覧で紹介していて参考になった。ただ、ホームページのデザインは分かりづらく、検索もしづらいと感じている。見たい番組のサイトにもたどり着くのも難しいので一考してほしい。

（ＮＨＫ側）

ＮＨＫオンラインのトップページは４月に一部リニューアルを行った。見やすいビジュアルにしたほか、一般の検索エンジンで検索されやすくなる工夫も行っている。指摘の点については課題なので、できるところから改善を重ねていきたい。

ＮＨＫメディア総局メディア編成センター
番組審議会事務局